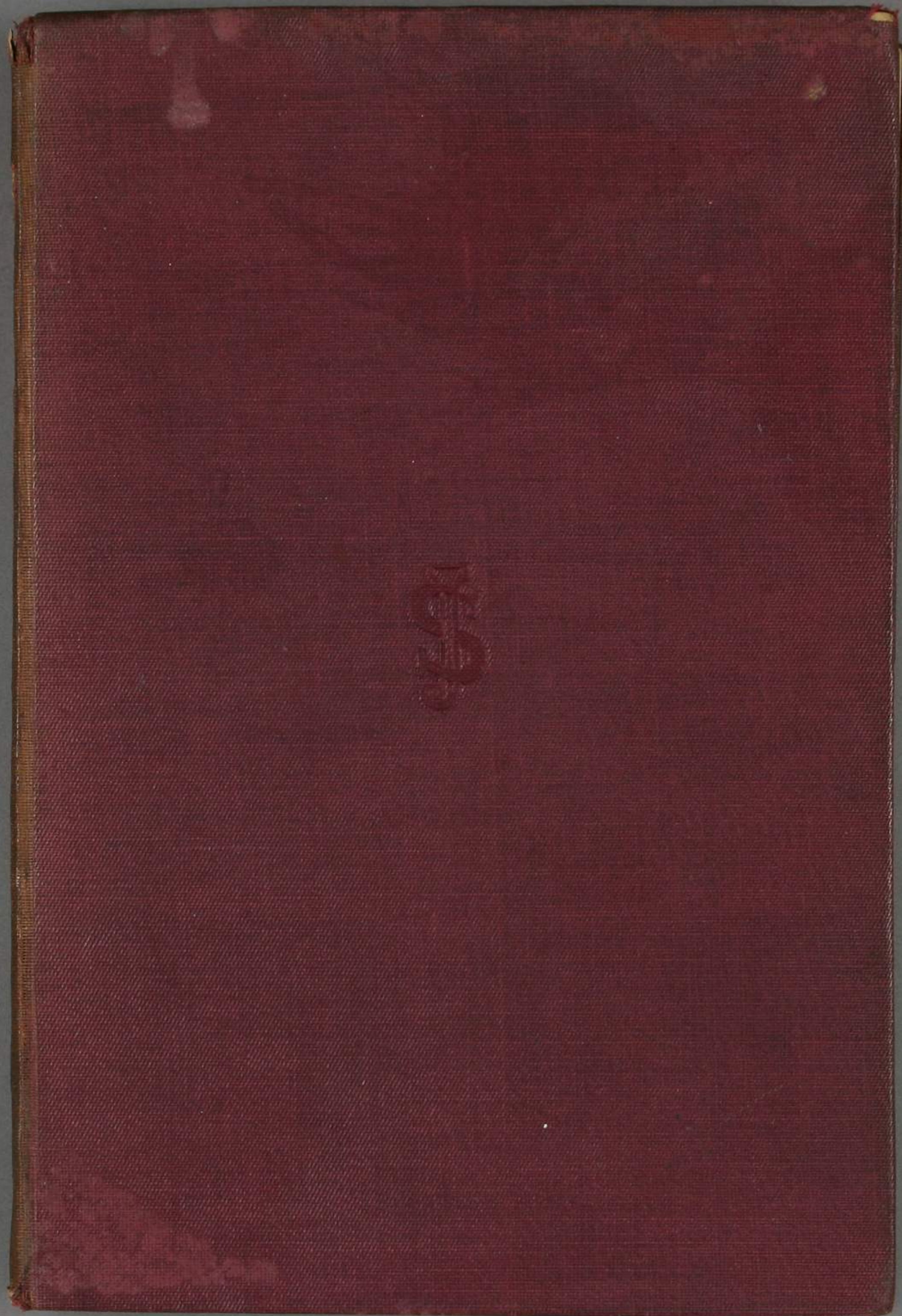
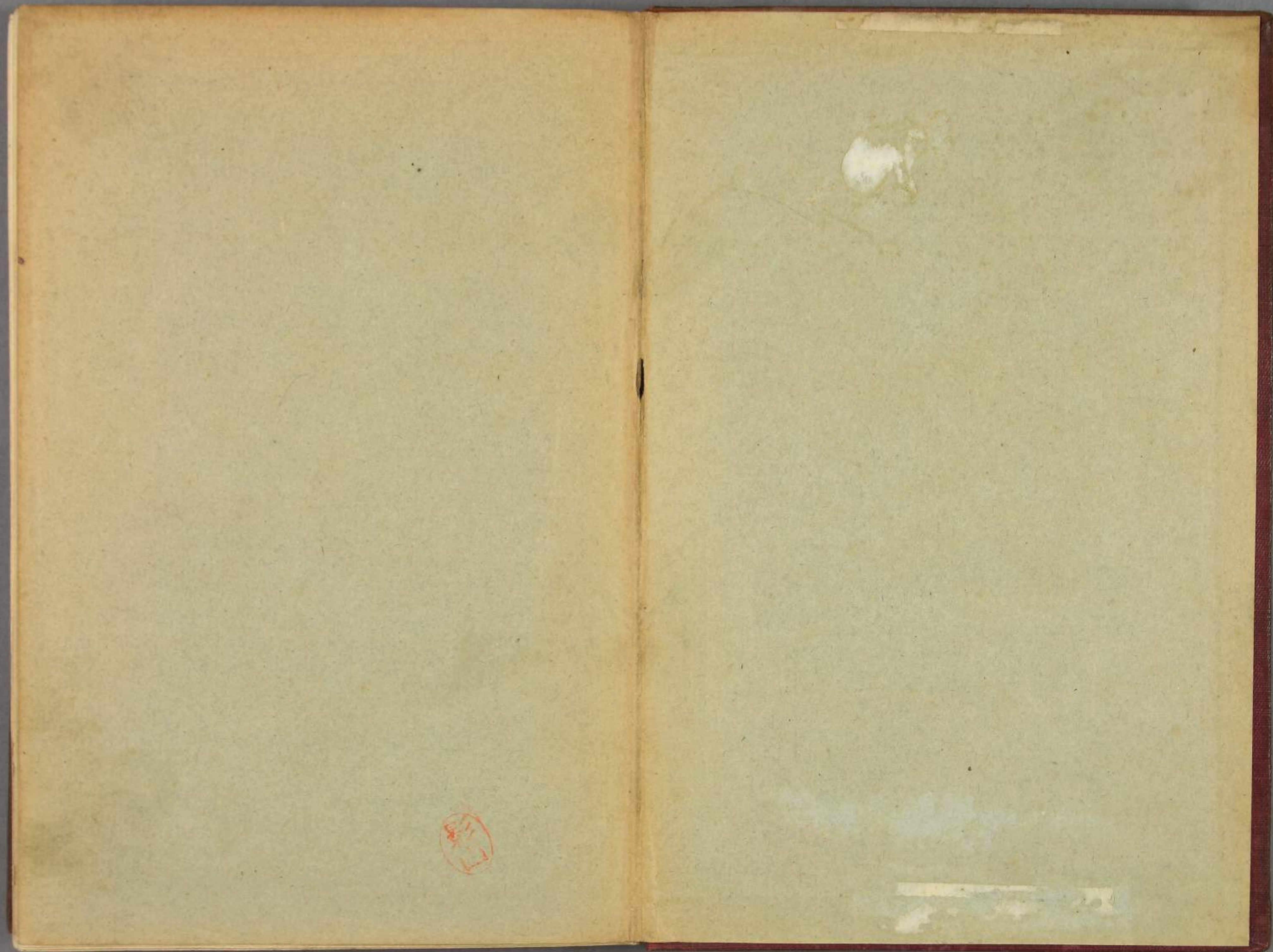
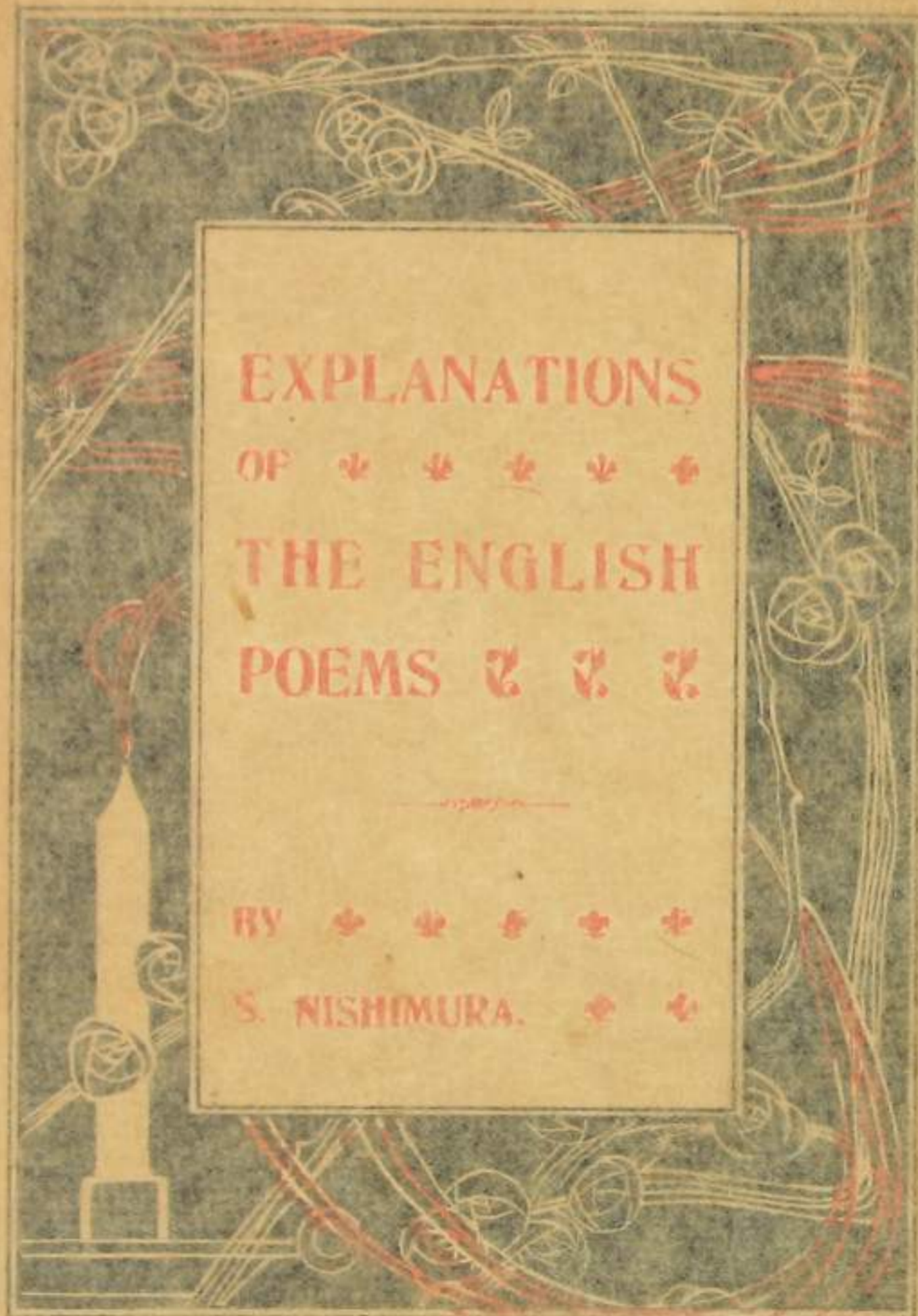


西詩の薫

西村醉夢

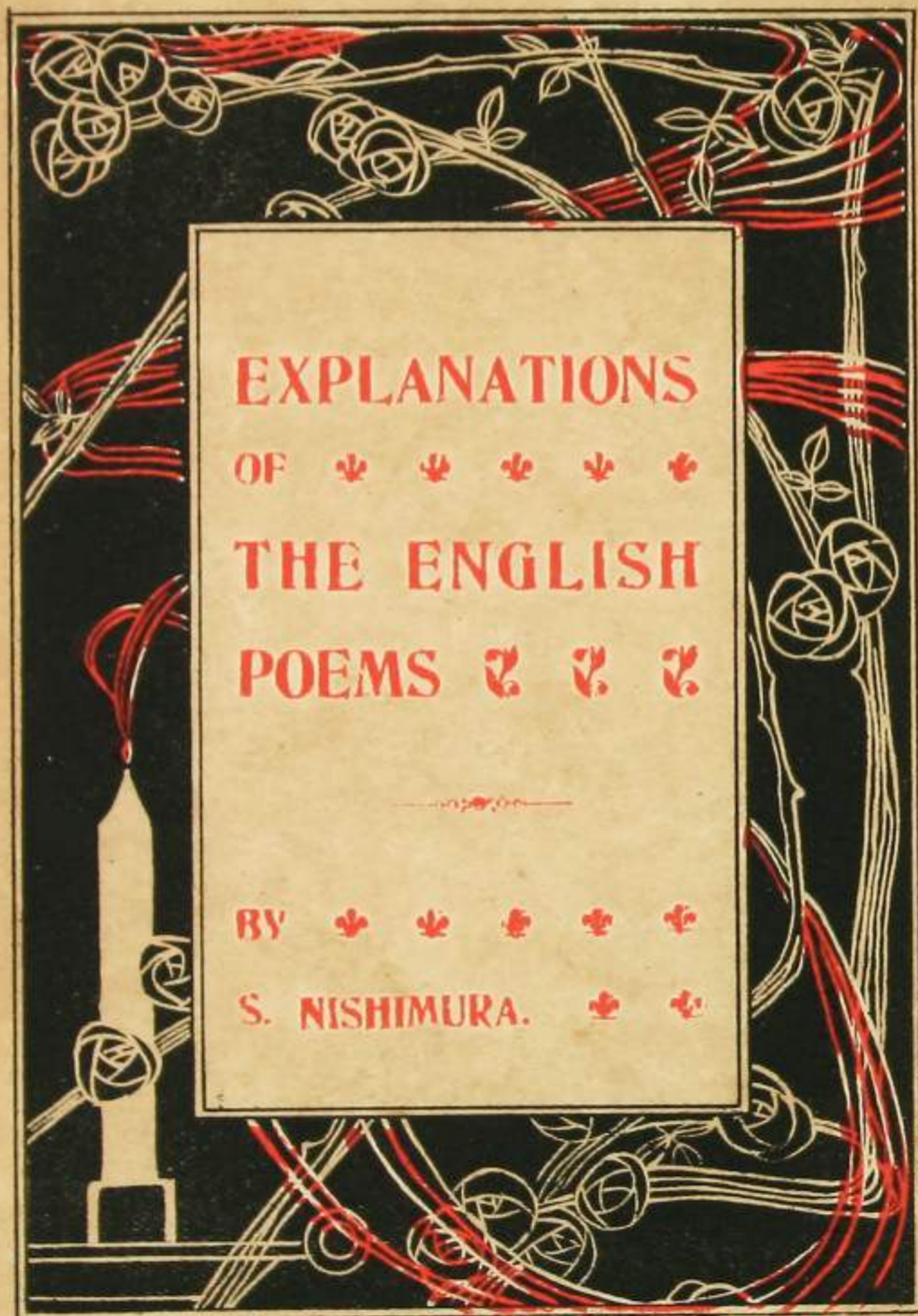






EXPLANATIONS
OF * * * * *
THE ENGLISH
POEMS * * *

BY * * * * *
S. NISHIMURA. * *



EXPLANATIONS
OF * * * * *
THE ENGLISH
POEMS * * *

BY * * * * *
S. NISHIMURA. * *

之は私の習作です。素と弟と姪とに示す爲めに書いたのでありますが、書肆の需に應じて、大膽にも版に上すことにしました。若し中學生諸君の英學研究の資にでも成つたら、此の上もない幸福で御座います。中にはすつと以前に書いたものもあるから、或は間違がないとも限りませぬ、若し有つたら、お教へ下さるやうに願ひます。(著者)



CONTENTS.

I. BURNS	1
The cotter's saturday night.....	1
A red, red rose.....	60
Pleasure.....	66
II. COLERIDGE	71
Morning hymn to Mont Blanc.....	71
The ancient mariner.....	92
Love.....	112
III. SHELLEY	114
Ode to the west wind.....	114
A lament.....	133
To night.....	137
Ode to a skylark.....	149
IV. BYRON	156
The prisoner of Chillon.....	156
My soul is dark.....	205
Remembrance.....	210
V. KEATS	213
On the grasshopper and cricket.....	213
A chill evening.....	220

第三章 シェレイ 一五

戀 一三

老水夫 九三

モンアランの曉の讃歌 七二

第二章 コーレルリッチ 七二

快樂 六七

紅き紅薔薇 六〇

田舎家の土曜の夜 二

第一章 パーンス 二

目録

VI. WORDSWORTH 225

The solitary reaper 225

To the cuckoo 233

Duty 242

VII. SIX POETS 245

Daybreak. (Longfellow.) 245

To the evening star. (Campbell.) 251

The barefoot boy. (Whittier.) 257

Song. (H. Coleridge.) 264

West wind. (Tennyson.) 269

The last leaf. (Holmes.) 273





西風の頌 一一五
 悲しみ 一三四
 夜の神に寄す 一三八
 雲雀の歌 一五〇

第四章 バイロン 一五七

シヨンの囚人 一五七
 わが魂暗し 二〇六
 紀念 二一〇

第五章 キイツ 二一四

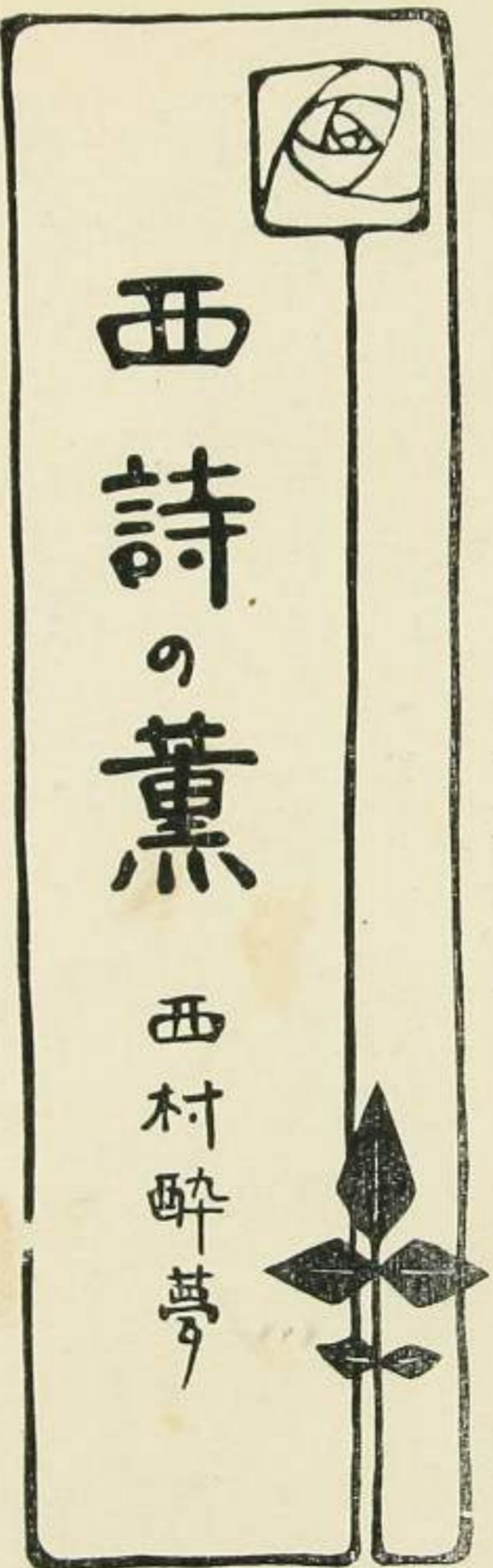
促織と蟋蟀の歌 二一四
 寒き夕暮 二二〇

第六章 オルツォルス 二二六

麥莉處女 二二六
 郭公に與ふる歌 二二三
 道義 二四三

第七章 六詩人 二四六

あけぼの (ロンダフェロウ) 二四六
 夕星に寄する歌 (カメル) 二五二
 徒歩せる子 (ホイッチャア) 二五七
 短歌 (ハートリイ、コールリツヂ) 二六四
 西風 (テニスン) 二六九
 残んの木葉 (ホルムズ) 二七四



西詩の薫

西村醉夢

I. BURNS.

THE COTTER'S SATURDAY NIGHT.

INSCRIBED TO R. AIKIN ESQ.

I.

My lov'd, my honour'd, much respected friend!
No mercenary bard his homage pays:



With honest pride I scorn each selfish end;
 My dearest need, a friend's esteem and praise:
 To you I sing, in simple Scottish lays,
 The lowly train in life's sequester'd scene;
 The native feeling strong, the guileless ways;
 What Aikin in a cottage would have been:
 Ah! tho' his worth unknown, far happier there, I ween.

第一章 バーンズ

田舎家の土曜の夜

エイキン氏に献ぐ

第一

わが敬愛し尊重する友よ、
 商人氣質の詩人にして敬虔の念を有するものはあらず、
 吾は矜誇の情をもて賤しき目的を輕悔す、

わが尊重する所の報償は友も亦た重尊し賞賛せん。

吾今汝が爲に蘇格蘭の單純なる調もて謳ふ、

その謳ふところは人の境を遠く離れたる片田舎の人の、

強き感情や詐りのなき振舞なり、

そはエイキン君にして田舎に住まば又應に持つべかりけん。

あはれ田舎人その名は知られねど、吾思ふ彼には幸ありと。

R. Aikin と云ふのは、詩人の友達で、エールに住んでゐた辯護士であります。

興趣の深い、趣味を解した人であつた相です。第一行は、バーンスが、エイキンに呼びかけた言葉であります。No mercenary bard は商買根性の詩人の意、即ち報酬の觀念によりて動く詩人なのであります。

need と云ふのは、Reward のことす。この行は、My dearest need の次へ is と云ふ文字を入れて解釋すると、よく意味が取れます。それから第五行目の I sing

の次へ、第六行目の *The lowly train* . . . をついでに解釋すると、謳ふオブゼクトが分ります。In simple . . . は *sing* の副詞的詞句であります。第七行は、六行と同格卽ち、アツボジションである、第八行の *What* は、上行の感情と振舞との二つを受けてゐます。

tho' は *though* の畧で、*his worth* とは、人生のかけ離れたる舞臺にゐる人、卽ち田舎人を指いたのであります。忘れてゐたが、第六行の *Life's sequester'd scene* は「人生のかけ離れたる舞臺」の意、卽ち僻地のことを指いたものです。最後の行の *far happier* は、浮世では價打もないやうに見られてゐるけれども、心的——精神的には幸福な人だとの意、*I ween* とは、*I think* の意で御座います。この一節は序言のやうなもので、後章の土曜日に於ける百姓家の有様を描き出す準備として記したものであります。

II.

November chill blows loud wi' angry sigh:
The shortning winter-day is near a close;
The mny' beasts retreating frae the pleugh;
The black'ning trains o' craws to their repose:
The toil-worm cottaer frae his labour goes,
This night his weekly mool is at an end,
Collects his spades, his mattocks, and his hoes,
Hoping the morn in ease and rest to spend,
And weary, o'er the moor, his course does homeward bend.

第二

霜月の風は怒りて颯々と吹き、
短かき冬の日は將に暮れんとす、
泥に塗れし家畜は畑より歸り、
黒き鴉の群はその時へと急ぐ。

此の夕べ一週間の苦役を終へて、

労働に疲れたる農夫はかへりゆく、

鍬や鶴嘴や鎌やを收めて、

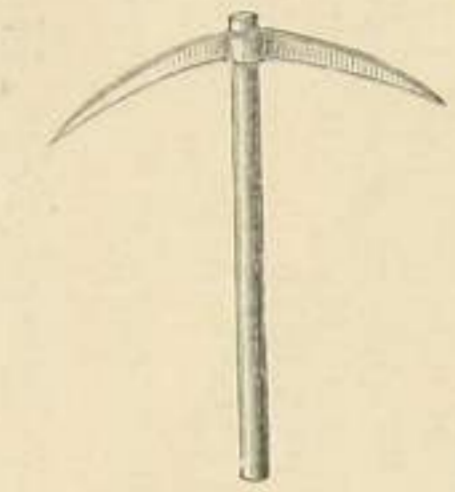
彼は易けく疲れを休めん朝をば望む。

そのゆく道は沼を超えて家に向へり。

Wiz は例の通り、will の略であります。日本でも「風濤怒號」などと申しますが、實際風の聲はさも怒つてゐるやうに聞えるものです、殊にスコットランドわたり、北海に近い處では、その音が他より烈しからうと思はれます。Sigh と云ふのは寫聲的 (Onomatpoetic) であつて、日本の「ざわ／＼」と云ふのに當り、支那の「颯々」と云ふのに當ります。第二行目の is near a close は「終に近し」と云ふのですから、「將に暮れなんとす」と譯するのがよろしいです。

第三行目の miry は、Soiled with mud or wet clay で、泥塗れの意、frae はスコットランドの方言で、英語の from と同ことであります。○ craws は即ち、of crows のこと、第五行目の cotter とは、農夫のことです。六行目の moll と云ふのは、Drudgery, hard labour のことです。本行の意は、

此の夜が土曜日で、明日は日曜、恰度一週間の終りに當つてゐるから、農夫の労働が此の夜で終りを告げたと云ふのです。This night . . . を中にはさんで、Collects 云々のサブセクトを、The toll-worm cotter とすると、意味がとれよいのです。mattock と云ふのは、鶴嘴のやうなもので、地を柔かくする爲めに使ひます。日本では「齋口」と云ひます、鶴の嘴と餘り違つては居ませんです。



over と云ふのは、over のことで、「沼の彼方に」と云ふ意味に成るので御座います。最終の行は、his course does bend

hame-ward over the moor. とすると意味が取れ易くあります、hame-ward は英蘭土の homeward と同様です、スコットランドでは、○ がに成

ること多くあります、たとへば、 frae (from) hame (home) craws (crow) などの如きは、皆なその例なのであります。

III.

At length his lonely cot appears in view,
Beneath the shelter of an aged tree :
Th' expectant wee-things toddlin,' stacher thro'
To meet their dad, wi' flichterin' noise an' glee,
His wee bit ingle, blinkin' bonnily,
His clean hearth-stane, his thriftie wife's smile,
The lispin' infant prattling on his knee,
Does a' his weary, carking cares beguile,
An' makes him quite forget his labour and his toil.

第三

彼の淋しき伏屋は遙かなる彼方、
老木の下にこそ見ゆれ、

待ち焦れたる幼子はちよこくと歩み寄りて、
甘へたる口調、喜ばしげなる面持にて父を迎へぬ、
かくて子は火を點すれば美はしく映えてぞ輝く、
清けき爐の石と、つましき妻の微笑と、
舌もつれしつゝ、彼の膝に上りて喋舌する稚子は、
疲れて苦しき彼の愛を紛らして、
悉くその勞苦を忘れ果てしむ。

appears in view と云ふのは、「眼界に入る」と云ふ意味です。第二行は、老木が茂つて、架のやうに成つてゐる下にと云ふ意、第三行の Th' は the の畧であります。又 expectant は、waiting, looking out for と同じく、「待つてゐた」との意です。wee-thing は children の事、toddlin は toddling で小供の歩みのやうに、よろこ、ちよこくとすること、「千鳥足」などと云ふのに當ります、thro' は

through の略、stacher は stagger のスコットランド訛りであります。

第四行目の dad は father のこと、Fichterin' は fluttering の訛なり、畧なりで御座います。wi' の with たることは、これまで申しあげて置きました。また Ingle と云ふのは「火」即ち fire のことであります。その次の字 blinkin' は shining by fits, out and in. と或る本には註釋してあります、「輝く」とても譯すればよう御座います。

第八行目の Does beguile のサブゼントは、六七の二行であります、即ち、hearth-stane, wife's smile, lispig infant の三つで御座います。Stane は例の通り Stone のなまら、prattling は小供らしく語ること、a' は all の略です、最後の二行は Does beguile all his weary, carking cares, and makes him... とすると分り易くなるのです。

IV.

Belyue, the elder bairns come drappin' in,
At service out, among the farmers roun':
Some ca' the pleugh, some herd, some tentie rin,
A cannie errand to a neebor town:
Their eldest hope, their Jenny, woman grown,
In youthfu' bloom, love soarkin' in her e'e,
Comes home, perhaps, to show a braw new gown,
On deposit her sair-won penny fee,
To help her parents' dear, if they in hardship be.

第四

近き野面にて働きたりし、
長子はやがて歸り來れり。
彼は時として耕牛を叱し群畜を追ひ、又時として雇はれて、
使者となりて隣村へゆくに信用ある若人なり。

稚子わかごの姉あねは名なをゼンニイと云ひ、

早はやや長ながじて今いまは妙齡せうりやう、戀こひこそはその眼めに閃ひらめけ、

彼女かのぢやうは今いましも來きたりぬ、そは新あたらしの晴衣はれぎを見みせん爲ためめ、

或あるは機織はたおりて得えし端金はしたがねを預あづけん爲ためめ、

或あるは貧まじしき兩親ふたなやを扶たすけん爲ためめ。

Belyve とは By and by, soon の意にて「やがて」と譯すればよろしう。Come drappin' in は「そこに落ち合つた」と云ふ意。第二行目の roun' は round の略でありますから「附近」と云つたやうな意を持つてゐます。第三行目に在る ca' は drive のことで牛などを追ふことでもあります。tentie rin は Diligently rize で「注意して走る」の意です。

第五行目の Their eldest hope. Their Jenny-woman grown. は三つとも同格で、

第七行目の comes... の主格に成るのです。そして第六行の In youthfu'... は

中に挟まれた句と見ればよろしい。youthfu' は youthfu' の略、In her eie は eye の略で御座います。

hame は前にも云つた如く home であります、a braw new gown とは「美しい、新らしい表衣」と云ふ意味で御座います。第八行の Deposit her sair-won penny fee は、「彼の女が苦しみ苦しんで、機を織つて儲けた二錢三錢の小使を、預け置く」と云ふ意味になるのであります。最後の行は he order to help her dear parents, if they be in hardship. と書き直して讀んで見ると、解釋し易い。此の節では、長子のこと、長女のことを描いてありますが、骨子とも云ふべきは此の娘 Jenny んであります。

V.

Wi' joy unfeign'd, brothers and sisters meet,
And each for other's welfare kindly spiers:
The social hours, swift-wing'd unnotic'd fleet:

Each tells the uncocs that he sees or hears;
 The parents, partial, eye their hopeful years;
 Anticipation forward points the view;
 The mother, wi' her needle an' her shears,
 Gars auld claes look amaist as weel's the new;—
 The father mixes a' wi' admonition due.

第五

兄弟姉妹は心からなる喜を以て會し、
 互みにその平安を問ひぬ、
 樂しき時は翅を伸べて疾く飛べり、
 互みに彼等は見聞せし新事物について語りぬ、
 眞負目もて彼等の行く先を見る、
 兩親の目は先見をもて導かれぬ。
 母は針と鋏を持ちて古き衣を縫へり、

みな殆んど新らしく見ゆ。——

父はまた彼等に適はしき助言を與へぬ。

wi' joy unfeign'd は "with their sincere joy" と云ふ意で、心から喜んで、ブラザアと、シスターとが會合してゐるとの事です。wellfare は welfare のなまり、spiers は asks, inquires の意で御座います。

Social hour は domestic hour のこと、即ち、「家庭團樂の樂しき時」の意であります。また fleet は To fly swiftly, to hasten と辭書に書いてあつて、快飛すること御座います。第四行目にあるところの The uncocs は "News" のことであり、最一つ悉しく申さば uncommon incidents で耳新らしき出來事の意で御座います。

第六行目の意味は、親がひいき目で子供等のゆく先を見るもんだから、何うも末が旨く行くやうに見えて、少なからぬ希望を囑すると云ふやうな事です、その

eye とは 眼の意、partial とは 偏り、
 wi' は with の略、an' は and の略であります。第八行目の Gair's auld claes
 look amaiat as weel's the new はスコット語が多いから分りにくいのですが、これは
 makes old clothe look almost as well as the new と同く、a' は all の略
 の admonition due とは Suitable advice のこと。

VI.

Their master's an' their mistress's command,
 The younkens a' are warned to obey;
 "An' mind their labours wi' an eydent hand,
 An' ne'er, tho' out o' sight, to jank or play:
 An' O! be sure to fear the Lord alway!
 An' mind your duty, duly, morn an' night!
 Lest in temptation's path ye gang astray,
 Implore his counsel and assisting might:
 They never sought in vain, that sought the Lord aright!"

第六

主人と家妻との命令には、
 従へよと若者は戒められぬ。
 『常につゝしみて手を働かして勤勞に従事し、
 人の見ぬ處にても遊び戯るゝこと勿れ、
 常に神を畏れよかし、
 朝と夕には必らず祈禱を捧げよかし、
 然らざれば汝は誘惑の道に陥らん、
 只だ神の教とその保護の力とを頼め、
 心正しく神を求めて、空しく求むること勿れ。』

第一行の始めに「T」の字を加へ、全行を第二行の次へ入れるとよく分ります。
 master and mistress は両親のことを指して云つたものです。younkers a' は、young-

sters all のことば are warned は「戒しめられた」と云ふ意に成ります。

wi' an eydent hand は with an diligent hand と云ふことです。第四行の意は、Do not go to jank or play, though you are out of sight. と云ふに均しく、"out of sight" は人目の外に在ること、即ち、人の見ぬ所のことを云つたのです、又た jank とは、Dally, trifle の意で、「戯れる」と譯して置けば可いのです。

六行目の Your duty は your prayer の意で、「祈禱」の事をさいたのです。Sang astray とは、Go wrong, become bad と云ふが如き意、最後の行は、空しく物を求めざれ、正しく神を求めよと云ふの意で御座います。田舎家の中の、正しき、質素なる、宗教的な様子がよく現はれてゐて、面白う御座いますから、益々面白くなつて來ます。こゝまではまた序言のやうなものです。

VII.

But hark! a rap comes gently to the door;

Jenny, wha kens the meaning o' the same,
Tells how a neebor lad cam' o'er the moor,
To do some errands, and convoy her hame
The wily mother sees the conscious flame
Sparkle in Jenny's e'e, and flush her cheek;
With heart-struck, anxious care, inquires his name,
While Jenny' baffins is afraid to speak;
Weel pleas'd the mother hears, it's nae wild, worthless rake.

第七

さはれ聞けほとくと戸を叩く音、
その何者なるかを知れるゼンニイは、
語るらく、こは隣村の若者沼を超えて、
使ひに來し途すがらわが家を訪へりと、
目ざとき母はゼンニイの目に輝ける、

情火の影と紅潮す頬の色とを見て、

胸とゝろかしつゝ、憂はしげに男の名を問ふ。

ゼンニイが語るに臆して口噤める間、

母は客人の粗暴ならざるを見て心を安んじぬ。

hark! は hear! と一緒に「聞けかし」との意で、a rap は a bit 即ち「叩く」と
でありませぬ。wha kens とは、who knows の方言、o' the same とは of the same
で、「その何の意味なるかを知つてゐる」と云ふ譯に成ります。

第三行目の neebor lad とはスコットランド語で、英語では、neighbor lad 即ち
ち、隣村の若者と云ふ意味であります。can' o'er は came over の略であります。
第四行目の To do some errands は「使をする爲めに」と云ふ意、convoy her hame
は、accompany her home と同一です。

第五行 wily は、knowing のことで、「目ざとさ」とか、「よく知りわかる」とか
「うかゞひ知りたる」とかの意。Sparkle と云ふのは、上行の flame を受けたの
で、heart-struck とは「とゞろかされたる胸」即ち、どきどきと動悸の高くなつ
たことを云ふのです。第八行の halflins と云ふのは partly in a half-and-half man-
ner と註釋してあつて、その意味は「少々」とか「幾分か」と云ふ意味を持つてゐ
ます。

第九行の主格は、同行の the mother でありまして、「母は、男の悪くないのを見
て安堵した」と云ふ意味で御座ります。これを分り易く註釋して見ると、The mo-
ther, hearing that the lad is neither wild, nor worthless, so was pleased. となりま
す。it's nae は、It is no の略、また Weel は well のこと、rake と云ふのは、
fellow のことで御座います。

本節は「ゼンニイの戀人たる若者を拉し來つて、單調なる土曜日夜の賤が伏屋
へ、美しい花を咲かすのであります。つまり此の男は途すがら、ゼンニイの家を

尋ねたのですが、ゼンニイはよくその男の來ることを知つてゐたので、語るのを遠慮して、をづくしてゐたのでしやう。すると母は目ざとくも、はゝあ、これは吃度娘の戀人に相違ないと、驚いて外を見ると、あんまり、粗野な男でなかつたものですから、これならば安心と云ふ處を描いて、僅か九行で充分に眞景を躍動さしてゐますのは、わがバーンヌの手腕で御座います。The wily mother sees the conscious flame sparkle in Jenny's eye などは誰しも諷はんとして、得諷はざるところであります。

VIII.

Wi' kindly welcome, Jenny brings him ben ;
A strappin' youth ; he takes the mother's eye ;
Blythe Jenny sees the visit's no ill ta'en ;
The father cracks of horses, ploughs, and kye.
The youngster's artless heart o'erflows wi' joy,
But blate and laithfu', scarce can weel behave ;

The mother, wi' a woman's wiles, can spy
What makes the youth sae bashfu' an' sae grave ;
Weel pleas'd to think her bairn's respected like the lave.

第八

ゼンニイは歡び迎へて男を奥の間に導きぬ、
彼は丈高き好男子、母人の眼の色を解みぬ、
ゼンニイは男の氣色を損せざりしを知りぬ、
父は馬や鍬や牛について語りぬ。
若者の世慣れぬ胸には喜び溢れぬれど、
温和しく、恥かしく、如何にせん術を知らず。
母は流石に年老いたる女の事として、何故に彼が、
かく含羞み、かく眞面目なるかを窺知ひて、
娘の戀人の立派なるを喜びぬ。

Wi' kindly welcome は「心から歓迎して」の意、また Ben は奥の室のことでありませぬ。strappin' とは、tall and handsome ですから、美少年とでも譯しますが、三行目の Blythe は cheerful の意味、the visit's... 云々は、the visitor have not taken it ill と同じく、「氣拙く思はなかつた」と云ふことで御座います。

四行目の cracks は、converse 即ち話することでありませぬ。kye とは cow の乳、蘇國の方言で御座いますやう。o'erflows wi' は、overflows with の略、blate and laithfu' は、modest and bashful と同じで、温和くして、はにかむ事を指いたのであります。六行目の scarce can weel behave と云ふは he can not well do" の意で、scarce は scarcely の如く、副詞的に使つてあります。

第八行目の sae は so の訛言、grave は真面目と云ふ意であります。第九行の lave は other fellow の意、本行の意味は、she is pleased to think that her daughter has a respectable lover like her neighbours. と云ふやうな譯になるのであります。

IX.

O happy love! where love like this is found!
 O heart-felt raptures!—bliss beyond compare!
 I've paced much this weary, mortal round,
 And sage experience bids me this declare—
 "If heaven a draught of heavenly pleasure spare,
 One cordial in this melancholy vale,
 'Tis when a youthful, loving, modest pair,
 In other's arms, breath out the tender tale,
 Beneath the milk-white thorn that scents the ev'ning gale."

第九

あはれ幸ある戀人よ、何處にかかゝる戀を探せし。
 あはれ胸に漲る喜びよ——比なく幸はへかし。
 われ久しく惨たる人間界を歩みしが、
 賢しき經驗は吾をして公言せしむ——。

『天若し一滴の天の歡樂を分たば、

人は憂の谷に慰められん。

見よ此の相愛せる若く、温和しき二人は、

夕風を薫らす乳白の花の下、

互に腕をとりて胸の温情を語り合へるを。』

本節は詩人が、感極まつて、自分の感情を舒べたのであります。今まで敘事的筆法であつたのが、茲で一轉して Lyrical tone を現はしました。rapture は joy の意、bliss は、happy の意であります。mortal round は人間界の意で、paced は walked 卽ち「歩む」こと、ペーセッドと發音します、それは詩の調子の爲めで御座います。

a draught は「一滴」の意、sage は wise の意であります。また cordial は、comfort の意味で、天の快樂の一滴は、よく憂愁に沈める人間を慰むるとの意で御座い

ませ。 breathe out は、talk each other の意、that...云々は花を形容したもので、that give the fragrance the evening breeze とすると、其の意味がよく分るのであります。

日本では「憂の淵」と云ふやうなことを、西洋では「憂の谷」とか「涙の谷」とか、兎に角 "vale" と云ふ字を多く用ゐます。最後の行の thorn は、刺ある植物、荆棘などの意、こゝでは茨、薔薇と解すればよろしい。又前に thorn-apple と云ふのがあつたが、これは「蔓陀羅花」卽ち「てうせんぎく」のことを指すのであります。

X.

Is there, in human form, that bears a heart—
A wretch! a villain! lost to love and truth!
That can, with studied, sly, ensuaring art,
Betray sweet Jenny's unsuspecting youth?
Curse on his perjurd' arts! dissembling smooth!
Are honour, virtue, conscience, all exil'd?

Is there no pity, no relenting ruth,
Points to the parents fondling o'er their child?
Then paints the ruin'd maid, and their distraction wild?

第十

あはれ世に情や誠を失へる悪人奸徒——
その胸に一種の悪念を懐くものあつて、
巧みなる権謀術数を以て、この美しくしきゼンニイの、
疑はざる心を欺くことあらんか。
天の咒はその権謀、その滑たる欺言の上にあらん。
名譽、道徳、良心、豈悉く人より去らんや。
天下矣んぞ惻隠哀憐の情を抱く者あつて、
子を愛する親の心に思ひ及ぼし、
滅びし娘や、そを墮落せしめしものを描かざらんや。

始めの二三行は次のやうに直して見るとよく分ります。即ち、
"Is there, in
human form, a wretch (a villain) who has been lost to love and truth, and bears a
heart that can betray sweet Jenny's unsuspecting youth with the studied, sly, ensuar-
ing art?" と書き直しますと、大變によく分ります。

studied は、premeditated のこと、ensuaring art は権謀術数と云ふ事、また unsus-
pecting youth と云ふのは、「人を疑はない若やかな心」と云ふ意味です。人はまだ
おぼい時には、思想が單純でありますから、邪推して人を疑ふやうなことは御座
いませんけれども、段々と世慣れるに従つて、情が複雑になつて來ますから、自然
人を疑つたりするのです。dissembling smooth と云ふのは、滑らかなる嘘言で、旨
く云つて人を欺いたりすることを云ふのです。

第三行目の all exil'd の次へ from man と入れると此の行の意味が分ります。第
八行の points と云ふ動詞は、第七行の pity and ruth を受けたのですから、ポイン

ツの前へ that を加へると意味がとりよ。 their distraction wild な、 man who makes the maid degenerate. と云ふ意味で「粗野な少女の攪亂者」と云ふ風に譯すればよい。

XI.

But now the supper crowns their simple board,
The halesome parrich, chief o' Scotia's food:
The sowpe their only Hawkie does afford,
That 'yont the halan snugly chows her cood;
The dame brings forth in complimentary mood,
To grace the lad, her weel-hain'd kebbuck fell—
An' aft he's prest, an' aft he ca's it guid;
The frugal wife, garrulous, will tell,
How 'twas a townmond auld, sin' lint was i' the bell.

第十一

今や夕餐の食料は彼等の質素なる食卓を蔽へり。
その滋養に富める粥こそは蘇格蘭の重なる食料、

その少やけき吸物は、中仕切の彼方にて、
今しも反食する牝牛のさげ物。

家妻は若者をもてなさんと恭々しき態度にて、

心して保存せし乾酪を持ち來りぬ——

男は強ひられて呑み禮辭を述ぶるや、

饒舌にして節儉しき妻は語るらく、

こは麻の花咲く頃貯へられて早や十二月を経ぬ。

crowns は、cover の、 simple board と云ふのは質素にして飾りけなき食卓の意、
第二行目にある halesome parrich は、wholesome porridge のなまりでありまして、
「養生に食ふ粥」とでも譯したら可いでしやう、スコットランド人のよく食べる物で
す。Hawkie とは cow 即ち牝牛のと、sowpe とは俗に云ふスープのと、茲では牛乳
を指いたのです。

'yont は、beyond の畧であり、that は上行の Hawkie を受けたのであります。
snugly chows her food. は「牛がうれしげに自己の反食を咬んでゐる」と云ふ意味
で御座いますが、御存知の通り、牛と云ふものは、夜になると、書食べた物を吐き
出して、また食べ直すのであります、反食と云ふのは即ちそれの事です。in com-
plimental mood とは、「うやくしげなる様」、即ち「仰山らしく」と云ふ意味で
す。hallan は小屋と、臺所の戸の間に在る隔てであります。

Grace は賞すること、weel-hain'id は、carefully preserved で「大事に取つて置く
こと」であります。また kebbuck は、cheese のこと、aft は after の略字、ca's は
says の訛り、guid は good と同一意味で御座います。'twas は it was の略、auld
は old の訛、sin' は since の略、'is は in の略字、bell は「花時」の意 bloom と同
一であります。

XII.

The cheerfu' supper done, wi' serious face,
They, round the ingle, form a circle wide;
The sire turns o'er, wi' patriarchal grace,
The big ha'-Bible, ance his father's pride;
His bonnet rev'rently is laid aside,
His lyart haffets wearing thin an' bare;
Those strains that once did sweet in Zion glide,
He males a portion with judicious care;
And "Let us manship God!" he says, with solemn air.

第十二

たの
樂しき夕餐は眞面目なる顔して濟まされ、
かれら
彼等は火爐を圍んで圓座をつくりぬ。
ち、
父は家長の資格もて、曾てはその父が誇りとせし、
い、
家傳の聖書を取り出しぬ。

その帽子の恭々しげに脱ぎ去らるゝや、

灰色の頭髮の薄く禿げたる見ゆ。

嘗てシオンに漲りけん讃歌の中、

一章を彼は注意して選びつ、

『われ等をして御名を讃へしめよ』と嚴かに云ひぬ。

第一行の cheerful は cheerful の略、wi は with の略字であります。第二行目の round は、rounding とやうに中止的語法を用ゐてゐます。ingle は爐火のこと、form は make で圓座を形造りぬとの意。第三行の Sic は父のことを指いたのです。

第四行の ha-Bible は、have Bible の略で、祖先傳來のバイブル家つきの聖書と云ふことです。日本でよく云ふ「傳家の寶刀」などは、“home-sword”とでも云へばよろしう御座いますやう。ance は once のなまり、その前へ that was と入れると、そのバイブルが、今よみかける父の父、即ち子供より見れば祖父さんが誇りにしてゐたものだと言ふことが分ります。

reverently は、reverently の略字で、「恭々しげに」と譯すれば可い。His bonnet の前へ when を入れて見るとよく分ります。Iart は、gray 即ち灰色、haffets と云ふのは、half-head の訛でもあらうか、The side of the head と註釋してあります。that once …… 云々は、此の讃歌は兼て、シオンの山のわたりに謳はれて、聲高くと響いてゐたであらうとの意、sweet は sweetly として副詞に見る方がよろしう御座います。males と云ふのは、selects の意、air と云ふのは、appearance 即ち「様子」「態度」「顔付」などの意味を含んでゐます。

XIII.

They chant their artless notes in simple guise;

They tune their hearts, by far the noblest aim:

Perhaps Dundee's wild warbling measures rise,

Or plaintive Martyrs, worthy of the name,

Or noble Elgin beats the heav'nward flame,
 The sweetest far of Scotia's holy lays:
 Compar'd with these, Italian trills are tame;
 The tick'd ears no heart-felt raptures raise;
 Nae unison hae they with our Creator's praise.

第十三

質朴なる面持して彼等は拙なく歌を歌ひ、
 高き望もてその胸を調ふるらし。
 歌ふは何、ダンヂイは朴素顛高、
 マーチーアは老實にして名詮自稱、
 エルジンは高尚にして天の靈光を殖す。
 崇美なるかなスコットランドの頌歌。
 これに比ぶれば伊太利のは劣れり、

そは耳を擦ぐるのみにて情を昂めしめず、
 はた創造主を讃するに適はじ。

chant は sing のこと、guise は、appearance のこと、They tune their hearts は歌
 を歌ひて彼等の胸を節附けるの謂であります。第三行の warbling はうち顛へるこ
 と、rise は聲高きことですが、Dundee, Martyr and Elgin の三者共にスコットラン
 ドの讃歌の曲調 (Psalm tunes.) で御座います。worthy of the name と云ふのは、
 「名詮自稱」の意、マーチーアの調子が、老實であつて、その名のマーチーア (Martyr
 は殉教者) と一致してゐますとの意で御座います。

第五行の beats は increases の義であります、第七行目の are tame は、スコット
 ランドの歌が、are wild なるに對して云つたもので、よく人馴れ、みやびで、繊細
 で、人工的なのに、わが蘇國の歌は、粗野で、質素で、雄大で、自然であるから、
 それを伊太利のに比べると、わが方が勝つてゐるとの意です。trills は song と同じ

ことで御座います。第九行の *Nae unison hae* は、*No harmony have* の訛言であり、
すが、本行の全躰の意味は、*“they (Italian trills) are not able to praise our Creator.”*
と云ふが如く、伊太利のは造化を讃する歌としては適はしからぬ、それはわが國の
歌に限るとの心地です。

XIV.

The priest-like father reads the sacred page,
How Abram was the friend of God on high.
Or, Moses bade eternal warfare wage
With Amalek's ungracious progeny;
Or how the royal bard did groaning lie
Beneath the stroke of Heaven's avenging ire;
Or Job's pathetic plaint, and maling cry;
Or rapt Isaiah's wild, seraphic fire;
Or other holy seers that tune the sacred lyre.

第十四

長老らしき父は聖典を繙き讀みぬ。

アブラハムは天にて神の友となれり、

モーセは不仁なるアマレクの裔と、

永久の戦をこゝろみたり、

王に侍する詩人は復仇の如き神怒の、

打撃の下に呻きつゝ死したり、

ヨブの叫びは悲哀、忠實、愁嘆の情に富めり、

イザヤの言は粗野崇高にして熱情あり、

その他の豫言者また皆神聖なる詩を誦せりと。

The priest-like father と云ふのは、「牧師らしき父」と云ふ意、*on high* は、*on the*
heaven とひとしく「高天にゐます」の意、*bade* は *order* の意で御座います。第三
行の終りの三字は倒置句で、「*tried eternal battle*」の意となるのであります。

wage は *lyre* と同一意義です。

アマレクは、エソウの孫でありまして、ヤコブには兄弟にあたります、よくない性の人で、神の教を奉ずる人共から拒絶されました。Bard とは poet の事で、royal bard は普通には宮廷詩人と申します。He と云ふのは怒りのことでもあります。

pathetic は affecting touching の意で、悲しいと云ふ義を持つてゐます。第八行の Or rapt …… 云々の句はアレキサンダア、ポーブの『メッセイヤ』(“Messiah”) の中から抽出した句であります。Rapt と申しますのは、In a state of ecstasy or exultation 即ち恍惚として魂飛び神動きたる状態を云ふのであります。holy seers とは、直譯すれば神聖なる見手、即ち豫言者のことに成ります、また *lyre* と云ふのは、poetry のことで、the sacred lyre とついで、神歌の意に成るので御座います。

XV.

Perhaps the Christian volume is the theme,
How guiltless blood for guilty man was shed;
How he, who bore in heaven the second name,
Had not an earth whereon to lay his head;
How his first followers and servants sped;
The precepts sage they wrote to many a land:
How *he*, who lone is Patmos banished,
Saw in the sun a mighty angel stand,
And heard great Babylon's doom pronounc'd by Heaven's command.

第十五

新約全書また話柄となれり。

罪なき者の血は罪ある人の爲めに流されたり、
天にて第二の名を贏ち得しキリストは、
地にては枕する所たにもなかりき、
基督の第一の弟子と僕とは榮え、

多くの使徒は各所に書を送りて教を垂れたり、

たゞ一人バトモスに追はれし人は、

日光の中に稜威ある天使の立つを見、

又たバビロンの運命天によりて定めらるゝを聞きぬと。

the Christian volume とは「新約全書」のことです。第二行の *guiltless blood*

……云々は、これはキリストが罪人を救はん爲めに自から神の子なるにも拘はらず、十字架の上に上つて殺されて、「救の血」を流したと云ふことを謳ふたものがあります。

第三行の意は、基督が天へ上つて、第二の生涯に入つたこと、即ち神様となられたことを指したもので御座います。又た第四行の文句は、キリストが「狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されども人の子は枕するところなし。」と申されたお言から出たので、地上では安んずることの出来なかつたキリストが、天へ上つては神の右

に座し、救世主とられたことを云つたのであります。

第五行の *his first followers*……は恐らく、ペテロの事を云つたので御座います。この人は後にキリストを賣りて苟安を謀りました。第六行は、多くの使徒たちが、ローマや、ガリラヤや、コリントや、諸々の國都に文をお送りなまつて、キリストの教を擴げたことを歌つたのであります。many a land と云ふと撞着するやうですが、これは many lands と同じことで、單數にすれば、エーの前にメニイと云ふ字を置くので御座います。

第七行のイタリックで書いた *is* は、ヨハネのことを指したものです。バトモス島と申すのは、Aegean sea の中に御座います小島で、その島へ、わがヨハネは追放せられたのであります。banished は特に、詩格の都合で、「バニシエツド」として活かして讀むので御座います。第八行の *Saw* のサブゼクトは、上行の *is* であつて、ヨハネが立てるエンゼルを見たのだと申すので御座います。なか／＼興味のある話

です。

第九行の *Bablon's doom* は、*The doom of Babylon* とひとしいのです。バビロンと申しますのは、ローマの事で、カルゼヤの都で御座います、昔はなかく榮えたものと見えまして、キリストのお言葉の中にも「*バビロンの榮華の極みの時だにも、野の百合の花に如かざりき。*」と云ふのが御座います。之をバラフレースして見ますと、*And he heard that the doom of Babylon was pronounced by Heaven who commanded it.* と云ふやうに成ります。バビロンと申しますと、聖書では、時にこれをフイギエラチーブに用ひますが、こゝでは必ずしも爾うではありません、要するに、此の國は榮華を累ねた末に落ちぶれたのですから、「衰亡」と「榮華」とを連想する場合に、よく詩人が引き出す國で御座います。

XVI.

Then kneeling down, to Heaven's Eternal King,

*The saint, the father, and the husband prays:
Hope "springs exulting on triumphant wing,"
That thus they all shall meet in future days:
There ever bask in uncreated rays,
No more to sigh, or shed the bitter tear,
Together hymning their Creator's praise,
In such society, yet still more dear;
While circling time moves round in an eternal sphere.*

第十六

空なる永久の大君の前に跪つきて、
聖者たり、父たり、良人たる人は祈りぬ。
未來にて彼等が共に逢はんと望は、
『喜び勇む翅の上に湧き出でたり。』
かゝる時、曾て作られざる光に温められて、

溜息を吐くことなく、悲涙に咽ぶことなく、

ひとへに造物者のみ名を稱へん、

かゝる世に更に親しく、

永久の境に團欒することを得ん。

Heaven's Eternal King 即ち「天の永久の王」とは、神のことをさして云ふのであります。また第二行目は、子等の父たる人は、家人より見れば、教師だから、聖者と云ひ、子供より見れば父たり、妻より見れば良人たるが故に、かく云つたので

第三行の *spings*…… は、ボープの “Windsor Forest” から拔萃した句であります。exulting とは、Rejoicing の意で、「悦ぶ」、「楽しむ」などと譯します。第四行目の *That thus they* の三字は、ザジズゼゾ韻を頭で踏んでありますが、此う云ふのは、英詩で頭韻 (Alliteration) と申します。日本のにでもこの例はあります。

例へば『萬葉集』の『よき人の、吉野よく見て、よしと云ひし、吉野よく見つ、よき人よく見。』の如きは即ちこれであります。

bask は蘇國語、英蘭では *bake* と云ひます、註釋には *To lie in warmth* とありますから、こゝでも日光に温められと譯すれば宜しい。Creator は造物者、即ち神の事であり、*an eternal sphere* と云ふのは、「或る永久の場所」ですから、天國のことをさしたのです、即ち、彼等の望んでゐる未來の生活はこゝでせられるのであります。

XVIII.

Compar'd with this, how poor Religion's pride,
In all the pomp of method and of art,
When men display to congregations wide,
Devotion's ev'ry grace, except the heart!
The pow'r, incensed, the pageant will desert,
The pompous strain, the sacerdotal stole;

But haply, in some cottage far apart,
 May hear, well pleased, the language of the soul;
 And in the book of life the inmates poor enrol.

第十七

かの派手なる儀式を以て誇とする、
 憐れなる宗教に比ぶれば、こは如何に勝れるぞや。
 何の時か、よく人、真心なくして、

その美はしき信仰を會衆に示されんや。

神、激怒し給は、虚禮は滅びん、
 派手なる調曲も、華美なる衣も。

さはれ幸なる哉片田舎の賤が伏屋に、

神は樂しげに祈の言を聞召し、

生命の名簿にその名を記し給はん。

Religion's pride..... は、派手なる儀式を以て宗教のほこりとせることを指いて云つたのであります。第二行第三行は、men can never show their gracious devotions widely to congregations if they have no sincerity. ことごとよく分ります。

第五行の power は power の略で、神のことを云つたのであります。本行をバラフレースして見ると、If God will incense, the pageant will be deserted by him. となります、pageant は虚禮のこと、第六行と同格であります。

cottage far apart とは、都を遠く離れたる僻地の民家と云ふ意味で御座います、第七行、第八行の主格は第五行の power であつて、神はよく樂しみ、喜んで「ねぎごと」を聞いて下さるとの意。The language of the soul とは「靈魂の言葉」即ちはち祈禱の事であります。甘いものを食ひたいとか、善い衣が着度いとか云ふのは、「肉の言葉」即ち「The language of the body.」で御座います。いかにも面白い書き振りで、こんなのを警句 (Epigram) と申します。the book of life とは、「生命帳」

即ち、不死不滅の者の名前を列記する帳面であります、天國にはこんなものがあるやうに思はれます。

XVIII.

Then homeward all take off their sev'ral way;
 The youngling cottagers retire to rest:
 The parent-pair their secret homage pay,
 And proffer up to Heaven the warm request,
 That He, who stills the raven's clam'rous nest,
 And decks the lily fair in flow'ry pride,
 Would, in the way his wisdom sees the best,
 For them and for their little ones provide;
 But, chiefly, in their hearts with grace divine preside.

第十八

後彼等は己がじ、家路へとつゝぬ、
 幼き子等は眠らんとて罷れり。

老夫婦は敬虔の念をもて、
 天つみ神に熱心なる祈を捧げぬ。
 その祈は高鳴く鴉の巢を鎮め、
 百合の花を盛りの姿に飾る大神よ、
 われ等の爲め、われ等の子の爲め、
 殊にわれ等の胸の中に汝の奇きみ力現はれ、
 辿るべき道を教へ給はれとなり。

their several way とは「彼等名々の途」と云ふ意であります。The youngling cottagers とは、子供のことです。第五行の He とは神のこと、神の場合には必ず頭の花文字を使ひます、第六行は「花の誇に於いて美はしく百合を飾る」と直譯しますが、これは、うつくしく装ふと云ふことに成ります。

最後の三行の意は、「神よ願はくば、汝の智慧が、吾れ等の中間に介在して、吾れ

等の爲めに最良の方法を盡くし、吾れ等の爲め、吾れ等の子供の爲めに大能のみ手を下し給ひ、殊に吾れ等老夫婦の胸中に、汝の攝理が現はれんことを望む」と云ふのであります。

In the way は「中間に介在して」と云ふ意、his wisdom は神の智慧をなして云ひ、sees the best は最良の方法を盡くすと云ふ意であります。chiefly と云ふのは「殊に」、「就中」の意、In their hearts は、「老夫婦の胸の中に」の意であります。

XIX.

From scenes like these, old Scotia's grandeur springs,
That makes her lov'd at home, rever'd abroad:
Princes and lords are but the breath of kings,
"An honest man's the noblest work of God:"
And certes, in fair virtue's heavenly road,
The cottage leaves the palace far behind;
What is a lordling's pomp?—a cumbrous load,

Disguising aft the wretch of human kind,
Studied in arts of hell in wickedness refin'd!

第十九

かゝる處より蘇國の老偉人は湧き出で、
内には愛せられ外には敬せらる。

王侯貴族はたゞこれ至尊の息のみ、

『正人君子はこれ高貴なる神のみ恵みなり。』

善徳ある人の昇天すべき道の上に、

農夫は金殿玉樓を委棄す。

何物か王侯貴族の飾りなる——曰く、只だ煩き一荷物、

人間の汚點を蔽ふに過ぎず、

そは邪道にて磨き上げられ、魔界にて研ぎ上げられたり。

From scenes like these とは「こんな舞台から」の意、old Scotia's grandeur とは、昔のスコットランドの偉人と云ふ意です。第二行は内國にては、國人に愛せられ、外國にては尊敬せらるゝとの意 makes her lov'd..... の her はスコットランドを受くるのです。

第三行の意は、王侯貴族は、至尊が、『汝は何々になれ、何々にしてやる』の一言の下に成るから、それで「至尊の一息のみ」と云つたのです。第四行の the noblest work of God は、神の最も高貴なる作り物の意、man's は即はず、man is でありませぬ。第五行の certes はスコットランド語で、實にと云ふ意です。

Cumbrous は vexatious, troublesome の意でありまして、「うるさう」とか「煩はしい」とか云ふ意味を持つてゐませぬ。Disguising とは concealing covering と同じく、上部を装ふとの意でありませぬ、aft とは after の略字でありませぬ。

Studied in arts of hell は、地獄の技術の一として研究せられの意です、故にこれ

は「魔界にて研ぎ上げられ」と譯したのです。またその次のは、refined in....云云と置き更へて、「邪道にて磨き上げられ」と譯すればよく分ります。

XX.

○ Scotia! my dear, my native soil!
 For whom my warmest wish to Heaven is sent!
 Long may thy hardy sons of rustic toil
 Be bless'd with health, and peace, and sweet content!
 And O! may Heaven their simple lives prevent
 From luxury's contagion, weak and vile!
 Then, how'er crowns and coronets be rent,
 A virtuous populace may rise the while,
 And stand a wall of fire around their much-lov'd isle.

第二十

あはれ蘇格蘭よ、わが親しき生れ故郷よ、
 そが爲めの暖かきわが祈禱よ天上に聞えよ。

汝が粗々しき勞苦の子は永へに恵まれて、
健康と平和と満足とを得ん。

あはれ神よ、彼等の質朴なる生活をして、

奢侈、脆弱、奸黠に傳染せしめざれ。

かくて玉冠や金冕や裂かれんとも、

徳ある民に幸あれ、

民の愛する此島に火の城壁よ築かれよ。

第三行の may は、 rustic toil の次に置き、第四行へ懸けると、よく分ります。

sweet content とは充分なる満足の意です。第七八行の作者の意をはかるに、たとひ、王侯は滅ぼされても、スコットランドの民族は強健幸福にして、將來長く榮えよとの意でしょう。

最後の行の「彼れ等國民の最も多く愛せる島をめぐりて、火の城壁立てよ」とは、

實に痛快なる言葉であります。パースは蘇人、その燃ゆるが如き愛國心は、遂に此の言葉となつて現はれたのであります。蘇國と英國とは、一つ國でありながら、昔からよく争つたものです、それと云ふのも、古へに在つては兩國相分れてゐたのが、後世英國の爲めに壓せられて、遂に合併せられて了つたからでしょう、英、蘇の反目は、恰度吳越のやうなもので、それが爲めに多くの詩的事實が現はれたやうであります。

Stand a wall of fire around their much-lov'd isle! とは何等痛快、勇壯、雄大の言でしやうか！私はこんな大文字が、わが島帝國の詩人によりて作られないのを遺憾に思ひます。國は二千五百年の歴史を有する花彩島に現はれて、これを讚美し、これを熱愛する詩人の出ないのは、寧ろ不思議ではありませんか！

XXI.

O Thou! who poured the patriotic tide

That stream'd thro' Wallace's undaunted heart,
 Who dared to nobly stem tyrannic pride,
 Or nobly die, the second glorious part:
 (The patriot's God peculiarly thou art,
 His friend, inspirer, guardian, and reward!)
 O never, never, Scotia's realm desert;
 But still the patriot, and the patriot bard,
 In bright succession raise, her ornament and guard!

第二十一

あはれ神よ、誰か愛國の潮を注ぎて、
 ワレースの勇敢なる胸に流れしむる。
 彼や實に健氣にも暴君に反抗し、
 健氣にも死して花やかなる境に入れり。
 (神よ、汝れ特に愛國者の守護神たれ、

友人、鼓吹者、後見人、扶成者たれ。)

あはれ蘇國の領地を見捨て給ふな、
 見捨て給はざるのみならず愛國者、愛國詩人を喚起して、
 そを飾り、そを守らしめ給へ。

O Thou! とは、神を呼びかけたのであります。The patriotic tide とは「愛國の血潮」と譯すれば可いでしやう、面白い文句であります。殊に第二行目に來て、「勇敢なるワレースの胸を貫流……」云々と書いたので、タイドが生きて來ました。

Wallace は、Sir William で、スコットランドの英雄であります、バーンスはそれを愛國者の代表的人物として擧げたのであります。第三行目の tyrannic pride と云ふのは「暴君の驕傲」と云ふ意です。又括弧の中の文句は、「神よ、汝は、わけて、愛國家の守護神だ、又友人だ、鼓吹者だ。」云ふ意味で御座います。

realm とは領地のこと、In bright succession とは「燦爛たる連続」即ち、「立派

に續けて」と云ふ意味であります。her ornament and guard とは「愛國者の後見、裝飾者」の意、こゝでは、呼びかけたやうに解釋するのがよろしう御座います。——實にバーンスは蘇國の爲めに大氣焰を吐いてゐます、愛國の熱情が溢れてゐます、星や莖を謳つてゐる日本の Would be poet (でも詩人) は、此の詩を焼いて粉にして呑んだら、少しは力の強い、確乎とした作が出来るかも知れません。

A RED, RED ROSE.

—(1793)—

O my Luve's like a red, red rose,
That's newly sprung in June:
O my Luve's like the melodie
That's sweetly play'd in tune.

紅き紅薔薇 (千七百九十三年)

あはれ吾が戀人は六月新たに薔を破りし

紅き紅薔薇の花の如し。

あはれ吾が戀人は調曲に合はせて
巧みに奏づる樂の如し。

ロバート、バーンスは、英國十八世紀の末から十九世紀へかけての詩人で、その思想は雄健、溫雅兼ね備はり、詞句は田舎めいた趣があるけれども、眞實誠意が現はれてゐて面白う御座います。兎に角近代ロマンチックな詩風の先驅をした人で、英國詩壇の曉鐘と云はれる詩人です。その作は概して活氣あり、大に貧者、弱者の爲めに氣焰を吐いて居ります。此の詩は傑作と云ふ程でもありませんが、短かくて分り易いから、此處に評釋を試みたのです。

Luve's は、Love is の略で、綴の違ふのは、田舎言をその儘用ゐたのです、こゝろ云ふのは、矢張 slang (鄙語) の一種で、場合によると避けなければなりません、バーンスの詩では却つて天真が流露してゐて、同感を惹きます。That's も前同様

That is の略であります。また sprung は、芽を吹いたり、蕾を破つたり、物事の發生と云ふ意味を持つてゐます。melodie は、好調、好音、流調など、多くの意義がありますが、此處では音樂の義に解するとよく分ります。

As fair art thou, my bonie lass,
So deep in love am I;
And I will love thee still, my dear,
Till a' the seas gang dry.

わが淑人よ汝が美しくしさに

深き戀にしも吾は焦がるゝ。

吾れ尙ほ汝を愛す、わが戀人よ、

海水乾せゆく世なりとも。

最初の四字は、As thou art fair の倒置句。art は現今の are に均しく、my bonie lass は「汝」と同格であります。第二句も矢張り倒装ですが、此の倒装又は倒置句と

云ふものは、詩ではよく用ゐる修辭法であります、日本ので例を惹くと「いざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」と云ふやうな句の使ひ方です。

また第四句の a' と云ふのは、古語の *ae* を略したもので *ae* の意味を持つてゐます。即ち、よしや海水が干上るとありとも君に二心われあらめやも」と云ふので、世なりとも同一の意義であります。

Till a' the seas gang dry, my dear,
And the rocks melt wi' the sun:
And I will love thee still, my dear,
While the sands o' life shall run.

わが戀人よ海あせゆきて

巖の日晷に溶らくる世なりとも。

わが戀人よ吾は尙ほ汝を愛す

吾が玉の緒のつゞける間は。

云ひ忘れたが、第一句の sang dry は、干せゆく、の意です、sang は歩む、行くの意で、日本語の「何々しゆく」と同じやうな使い方があります。さて第二句にある wi は with の略語です。

第四句の sands of life 云々は、玉の緒のつゞく間はと云ふ意味ですが、元來、此の sand といふ字は、鄙語では、金錢とか、生計手段とか云ふ意味を持ち、また人生、剛氣と云ふやうな譯もあります。で、こゝでは人生の氣、即ち「玉の緒」と可ふことに解釋すれば可いので御座います。

And fare-thee-well, my only Love!
And fare-thee-well awhile!
And I will come again, my Love,
Tho' 't were ten thousand mile!

いづさらば一人のわが戀人よ!

いづさらば暫しの分別!

吾はまた來まし吾が戀人よ

たとひ千里を距つるとても!

fare-thee-well は、fare-well と同じとて、「左様なら」と云ふ事になります。awhile は暫しの間と云ふ心。Tho' は即ち Though の略字であつて、これは、常に It or that を代表しますが、此處では were が假定であるから、正と見る方がよくあります。すると Tho' の字と重複して來ますけれども、こんな事は常に澤山あるとて、別に疑を挿む必要が御座いません。

で、此の詩を總評して見ようならば、想は矢張やさしい中にも壯大剛健な處があり、譬喩はなかく旨いものですが、譬を取るにも大きな物を使つてゐます。吾が戀を樂の音と海水に比べたのは、餘り目新らしくもありませんが、「永久の戀」を謳つて、實朝の「山は裂け海はあせなむ」の歌と、同一の詞を用ゐたのは、東西、地

を異にしてゐましても、思想は矢張り同じ所に落ちるので御座いませうか。此末の文句などは、何となく力があつて、餘韻爛々とも評して置きませうか。詩の調子は、例の田舎親爺のやうな口吻がありまして、誦するのを聞いてゐましても、何となく純朴、質素な趣味が浮んで來ます。兎に角此の詩は題名の紅薔薇の如く、可愛らしい短詩で御座います。

PLEASURE.

FROM "TAM O' SHANTER."

But pleasure are like poppies spread,
 You seize the flow'r, its bloom is shed;
 Or like the snow-falls in the river,
 A moment white—then melt for ever;
 Or like the borealis race,
 That fit ere you can point their place;
 Or like the rainbow's lonely form
 Evanescent amid the storm.

快樂

「タム、オ、シヤンタア」拔萃

さはれ快樂は蔓れる瞿粟の如し、
 汝れ花を捉へなばその榮は散り亡せん。
 あるは河面に降る雪の如し
 刹那は白けれども忽ち融けて永久に影なし。
 或るは北光の足並の如し、
 汝を指さす前まず快走す。
 或るは美はしき虹の如し、
 忽焉として嵐の中に消えゆく。

この一節は「Tam o' shanter」の中から、快樂に關する八行を抜き出したもので、その思想は頗ぶる東洋の佛教思想に似てゐます。由來快樂と云ふものは、そんなに永久的のものでなく、一時的のものであるかも知れません。例の美的生活など

を憧憬してゐるもの、側から見ますと、快樂——殊に肉につける快樂は、非常に尊い有り難いものかも知れませんが、禁慾的の清淨教徒的の眼から見ると、悪魔のやうに思はれるので御座います。佛教々典には、倏忽なるものを、「如電如露」と云ひますが、こゝでも快樂を虹や、北光に譬へてゐます。東西地を異にしてゐても、思想の上では、そんなに異つたことはありません。



Poppies と云ふのは、爰では The common corn-poppy を指したのであります。罌粟の花は、快樂を代表する花として、世界の人が多く用ゐてゐる花では御座いませんが、茲ではそれを持つて來て快樂の倏忽なることを譬へたのです。spread は蔓わるとか、盛れるとか、延びたとか譯すればそれで可いでしょう。第二行目の Flower は Flower のとですが、詩の調子の上から、e を畧したのであります。

第三行目の Or の次には Pleasure are と入れて見るとよく分ります。snow-fall は

降りしきる雪のことです、「河面における降雪」とやうの使ひ方がしてあるので、別に變つた意味があるのではない。第四行目の then は “Now and then” 卽ち「忽ち」の意であつて、降つた一瞬間は眞白であるけれども、直ちに消えて影もなくなるの意であります。for ever は「とこには」「永久に」と云ふ意です。

第五行目の borealis は「北光」とでも譯して置きましょう。これは The streaks and flashes of brilliant-coloured light で、かの「オーロラ」と云ふものと同じであります。オーロラ Aurora は、北光 northern light と同一に解せられてゐます。日本にはあまりない相ですが、これは歐羅巴の北部で、海面に現はれることがあるとの事、その光は實に美はしいと書いてまいります。The borealis race で、「北光の競走」と云ふ意、その早いのを形容したものです。

rainbow's lonely form は云ふまでもなく、虹の愛らしき姿と云ふ意味であります。卽ち快樂は、その現はるゝや虹霓の如くに美はしいけれども、決して永久に續く

ものではなくて、一度び嵐が吹いて來ますと、忽焉として消えて了ひますと云ふ意を歌つたものであります。

快樂については前にも述べて置きましたが、快樂派の人々は、快樂をのみ得やうとして苦痛を厭ひ、Puritanなどは、快樂を以て Devil となし、苦痛を多く受くることによつて、人は善となると云ひます。ロシヤの Tolstoi の「人生の意義」"The meaning of Life" では、苦痛を避けて快樂をのみ得やうとするこの間違なると同じに、苦痛をのみ歓迎して、快樂を遠ざけやうとするのも間違である。人は呼吸の如く、快苦の兩道を通過することによつて、始めて人生の目的地に達することが出來ると申してあります。尤もな説で、人生の目的は快樂でもなく、又苦痛でもなく、兩者を貫通するところに其の眞理が横はつてゐるのでしやう。どつちかと申せば、此のパーンスの詩は、苦痛を好み、快樂を厭ふ puritanic tendency が見えてゐます。東洋的の宗教即ち Buddhism では、此の種の思想は甚だ多いことと思ひます。

II. COLERIDGE.

MORNING HYMN TO MONT BLANC.

Hast thou a charm to stay the morning-star
In his steep course? So long he seems to pause
On thy bald, awful head, O Sovran Blanc!
The Arvé and Arveiron at thy base
Rave ceaselessly; but thou, most awful form!
Risest from forth thy silent sea of pines,
How silently! Around thee and above
Deep is the air, and dark, substantial, black,
An ebon mass: methinks thou piercest it,
As with a wedge! But when I look again,
It is thine own calm home, the crystal shrine,
Thy habitation from eternity!
O dread and silent mount! I gazed upon thee,

Till thou, still present to the bodily sense,
Didst vanish from my thought: entranced in prayer,
I worshipped the Invisible alone.

第二章 コールリツヂ

モンブランの暁の讃歌

明星^{あかほし}よその險^{けは}しき道^{みち}にとゞむべき術^{すべ}を
汝^なれ持^もつか。大君^{おほきみ}モンブランの山^{やま}よ、汝^なが禿^はげし
嚴^{いつ}し峯^{みね}に明星^{あかほし}しばらくたゆたふらし。
汝^なが足元^{あしもと}のアルベイトとアルベイロン川^{かは}は、
不^ふ断^{だん}にどよみ流^{なが}る。さはれ汝^なが姿^{すがた}、
しづけき松^{まつ}の海^{うみ}の前^{まへ}より聳^{そび}えて、
いかに畏^{かし}こく静^{しづ}けきぞや。汝^なが頂^{いただき}、汝^なが腹^{はら}に、

Hymn は「ヒム」と發音して、神若しくば神に近きものを讚美する歌の稱呼、
Mont Blanc は「モンブラン」と發音します。第一行の a charm とは、charmer
のことにて、魔術の意、第二行の his steep... は星の代名詞、^もも亦同様で御

かゝる大氣^{たいき}は深く暗^{くら}く濃^こく黒^{くろ}く、
宛^{えん}として似^にたり黒檀^{こくたん}の塊^{かたまり}、それをしも汝^なは、
楔^{くさび}もて穿^{うが}つが如^{ごと}く穿^{うが}つ、されど再^{また}びわが見^みし時^{とき}は、
汝^なは穩^{ゆた}やけき家居^{いえの}、清^{きよ}らの水晶宮^{すいしやうきゆう}、
そは太古^{たいこ}よりの汝^なが住家^{すみか}。
あはれ凄^{すこ}くも静^{しづ}けき山^{やま}よ、われはしも汝^なが姿^{すがた}は、
眼^めに見^みえながら心^{こころ}より消^きゆるまで、
汝^なをし見^みつめて恍惚^{うつろ}の祈^{いの}り、
吾^{われ}はひとり大御神^{おほみかみ}を崇^たへまつる。

座います。head とは、山の絶頂のことでもあります。

Arve and Arveiron は「ひとつも河の名で御座います、thy silent sea of pines と云ふのは、「山の静けき松の海」で、松林を海に譬へたのであります。第七行の後半と第八行、第九行の前半は、The air on the head and the side of Mont Blanc, is deep, dark, substantial, black, and like an ebon mass. とあることよく分ります。substantial と云ふのは、濃密にして、實質あるが如く見えるのを指いて云つたのでしやう。

第九行の結末の *is* は air を指いたのです。a wedge と云ふのは、くさびのこと、モンブランが空中に聳えてゐるのは、恰度楔子が空中を貫ぬき立てるやうだと云ふのです。楔の形は一方が薄く細く、一方が厚く太くて、それを立てると恰度山のやうに見えます。home, shrine, habitation みな同格であります。Thy habitation は「太古からの汝の住家」の意で御座います。

present to the bodily sense とは「肉体の感覺、即ち視覚には現存してゐる」と

云ふ意で御座います。また entranced in prayer は「祈禱に恍惚として」、「恍然として祈念に襲はれる」と云ふやうな意味を持つてゐます。the Invisible とは「神」のことです、神は見えないものですから、此う云ふのでしやうが、特に花文字が使つてあるからその神なることが知れます。

Yet, like some sweet beguiling melody,
So sweet, we known not we are listening to it,
Thou, the meanwhile, must blending with my thought,
Yea, with my life, and life's own secret joy;
Till the dilating soul, enrapt, transfused,
Into the mighty vision passing—there,
As in her natural form, swelled vast to heaven.

妙なる恍惚の樂を聞きながら、

之を聞くとも吾れは覺らぬがごと、

汝はわが思想、わが生命、

わが生命の秘めし喜とうち混りぬ。

かくて擴がれる靈魂は歡極まりて、偉大なる

目前の對象、こゝしき山に分け入り――

靈自らの形にまかせつ渺々として御空に上れり。

beguiling melody と云ふのは、心を奪ふ音樂の音色と云ふことで、第二行の終の *is* は、melody を受けてゐるのです。此の二行の意は「聞いてゐても聞いてゐると知らぬ程、そんなに、妙なる美妙の音樂の如く、汝モンブランは………」と云ふ意に成るので御座います。第三行の meanwhile は、其の間と云ふ意、blending は「山合してゐた」と云ふ義です。

transfused と云ふのは、喜べる靈魂が山に注ぎ込まれて合同したと云ふ意。the mighty vision passing とは、眼に入りつゝある偉大なる物、即ち山をさして云つた言葉です。As in her natural form とは、「魂本來の形に於けるが如く」と云ふ意

で、空に上るのは靈魂の本來の性質と云つたのです。

Awake, my soul! not only passive praise
Thou owest! not alone these swelling tears,
Mute thanks, and secret ecstasy! Awake,
Voice of sweet song! Awake, my heart, awake!
Green vales and icy cliffs, all join my hymn.

醒めよわが靈、たゞ強ゐられてのみ崇ふる勿れ。

靈よ汝、溢るゝ涙をもて、

無言の感謝と、隱密の悅樂をなすのみならず、

目覺めて麗はしき歌を謡へ、醒めよかしわが魂、

緑の谷も氷れる岨も、わが讃歌に合はして歌へ。

第一行の not only……は、thou! don't only praise him passively! の意で御座います、thou は靈魂を呼びかけたのです。not alone these……は、「單にこれ

これのもののみならず」の意であります。vale とは谷の事、icy cliffs とは、氷つて
 ゐる絶壁の事で御座います。all join my hymn は、「わが歌といふの讃歌に合は
 して歌へ」と云ふ意です。忘れましたが、第一行目にある passive と云ふのは、「見
 せられて見てゐるのみならず、強ひられて稱讃するのみならず、自ら進んで稱讃せ
 よ」と云ふの意で御座います。

Thou first and chief, sole Sovran of the Vale!
 Oh, struggling with the darkness all the night,
 And visited all night by troops of stars,
 Or when they climb the sky or when they sink:
 Companion of the morning-star at dawn,
 Thyself earth's ROSY STAR, and of the dawn
 Co-herald! wake, oh wake, and utter praise!
 Who sank thy sunless pillars deep in earth?
 Who filled thy countenance with rosy light?
 Who make thee parent of perpetual streams?

汝こそは谷の大君、無上、無比、無双なれ。

あはれ雪戴ける汝は夜すがら闇と戦ひて、

星の群にぞ訪づれらるゝ、

空を星の攀づるとき、或るは沈む時。

曙にして汝は、み空に明星の友たり、

地上にては汝自ら薔薇星。夜明けて白む

曉の先驅者。目醒めて稱へ言せよ。

誰か汝の日光受けぬ柱を深く地底に沈めし、

誰か汝の面を薔薇の光をもて充たせし、

誰か汝をして盡きせぬ水流の源とならしめし。

Sovran of the Vale といふのは、「谷の大君」で即ち、モンブランのことを云ふの
 だ。struggling with the darkness all the night と云ふのは、モンブランは四時を

の頂に雪を頂いてゐるから、夜は自己の白い身を、暗中にさらして、暗黒と争ふやうに見えるのを形容したので御座います。

Companion of the morning-star とは、モンブランが曉に成ると直ぐ白んで、明星がそれに懸るから、此う云つたので御座います、第七行の Co-held と云ふのも、此の理由で、夜が明けると直ぐに白むモンブラン山は、曉の前觸だと謳つたのであります。

pillars とは「圓柱」のとです、山に柱がある譯ではないけれども、山が深く根を据えて、動かぬ様は、深き柱を地に埋めてゐるやうに思はれるので、此う云つたのであります。Rosy light とは、モンブランが赤にして禿だから、その顔にはロウジイ、ライトがあると申したまであります。また最後の行の parent とは創造者の意、perpetual streams とは「永久の流」の意、モンブランから五つの河流が流れ出で、滔々として盡くる所なき故に、恁う云つたのであります。

And you, ye five wild torrents fiercely glad!
Who called you forth from night and utter death,
From dark and icy caverns called you forth,
Down those precipitations, black, jagged rocks,
Forever shattered and the same forever?
Who gave you your invulnerable life,
Your strength, your speed, your fury, and your joy,
Unceasing thunder and eternal foam?
And who commanded—and the silence came—
“Here let the billows stiffen, and have rest?”

汝、奔湍、すべて五筋、激しく流る。

誰か汝を夜と幽冥の中、

暗く氷れる洞穴の中より喚び出し、

こゝろしく黒き巉岩を下りて、

絶えず奔激せしむるぞや。

誰か汝に汝の下壞の生命、

強力、速力、熱心、歡樂や、

不斷の雷鳴、永劫の泡沫を與へしか。

また誰か命令せしや——沈黙は來りぬ——

『浪をして硬まりて來ん冬を休ましめよ』と。

第一行の you は torrents を指し、torrents は奔湍、飛瀑と云ふ意です。第二行の utter death とは「全くの死の國」即ち冥府のことです、奔湍の源は、何れも暗い夜のやうな、洞穴の中から出て來るのですから、それを面白く云ひ現はして、第二行、第三行の文句と成つたのです。Jagged rocks とは「切口ある岩」のことです、巉岩とでも譯すればよいでしょう。

第五行の Forever shattered and the same forever? と云ふのは、「常に壊破してゐて、しかも變らず、常に同一である」との意、瀑と云ふものは、水が常に入れ替つて、斷えず飛び奔り、崩れ壞れてゐるのですが、其かもその形は常に同一です、なか／＼の名文句で、誰しも云はんとしよう云はぬ所を、コールリッチは巧みに云ひ現はしてゐます。

第八行の Unceasing thunder とは「絶え間もなき雷鳴」の意で、瀑は常に鞞鞞として落ちたぎり一日一時も絶ゆることがないから、こゝう云つたのです。また eternal foam とは「久遠の泡沫」の意、瀑布が岩上より落ち來ると、瀧壺に泡が立つが、それは直ぐに消えてもまた出來るから、それでエタアナル、フォームと云つたので御座います。and the silence came は、冬に成つて瀑布の水が氷ると、音が絶えて了つて、全く寂靜に成るから、それで「沈黙は來れり」と云つたのです。

コーテイション、マークの中の文句は、神の聲です、神の命令です、He let... : 云々は、「浪をして硬まりて休息せしめよ。」の意であります、それは冬に成ると、澎湃激奔せし水が、氷つて硬くなり、今まで活動してゐたのが休息の状態に

入りますから、restの文字を用いたのです。——これから、行を更めて、コールリ
ツチは冬のモンブランの氷れる瀑河を謳ひ始めます。

Ye ice-falls! ye that from the mountain's brow
Adown enormous ravines slope amain—
Torrents, methinks, that heard a mighty voice,
And stopped at once amid their maddest plunge!
Motionless torrents! silent cataracts!
Who made you glorious as the gates of heaven
Beneath the keen full moon? Who bade the sun
Clothe you with rainbows? Who with living flowers
Of loveliest blue spread garlands at your feet?
"GOD!" let the torrents, like a shout of nations,
Answer; and let the ice-plain echo, "GOD!"
"GOD!" sing, ye meadow-streams, with gladsome voice!
Ye pine-groves, with your soft and soul-like sounds!
And they, too, have a voice, you piles of snow,
And in their perilous fall shall thunder, "GOD!"

汝氷河よ、山の頂より、俄然として、
恐ろしき道を奔下する汝よ——
奔瀑よ汝は神の聲を聞きて、
忽然その狂はしき掀衝の中に止まりたるらめ、
不動の氷河よ、無言の飛泉よ、
誰か汝をして鋭き寒月の下に、
天門の如く輝やかしめしぞ。
誰か太陽に命じて虹の衣を汝に着せしぞ。
誰か愛らしき藍色の花環を汝が足下に引げしめし。
『神よ』と奔瀑をして答へしめよ、萬民の叫の如く。
氷河をして反響せしめよ『神よ』と。
『神よ』と汝野川よ、樂しげなる聲して歌へ。

松林よ汝が柔かく深き韻をもて歌へ。

はるけき彼方の雪山よ、聲を放ちて、

危うげの雪崩となつて歌ひ轟かせ『神よ』と。

mountain's brow とは「山の額」ですから、山の絶頂のことに成ります。第二行は、「烈しき傾斜を落下する」と云ふ意味で、*again* とは、「俄かに」と云ふ意味を持つてゐる字です。at once は熟字で「立ち所ろに」と云ふ意味に用ゐられます。

mighty voice は、大能力あるもの、聲、即ち「神の聲」のことでもあります。Motionless torrents とは「動かない所の奔瀑」ですから、氷河のことを云つたのであり、その次の *silent cañacts* も「沈黙なる飛泉」だから氷河と見れば可いのです。gates of heaven..... は瀑や河が氷つて、眞白になつてゐる上に、冬の寒い凄い月が照り渡りますと、恰度、「天門」のやうに見えるると云ふので御座ります。随分崇嚴な譬喩であります。living flower とは「活々した花」即ち鮮やかな花と云ふ意

味であり、spread garlands at your feet とは「その裾に花輪をひろげる」との意であります。

meadow-streams とは、草青々たる牧場の如き野面の小川の意、野川が楽しげなる聲で歌へと云ふのは、ちよろ／＼と岸にふれてさ／＼やく事を云つたので、實に句が生きてゐます。第十四行の they は、you pile of snow と同格であります。最後の行は、fall と shall との間へ、they と云ふ字を入れて讀むと、意味がよく取れます。shall thunder は、「反響すべし」と命令的意義を持つてゐて、未來の意義ではないの

Ye living flowers that skirt the eternal frost!
Ye wild goats sporting round the eagle's nest!
Ye eagles, playmates of the mountain-storm!
Ye lightnings, the dread arrows of the clouds!
Ye signs and wonders of the elements!
Utter forth "GOD!" and fill the hills with praise.

四時不斷の霜雪の縁を縫ふ鮮やけき花よ、

鶯の巢をめぐりて遊び戯るゝ野の山羊よ、

山嵐の遊伴たる汝大鷲よ、

雲が射る恐ろしの征矢たる汝稻妻よ、

地水火風の奇しき徴象よ、

『神よ』と叫びて、讚美を山々に充たせよかし。

eternal frost とは、高山の霜雪は四時融くることなき故に、「永久」と云つたのである。山のぐるりに花が咲いてゐるのは、恰度、衣の裾の縁を縫つてゐるやうです。skirt と云つたのです。第三行の playmates とは「遊び友達」のことでもあります。the dread arrows of the clouds と云ふのは、稻妻を形容した言葉です。稻妻が、ぴかりと光るところは、雲が下界に箭でも射るやうに見えますから、こゝう云つたのであります。signs とは「しるし」又は「異徴」のことでもあります。element は普通

「元素」と譯します、元素は之を日本的に云ひ現はせば、まゝ「地水火風」とでも云ひまじやうか。Utter forth は「叫んで」との意。fill the hills とは「山々を充たせよ」との意で御座らば。

Once more, hear mount! with thy sky-pointing peak,
Oft from whose feet the avalanche unheard,
Shoots downward, glittering through the pure serene,
Into the depth of clouds that veil thy breast—
Thou too, again, stupendous mountain, thou
That, as I raise my head, a white bowed low
In adoration, upward from thy base,
Slow travelling; with dim eyes suffused with tears,
Solemnly seemest, like a vapory cloud,
To rise before me—rise, O, ever rise;
Rise like a cloud of incense from the earth.
Thou kingly spirit throned among the hills,
Thou dread ambassador from earth to heaven,
Great hierarch, tell thou the silent sky,

And tell the stars, and tell you rising sun,
Earth, with her thousand voices, praise God!

嶄然として空に聳ゆる白峰よ、

雪崩は瀨氣を貫ぬきて閃めきつゝ、

汝が脚下より、汝が胸を蔽へる雲の底に、

直下すれども音は下界に聞えじな——

あゝ汝、高大なるみ山よ、

われは暫らく頭を垂れて祈りしが、

再び頭を擡げて汝の麓より頂きまで、

涙溢るゝ暗眼をもて眺めわたせし時、

汝はむら立てる雲の如く、

わが前に聳えたり—— 吁聳えよ永久に聳えよ、

香へる雲と地上に聳えよ。

汝こそは山々に君臨せる大君の精霊、

汝こそは天地をつなぐ恐ろしの大使、

莊嚴しの祭主、汝よ默せる空に語れ、

星に語れ、朝日に語れ。

大地よ地上の萬物と俱に神を讚美せよ。

peak とは「尖頂」のこと、feet とは「ふもと」の事で御座います。unheard と申しまするは、雪崩が落下しましても、此の下界へは聞こえぬと云ふ處から、思ひついた句です。serene と云ふのは秋の氣のやうなのを云ひます、瀨氣と云ふのは、即ちこれで御座います。

a while bowed low とは、「暫らくの間、頭を下げたまへだ」との意であります。

thy base とは「汝の裾」即ち山の麓のことで御座います。dim eye とは、「おぼろ

げなる眼」のことで、涙の爲めにくらまされてゐるのを形容したので御座います。
Slow travelling とは、静かに眼を上より下へと運んでゆくことを指して云ふので
す。第十三行の ambassador とは、モンブランが地より天に聳えてゐるので、天地
の間に於ける使者と云つたのです、なかく、面白い譬喩で御座います。

此の歌は一言を以て評しますれば、頗ぶる崇高 (sublime) で御座います。これを
一讀しますと、如何にもモンブランの山が崇巖雄大であつて、その天外に屹立する有
様が、目の前にちらつきまゝ、わが國では赤人の『詠不盡山歌』が山の嶺としては一
番よくあります、近頃の薄田泣菫君の作『金剛山の歌』も随分よかつたやうに思ひ
ました。兎に角此の詩は有名な作で、コールリッジに取つては大傑作で御座います。

THE ANCIENT MARINER.

PART I.

It is an ancient Mariner,
And he stoppeth one of three.
"By thy long grey beard and glittering eye,
Now wherefore stopp'st thou me?"

"The Bridegroom's doors are opened wide,
And I am next of kin;
The guests are met, the feast is set;
Mayst hear the merry din."

老水夫 第一段

こは年老いたる水夫なり、
彼は三人の中の一を引きとめぬ。
『汝はその長き銀髯と爛々たる眼を以て、
何故われを引き止むるぞ。』

『宴の筵の戸は明け放されたり、

われは親しき親族の一人。

客人は早や席に着き、宴は開かれぬ、

汝はかの樂しげなる物の音を聞き得可し。』

此の詩はコールリッジの詩の中でも有名なもので、全篇七段、凡て六百二十五列から成つてゐるのですが、紙數に限りがあつて、皆評釋する譯に參りませんから、茲ではその第一段のみを註釋することに致しました。此の詩の如きは、ロマンチック、テンデンシイの著るしく現れたもので、書いてゐる事は、單純で、事柄は荒唐無稽だけれども、よく人を首肯せしめる點に妙があるので御座います。

one of three は三人の中の一人と云ふこと、"By thy... 云々の言葉は、袖引きとめられたる客人の言ひ草で、水夫に引き止められたので、「まあお前さんは、そんな光つた眼をして、白い髭を捻つて、私を止めて何うするのだ？」と尋ねたのであり

めい。Mayst hear の前へは、thou の字を置くと、よく意味が取れるのであります。merry din とは「樂しげなる物音」で、彼方の婚禮のある家の方で、がや／＼と何やら嬉し相な人聲、物音などのしてゐることを指して云つたのです。これが、抑々の序開きで、これから次第に話が面白くなつてゆくのであります。

He holds him with his skinny hand

"There was a ship," quoth he.

"Hold off! unhand me, grey-headed loon!"

Eftsoons his hand dropt he.

He holds him with his glittering eye—

The Wedding-Guest stood still,

And listens like a three years' child:

The Mariner hath his will.

水夫はその皺よれる手もて男を捕へて

曰ふらく『舟ありぬ』と。

『放せ、吾を捉へざれ、白髯の人よ。』
やがて水夫はその手を落しぬ。

水夫は輝ける眼もて男を見成りぬ——

宴會にゆく客人は静かに立ちて、

稚子の如くに聞きぬ、

水夫は己が意を得たり。

第一行の *He holds him with his skinny hand* は、ハヒフヘホの音で頭字に韻がふんであります、これ等は英語で “Alliteration (頭韻)” と呼んで、修辭學上必須の句法で御座います。skinny とは「皺よれる」といふ意味です。

第二行の *quoth* は *says* と同じと、第三行の言は、客人の發言で、老水夫に向つて、云つた言葉で御座います。Hold off は「離せー」の義、*unhand me* は「私を捉

まへてくれるな」の義、*loam* とは老人の意、田舎で用ゐる言葉、セークスピーヤの “*Macbeth*.” の中にも用ゐてあります。Eftsoons と云ふのは「やがて」と云ふ意です。

第五行の始めは、第四行の終で、彼老水夫が、客人を捉へた手を放したので、此度は燦爛たる眼を以て客人を捉へたと云ふのであります。Wedding-Guest とは婚禮の宴へゆく客人であります。第五行の句にも、また頭韻が押して御座います。

The Wedding-Guest sat on a stone.

He cannot chuse but hear;

And thus spake on that ancient man,

The bright-eyed Mariner.

“*The ship was cheered, the harbour cleared,*

Merrily did me drop

Below the kirk, below the hill,

Below the lighthouse top.

客人は石上に踞せり、

彼は聞かざるを得ざるなり。

かくて眼 光爛々たる水夫は、

語り始めたなり。

『船は搖ぎ港を離れたり、

われ等は樂しげに下りぬ、

會堂の下、小山の下

燈明臺ある岬角の下に。

第二行目の He can not chuse but hear は「彼は何うもすることが出来なかつた、只だ聞くあるのみ」と云ふ意であります。第三行は And thus that ancient man spake on とするとよく分ります。そして第四行にある The bright-eyed Mariner は、上行

のエンセント、マンとアツボシシヨンであります。第五行の cheered とは「喜ぶ」「うれし」などの意ですが、こゝでは船が飄々として樂しげに軽く揚つたこと、cleared とは出港したこと。此の二字は「イーアード」と、中に字を隔てゝ韻を履んでゐます、これを間韻と申します。又た drop は down の意で御座います。

“The Sun came up upon the left,
Out of the sea came he!
And he shone bright, and on the right
Went down into the sea.

“Higher and higher every day,
Till over the mast at noon—”
The Wedding-Guest here beat his breast,
For he heard the loud bassoon.

『太陽は海より出で、
左手に昇りたり、

瞳々とかがやきて、
右手の方海の果てに落ちぬ。

『日毎日毎やうく高く、
真午には橋の真上にかゝる——』
客人はその胸を打ちぬ、
長笛の高鳴るを聞きつればなり。

第一行の *The Sun* *the left* は、船が南の方へ向いてゆくから、朝日は恰度左舷にあたつて昇る勘定になります。第二行の *Out* は *from* の意、*he* は太陽を指して云つたのであります。第四行の *Went down into the sea* は「海の中へ落ち込んで了ふ」の意、その左手に落ちるのは、船が南行してゐるからである、西手即ち左手に當るからであります。

第五行の *Higher and higher* は「次第に高く」の意であります。「段々何々する」と云ふ場合には、何時も此う使ひます、例せば “*darker and darker*” とか “*Redder and redder*” とかは、即ちこれでありませぬ。

the loud bassoon とは「聲高くひびくバズーンの音」と云ふ意。バズスウンと云ふのは長笛でありませぬ、辭書には、*The musical wind-instrument filling an important place in the modern orchestra* とあり、概してマツプルの木材から造られるものぢやな。

*The bride hath passed into the hall,
Red as a rose is she;
Nodding their heads before her goes
The merry minstrelsy.*

*The Wedding-Guest he beat his breast,
Yet he cannot chuse but hear;*

And thus spake on that ancient man,
The bright-eyed Mariner.

花嫁は大廣間に進み出でぬ、
彼の女は薔薇のごとく紅なり。
彼の女の前に頭を垂れてゆくは、
樂しげなる俗人なり。

客人はその胸を打ちぬ、

されど聞かざるを得ざるなり。

かくて眼 光爛々たる

老水夫に語り進みぬ。

laced into は、歩み入るの意、第二行は、She is red as a rose と置きかへれば、

意味がよく分ります。Nodding は bending のこと、第三、第四の二行は一所にして、
The merry heads, goes before her とするとよく分ります、第四行は即ち、第三
行の主格に成つてゐるので、御座いますが、minstrelsy は單數であるのに、their
heads は複數であつて、撞着してゐるやうですが、前者は樂人の一組ですから、單
數であるし、後者はその組の中の人々の頭を指いたのですから、複數に成つてゐる
のです。第五行以下は、前に説いて置いたものと同じですから省いて置きます。

“And now the storm-blast came, and he
Was tyrannous and strong;
He struck with his o’ertaking wings,
And chased us south along.

“With sloping masts and dipping prow,
As who pursue I with yell and blow
Still treads the shadow of his foe,
And forward bends his head,

Anl ice, mast-high, came floating by,
As green as emerald.

“Anl through the clefts the snowy cliffs
Did send a dismal sheen;
Nor shape of men nor beasts we ken—
The ice was all between.”

『やがて靄と雪と降り来りて、

奇しくも空は寒くなりぬ、

檣と高き氷は漂ひ来れり、

こは宛がら緑玉の如く緑し。

『氷塊を貫ぬきて雪片は、

凄惨なる光を發せり、

吾等は見ゆ、人にもあらず獸にもあらずと——

氷の間に吾れ等はあり。

wondrous とは「驚くべく」又は「奇しく」の意、第四行の as emerald は、名詞だから like でなければならぬやうだが、これは下に “is green” が略してあるので、間違ではありません。エメラルドと云ふのは、尊い緑色の璧玉であります。

第五行の clefts は、clefts のこととあり、dismal は「物凄」の意、we ken は、we look の義、若しくは we know の意であります。第八行をパラフレーズして見ますと、We were between the drifts となり、

“The ice was here, the ice was there,
The ice was all around;
It cracked and growled, and roared and howled,
Like noises in a swound!”

“At length did cross an Albatross.
Thorough the fog it came;

As if it had been a Christian soul,
We hail'd it in God's name.

"It ate the food it ne'er had eat,
And round and round it flew.
The ice did split with a thunder-fit,
The helmsman steered us through.

『右も左も皆な氷、』

前も後も又た氷、』

氷の裂け、呻き、叫び、吼ゆるや、

宛も氣絶したる人の聲の如し。

『はるけき方より、アルバトロスは、』

靄を冒して飛び來れり、』

宛がらに基督教徒の靈魂の如く。

われ等は神のみ名の下にそを歓迎へぬ。

『そは曾て食まざりしものを食みて、』

くるくると飛び廻りぬ。

氷は雷霆の下に碎け、』

舵取はわれ等を進めぬ。

第一行の *was here and there* は「右にも左にもある」と云ふ意、第二行の *The ice was all around* は、周囲が氷に圍まれてゐるとの意です。 *noises in a swound* とは「氣絶した場合に於ける聲」と云ふ意味で、氷の裂ける音を形容したので御座し。

第五行は *At length* の次へ、 *an Albatross* を入れるとよく分ります。アルバトロスは、俗に云ふ「阿呆鳥」のことで御座います。第八行目の *hail'd* と云ふのは、

歓迎即はち Welcome の意で御座います。第九行 *it never* は *it had not ever eat* と同意、第十一行の split は「砕かれた」と云ふ意であります。

“And a good south wind sprung up behind;
The Albatross did follow,
And every day, for food or play,
Came to the mariners' hollo!”

“In mist or cloud, on mast or shroud,
It perched for vespers nine;
Whiles all the night, through fog-smoke white,
Glimmered the white moon-shine.”

“God save thee, ancient Mariner!
From the fiends that plague thee thus!—
Why look'st thou so?”—“With my cross-bow
I shot the Albatross.”

『かくて南風はそよ〜と後より吹きぬ。』

アルバトロスは従へり、

日毎日毎、食ひ且つ遊ばん爲めに、
水夫の空房に入り來れり。

『雲霧の中、帆檣の上を、』

アルバトロスは、九夜の間、離れざりき。
夜すがら白き烟の如き靄の中に、
白き月光は輝きぬ。』

『神よ守れよ、汝、老水夫。』

汝を苦しむる悪魔より脱れしめよ。——
何故に汝はしかく眺むるぞ。——『十字弓もて
われはしもアルバトロスを射たり。』

sprung は湧くこと、此處では blow の意、for food or play は「食餌と遊戯とを求めて」の意、hollo は hollow の略、空房のことです。第五行 shroud は「帆」のこと、vespers は evenings の意、fog smoke white は「烟のやうに白い霧」の意であります。Glimmered は「かやく」の意、月光のさせることを云ふのです。かゝるおぼろげ即はず「Obscurity」を謳ふことは Romanticism の特色で御座います。

第九、第十の言葉は、客人が水夫の爲めに云つて呉れた言葉でありますが、第十一行で、客人が「何故お前さんは、そんな變な目付でちろく」と眺めるのだ」と聞きますと、老水夫は、「十字弓でアルバトロスを射た」と答へる一條で、此の第一段は終るのです。此の鳥を殺してから、いろんな變事が起つて來まして、此の詩にも花が咲くのでありますが、先づこゝで評釋を止めておきます。

~~~~~  
LOVE.  
~~~~~

All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stirs this mortal frame,
All are but ministers of Love,
And feed his sacred flame.

戀

すべての思想や、感情や、歡喜や、
此の有限の肉躰を動かすものは、
みな是れ戀の神の助手、
その淨けき靈火を養ふに過ぎず。

これは『戀』の詩の「スタンザを拔萃したものであります。第二行の this mortal frame とは「人間の肉躰」をさいたのです、モータルとは「亡ぶべき」、「死すべき」、「有限なる」との意、are but と云ふのは「只………のみ」若しくば「………に過ぎ

す」との意であります。Love と云ふのは、頭字がキャピタルで書いてあるから「戀の神」即ちキユピットのことと御座います。ministers は「助手」の意、云ふ心は、思想、感情、歡喜等、すべてキユピットを助けて、その汚れざる神秘の靈火を養ひ育てるに過ぎないと云ふので御座います。

III. SHELLEY.

ODE TO THE WEST WIND.

I.

O, wild West Wind, thou breath of Autumn's being,
Thou, from whose unseen presence the leaves dead
Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing,
Yellow, and black, and pale, and hectic red;
Pestilence—stricken multitudes: O, thou,

Who chariotest to their dark wintry bed
The winged seeds, where they lie cold and low,
Each like a corpse within its grave, until
Thine azure sister of the spring shall blow
Her clarion o'er the dreaning earth, and fill
(Driving sweet buds like flocks to feed in air)
With living hues and adorns plain and hill:
Wild Spirit, which art moving every where;
Destroyer and preserver; hear, O, hear!

第三章 シェレイ

西風の頌

第一

あはれ烈しき西風よ、汝は秋の息吹、
汝の姿は見えねど、枯葉ぞ、

驅り立てらるゝ、山伏に逐はれて逃ぐる幽靈のごと。

黄く、黒く、青く、紅く、

疫病に罹りたらんやうなる千萬の者共の、

暗き冬の床にまで車に載せて汝は驅るよ羽はえし種子。

その床に種子は冷かに低く、

墓の中なる骸のごと横はる。

汝が妹、春風の喇叭を吹きて、

夢みるが如き地上を醒まし、

(空中に育つ群の如く美はしき芽を驅りて、)

鮮やけき色香を山野に充たすまで。

烈しき精靈よ、汝は何處にても自由の身、

破壊者たり、建設者たり。聞けよ聞け。

第一行の *Breath of Autumn's being* と云ふは、西風を以て秋の身の息と見做したものです。第二行の *Whose* は西風を受けてゐます、西風は人の目に見えないやうに存在して、枯葉を驅り立てるとの意です。第三行の *enchanter* とは、日本で云はば「山伏」のやうなものです。又第四行の "*hectic red*" と云ふのは、消耗熱に罹つたものゝやうに赤くなつてゐるのを云ふのですが、第六行の *their*……は、黄、黒、青、紅、罹病の千百の者共を受けてゐます、*who* は西風を受けてゐるのです。

第六、七行をつゞけて、*Who (the west wind) chariotest the winged suds to their dark wintry bed.* とするとよく分ります。where は *their bed* を受けてゐるのです、その冬の床に、彼等(羽生えし種子)は寒く低く横つてゐるが、その様は宛然墓中の死骸のやうだと云ふのであります。

Thine azure sister of the spring とは、春風のことです、「汝の春の青い姉妹」とは、

そよ／＼吹く春風で、烈々たる西風には妹に當ると見ればよろしい、面白い形容で御座います。第十行 *o'er* は *over* の略、*her* は *sister* を受けてゐます。

第十二行 *living* とは「鮮やけき……」との意、第十三行の *Wild Spirit* とは西風の放縦なる精霊のことを云つたのです。「建設者にして破壊者を兼ねる」と云ふのは、西風は木の葉を凋落せしめて、野山の様を破壊するけれども、一面羽生えし種子を彼の面此の面に送つて、その姉妹の青き息が吹くときには、馥郁たる花香、嬋娟たる花色、野や山やを允たすに至るからであります。實に、この最後の二行は、力の籠つてゐる句で御座いまして、三文詩人の模倣し得ぬところであります。which art moving every where……何等の妙想ぞ、奔放不羈の西風の性質を云ひ現はして頗る妙です。

II.

Thou on whose stream, 'mid the steep sky's commotion,

Loose clouds like earth's decaying leaves are shed,
Shook from the tangled boughs of Heaven and Ocean,
Angels of rain and lightning: there are spread
On the blue surface of thine airy surge,
Like the bright hair uplifted from the head
Of some fierce Menad, even from the dim verge
Of the horizon to the Zenith's height
The locks of the approaching storm, Thou dirge
Of the dying year, to which this closing night
Will be the dome of a vast sepulcher,
Vaulted with all thy congregated might
Of vapors, from whose solid atmosphere
Black rain; and fire, and hail will burst: O, hear!

第二

汝の流の上、
險しき空の動搖の中に、
ゆるぎ雲は、
空と海との縫れたる枝より
振ひ落されて

地上の衰葉のごとく注がる。

雨電の天使たる雲こそは、

汝が空中の大浪の青き表面にぞ擴がる、

そは宛がら似たり、光輝燦爛たる

ミーナドの頭髮が逆立てるに。

遙けき地平線の果より高き天上に

達かん程の大嵐のちやれ髪。

汝、ゆく年の哀悼歌、汝に取りては、

この除夜は、汝が吹き集めし蒸汽をもて茸かれし、

廣きみ寺の丸屋根たるべし。

その蒸汽のかたき塊より、

黒雨や、電や、霞や、たばしるらん、あはれ聞け。

第一行の whose stream とは「西風の大洪水」の意、西風はあだかも空中にあふる、流の如しと云つたものです。第三行の the tangled boughs of Heaven and Ocean と云ふのは、「龍卷」のことをたとへたので、之れは恰度、空と海との間に纏れた枝のやうなものだと云つたのです。

第四行の Angels of rain and lightning は、雲のことなのですが、雲の中でもこれは夕立雲、嵐をはらむ雲を指したので、それは、あの青々とした空中の浪の表面に漂つてゐると云ふのです。The locks…… は、その晴雲から、大嵐が吹いて來るから、思ひ付いた言葉であります。

第十行の dying year とは「ゆく年」のこと、「ゆく年の哀悼歌」と云ふのは、西風が吹きに吹いて、雨電霰雪をはらむ水蒸氣を吹き集め、それで以て茸き上げた寺院の丸屋根にもたとへつべき夜の宇宙が終を告ぐれば、明日はもう新年です、西風はげにゆく年の死を果敢なんで哀悼の歌を歌つてゐると云ふ意です。

念の爲めに云つて置きませんが、*Digue*と云ふのは、funeral song のことで、葬式の場合などに使ふもの、*Tirerody* と云ふのは、人間胸中の Laments を歌つたもの、また、*Elegy* と云ふのは、死人などを追懐、回想して歌ふものでありますから、第一のを、「挽歌」第二のを「哀歌」、第三のを「悲歌」とでも譯すればよいでしやう、尤も必らずしも此う劃然と區別のついてゐる譯でも御座いませぬ。

三.

Thou who didst waken from his summer dreams
The blue Mediterranean, where he lay,
Lulled by the coil of his crystalline streams,
Beside a punice isle in Baiae's bay,
And saw in sleep old palaces and towers
Quivering within the wave's intenser day,
All overgrown with azure moss and flowers
So sweet, the sense faints picturing them! Thou
For whose path the Atlantic's level powers

Cleave themselves into charms, while far below
The sea-blooms and the oozy woods which wear
The sapless foliage of the ocean, know
Thy voice, ane suddenly grow gray with fear,
And tremble and despoil themselves: O, hear!

第三

汝こそは眞夏を夢みて、
水晶の如き潮の渦に柔らげられて横はれる、
蒼々たる地中海を呼び起したれ。
バイエイ灣中、火山島の傍、
見ゆるよ、海静かに眠れるとき、
浪の鋭光中に古き殿樓の震へるを。
さは美はしの青苔青花をもて蔽はれ、

描かんとするや視覚は絶々となる。

汝西風の途上にアトランチックの水力は、

己が身を二つに分つ。かの深き海の底にありて、

洋の液なき枝葉を着くる、

海の花や、泥中の草木さへも、

汝が聲を聞き知るや恐れおのゝき、

俄かに白み顫動へて自ら凋落す、あはれ聞け。

第一行、第二行の his, he は、メヂタラニアンを受けてゐるのです、この意味は、「汝西風は、地中海が夏の夢見をしてゐる時、その水晶の曲流に柔らげられて、こくり〜とやつてゐるのを呼び起した」と云ふことであります、didst waken の目的辭は The blue Mediterranean なので御座います。

第五行の in sleep とは「浪が静かな時」と云ふ意であります。また第六行の the

wave's intenser day と申しまするは、鋭き日光が海の上に照りつけ、よくその底の見える時には、底ふかく沈んだ宮殿樓閣が見えるとの意です。これは地中海の岸にあつた古の都府が、地震か何かの爲めに河中に陥落したのが、浪の静かな場合に見えることと云ふことを歌つたのです。the sense faints とは「感覚が衰ふ」と譯すべきですが、こゝでは單に視覚がにぶると云ふ意で、かの浪の底の宮殿樓閣を描かうとすると見えなくなると云つたのです。

第八行の level powers とは「平たき力」即ち水力のことを申したのであります。第九行の Cleave themselves into charms は直譯すれば「裂目にまで彼等自身を分つ」と云ふので、水が眞二つに分れてゐると云ふことを主觀的、主我的に述べたのであります。

sapless と云ふのは「液汁のなき」と云ふ意味、サップとは概して植物に限られて云ふやうです。「洋の液なき葉」と云ふのは「浪」のことを云つたのでしやう。此の四

行總體の意は、西風が吹くと、海底にある海藻さへも、それを知つて、冬の凋落に入ると云ふのです。grow gray とは「白くなる」ことで御座います。

IV.

If I were a dead leaf thou mightest bear;
 If I were a swift cloud to fly with thee;
 A wave to pant beneath thy power, and share
 The impulse of thy strength, only less free
 Than thou, O, uncontrollable! If even
 I were as in my boyhood, and could be
 The comrade of thy wanderings over heaven,
 As then, when to outstrip thy skilful speed
 Scarce seemed a vision; I would ne'er have striven
 As thus with thee in prayer in my sore need.
 Oh! lift me as a wave, a leaf, a cloud!
 I fall upon the thorns of life! I bleed!
 A heavy weight of hours has chained and bowed
 One too like thee; tameless, and swift, and proud.

第四

吾にして若し汝の荷ひ得可き枯葉ならんには、
 吾にして若し汝と共に走るべき飛雲ならんには、
 汝が力の下に呻き、汝が力の餘勢を分かち、
 汝に比すればいさゝか自由の度は少なくなとも、
 なほ不羈なる海洋の浪ならんには、
 吾にして若し稚子の時の如く、
 空に漂ふ汝の友となりて天翔りゆく汝の速度を
 追ひ越すことを空想と思はざらんには、
 われはゆめ／＼かくの如く、
 求めて祈りて汝と共に努めざりけんを。
 あはれ吾を浪や、木の葉や、雲やの如く吹上げよ。

今やわれは人生の刺の上に倒れて血を流せり。

重き長時間の重錘は、汝西風にも似て、

不羈磊落、慄慄自尊なる人を縛り屈ましむ。

If I were は假定であります、人が枯葉になることは断じてないのですが、それを假定して、「若し枯葉であつたなら………」と云ふので御座います。Thou mightest bear は普通ならば thou may bear とする所ですが、前の文句が假定で were 即ち are の過去を用ゐるから、後でもそれに呼應する爲めに may の過去 mightest を用ゐるのであります。

第三行の A wave も亦前行と均しく、その前に If I were が置いてあるものと見るべきです。第四行の only less free than thou は、「汝に比べれば、只だ少しく自由の度が少ない許りであるが………」と云ふ心持です。uncontrollable は「制することの出来ないもの」の義ですから、放縱不羈と云ふ意に成ります。outripe は追

ひ越すこと、thy skily speed は、汝の空の速度、即ち西風が虚空を駛りゆくことなのであります。

第九行の Scarce seemed a vision と云ふのは、「殆んど幻想、空想とは思はれなかつた、實行の出来ることのやうに思はれた」との意味です。第十一行あたり、詩人の情高まりて、自己の感情を吐露し、Epic poetry は一轉して非常に Lyrical に成つて來た。殊に第十三行至りましては、全く風に寄せて、人間——就中シエレイ自身のことを述べてゐます、その意は世に偶々奔放不羈の偉人あるも、長時間のおもりは之を壓迫し是を屈從せしめて、その倨傲峻峭の志操を失はしむるとの意味であります。chained and bowed のオブセクトは one でありませんが、one 以下の文章は One that resembles too much to thee とすると、その意味がよく分るので御座います。tameless は馴れない、不羈自由なること、swift は猛りはやること、proud は倨傲驕慢、自尊の心の高いことであります。

V.

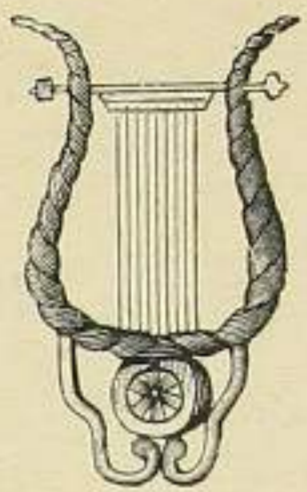
Make me thy lyre, even as the forest is:
 What if my leaves are falling like its own!
 The tumult of thy mighty harmonies
 Will take from both a deep, autumnal tone,
 Sweet though in sadness. Be thou, spirit fierce,
 My spirit! Be thou me, impetuous one!
 Drive my dead thoughts over the universe
 Like withered leaves to quicken a new birth!
 And, by the incantation of this verse,
 Scatter, as from an unextinguished hearth
 Ashes and sparks, my words among mankind!
 Be through my lips to unawakened earth
 The trumpet of a prophecy! O, wind,
 If Winter comes, can Spring be far behind?

第五

吾をして汝の樂器たらしめよ、風に鳴る森の如きも厭はず。

かくてわが生命の木の葉、實の木の葉と落ちんとも何ぞ關せん。
 汝が大なる妙樂のどよめきは、
 森と我より沈める秋の調曲を取らん、
 その調曲は悲みの中にも喜びあり。汝烈しの精靈よ、
 汝、わが精靈たれ、汝れ猛烈なるものよ、
 汝、早く新しき生誕を再びせん爲め、萎みたる木の葉の如き、
 生氣なきわが思想を驅り立てよ、
 此の詩句の呪力によりて。
 まだ消えぬ爐より灰と火とを出す如く、
 蒔き散らせわが言を人類の間に。
 まだ醒めざる地上にわが言を擴めしめよ。
 豫言の喇叭、あはれ風、

冬は來るとても春は遠からざらんや。



第一行の Lyre は圖のやうな樂器です、又た even as the forest is は、「かの風に鳴る杜の如くに鳴るやうでも可いから、兎に角、私を汝の樂器たらしめよ」との意です。かく云ふのも、風がある時、森はさざめいて天來の音樂を奏するからです。第二行 my leaves はわが影を木の葉にたとへたのです、そして木の葉は散るものですから、その行の終まで like its own 卽ち「實の木の葉のやうに、私の木の葉も散つても構はない」と云つたので御座ます。

第四行の from both は「私と森との双方から」の意、次行の Sweet though in sadness は、「悲しき中にさへ樂しきはある………」と云ふ意、第七行の over the universe は「天下を超えて」の意で御座います。

incantation とは、由來呪文のことなのですが、こゝでは「詩の力」とやう解釋し

ます、つまり面白く云ひ現はしたまで、意味は單に力と云ふに解すればよろしいのです。my lips 卽ち「吾が舌」は、「此の歌」と云ふ意味を持つてゐます。最後の二行は、西風が破壊と同時に、建設をするから思ひついた想で、「汝が吹いて冬はかくの如く來ても、やがて又た春の還らぬことはないでは無いか」と云ふ意で御座います。

A LAMENT.

(1821)

I.

O world! O life! O time!
On whose last steps I climb,
Trembling at that where I had stood before;
When will return the glory of your prime?
No more—oh, never more!

悲しみ (千八百二十一年作)

第一

あはれ世よ、生命よ、時よ、
われはその階段の前に立ちて、
うち顛ひつゝ攀ち上るなり。
何時のときにか汝が光ある青春は還る。
最早還らじ——あはれ還らじ。

これは Threnody の一種で、Lament を歌つたもので御座います。シエレイは年若くして死んだ薄命詩人で、その作は量に於いては多くありませんけれども、質においては優れたものが澤山御座います、殊にその思想は、常に清新奇抜で、全く Classical な所、Conventional な所が御座いません。

第一節第三行の that は steps を受け、where は階段を受けてゐる。又第二行の

whose は、世と生命と時とを受けたもので、始めは世、命、時の階前に立つてゐたが、遂に身顛ひしつゝ攀上つたと云ふ意であります。

No more は return にかゝり、光榮ある青春時代は最早や歸り來らぬ、と云ふ意味に成るのです、調子何となく淋しく、誦すると心細い感じがします。

二.

Out of the day and night
A joy has taken flight;
Fresh spring, and summer, and winter hoar,
Move my faint heart with grief, but with delight
No more — oh, never more!

第二

晝夜を捨て、
歡樂こそは飛び去りたれ。

芽ぐむ春も、夏も、はた淋しき冬も、

わが心は悲をもて動かさる、さはれ喜びにては

最早動かじ——あはれ動かじ。

Out of the day and night は、晝の外、夜の外に歡樂は飛び去りたれば、「晝も夜も楽しくはない」と云ふ意味に成ります。つまり悲しく月日を送ることです。

Fresh と云ふのは、「生氣ある」とか「活潑な」とか「生々した」とか云ふ意味で草木がみな芽を萌やして、何となく春は活動してゐるやうに見えるから、此の字を使つて活かして來たのです。これも矢張り一種の人間化で、詩には必要な修辭法であります。

hoar と云ふのは、霜の白いことなどを形容する言ですが、此處では「枯槁」と云ふやうな意味を持つてゐます、つまり蕭殺な冬といふことに成るのです。

最後の行の No more——云々は、その前の行の More にかゝり、but with delight

へ續くのです。その意味は自分の心は今ばかり悲歎でばかり動き、楽しく面白いこととはないから、歡樂で動くやうなこととはないと云ふ意であります。

此の歌は、青年歡樂の時代は既に過ぎ去つて、自分は今しも世と命と時との最後の階上を登りつゝあるから、悲しいこと許り多くて、楽しいことは少しもない。といふ意で、われ知らず涙の溢れる歌です。これを誦すると彼の劉廷之の「應憐半死白頭翁。此翁眞可憐。伊昔紅顏美少年。」と云ふ句も思ひ出されて、淋しい感が致します。

TO NIGHT.

(1821)

I.

Swiftly walk over the western wave,
Spirit of Night!

Out of the misty eastern cave,

Where all the long and lone daylight
Thou waviest dreams of joy and fear,
Which make thee terrible and dear,—
Swift be thy flight!

夜の神に寄す (千八百二十一年)

第一

とく歩め西の海こえて、

夜の神の精霊よ——。長く淋しき暮を迷ふ、

霧ふかき東の窟の外に、

汝こそ織りなせ 歡と恐との夢、

さは汝を恐れしめはた親ましむ——

疾く飛べ汝よ。

the western wave は西海の意であります。そして Swift は普通では、單に夜の意

味に成りますが、花文字が使つてありますと、夜のみ神と云ふ譯に成るので御座います。第三行の where は eastern cave を受けたもので、これは日の神のゐる所と思へば間違がありません。

この歌は、つまり夜の神を渴仰するものですから、その積りで讀まぬと、譯が分り難いので有ります。日光煌々たる晝を棄て、暗々たる夜をとると云ふことは、或る人々——殊に日本人などには、變挺に思はれますけれども革新派、即ち傳奇派 Romanticist などには、よく有る事なのです。

序ですから云つて置きますが、ローマンチシストの三特色は無目的 (Purposeless)、無規則 (Lawlessness)、怠惰 (Idleness) でありまして、常に尙古派即ちクラッシ、ストのやうな觀念を持つてゐないので。傳奇派の人達は、只だ憧憬してゐるので、その云ふ所は朦朧 (Obscurity) であります。チムであります。シエレイなどはローマンチック、ムーヴメントの先達であります。かゝる詩人の作から教訓を得やう

などは、以ての外の誤想で御座います。

II.

Wrap thy form in a mantle gray,
Star-inwrought !
Blind with time hair the eyes of Day ;
Kiss until she be wearied out ;
Then wander o'er city, and sea, and land,
Touching all with thine opiate wand—
Come, long-sought !

第二

星かけ織り込める、
灰色の外套に汝が姿を包めかし。
汝が髪もて日のみ神の眼を眩ましめ、
その疲れ果つるまで接吻せよ。

さて不思議の杖もて萬物を撫でつゝ、
市を超え、海を超え、陸を超えて、
來れかし汝覓めらるゝ汝。

此のスタンザの譬喩は實に巧いもので御座います、夜の空を形容して、星かけ織り込める灰色の衣と云ふたのは、實に巧妙ぢやありませんか。 a mantle gray star-inwrought と云ふのは、夜天が灰色を染めて、恰度外套のやうに見え、燦爛として輝く星影は、宛かも灰色地へ織込んだ銀砂子のやうに見えるのを謳ふたものであります。

Opiate と云ふのは、魔藥(たとへば鴉片のやうな)を仕込んだと云ふ意味、魔藥の杖と云ふのは、西洋では皆な、魔術師は杖を持つて居りまして、その杖でいろいろな事を致しますから、夜の神もそれを持つてゐられる様に書いたのであります。 long-sought は、長らく探されつゝあつた、と云ふ意味に取れます、これは、「夜の

神よ、とく來れ、御身は探されつゝあり、」と云ふ意味なのです。本節の第五行は、日本の「野超え山超え里超えて」など云ふ古歌と、同じ調子で、頗ぶるメロヂアスであります。

III.

When I arose and saw the dawn,
I sighed for thee;
When light rode high, and the dew was gone,
And noon lay heavy on flower and tree,
And the weary Day turned to his rest,
Lingering like an unloved guest,
I sighed for thee.

第三

起き出で、曙光を見ると、
吾はしも汝にあくがる。

旭高く昇り露乾くとき、

午日の影花木に射せるとき、

疲れし日の神の寐床に行かむと、

好かぬ客人のごとたゆたふ時、

吾はしも汝に憧憬る。

sighed for は渴望、渴望、憧憬などの意で、かの Longed for と同意味であります。第四行以下の And は、第三行目の When に懸るので御座います。また turned to his rest は、日が西天に没すると云ふ意味、an unloved guest 即ち「すかぬお客」と云ふのは、早く歸つて了へば可いと思ふ客人が、ぐづぐづしてゐるやうに、日の神もろくろと彷徨してゐると云ふ意味で御座います。

heavy……云々は、午日花木が、萎れん許りにぐんにやりとしてゐるのを諷つたのであります。この節の Day も第一節の Night など均しく、日を神格化し

たもので御座います。此う云ふ場合には、いつでも何々の神と譯すれば間違が御座
 いません。水ならば水の神、雲ならば雲の神と譯するです。(つまり一種の多神教的
 考へで、日本も昔は、何物にでも神格を與へてゐました、祝詞などを見ると、澤山
 の神さまが出て來ます。何しろ總勢八百萬あると云ふのだから、大したもので御座
 います。

此の一節は、予は日を厭ふ、晝間を厭ふ、——予は夜間を以て理想の時とする旨
 を謳つたものなので有ります。此の思想は第四節へゆくと、殊に明瞭に成つて參る
 ので有りますが、一寸こゝで思ひついた儘を述べたので御座います。

IV.

Thy brother Death came, and cried,
 Wouldst thou me?
 Thy sweet child Sleep, the filmy-eyed,
 Murnured like a noontide bee,

Shall I nestle at thy side?
 Wouldst thou me?—and I replied,
 No, not thee!

第四

汝が同胞死の神は來て叫ぶらく、
 君はし吾れを求むるかと。
 汝が愛兒薄膜はれる眼の眠の神は、
 眞晝の蜂のやうに囁やく、
 吾いましの傍にいをねむか、
 君はし吾れを求むるかと——われ答ふ、
 否、否、汝にあらじかし。

此の節では、夜に近い、死と眠とを拉し來り、詩人の求むるは、その二つにあら

ずして、夜だといふことを書き現はしたのであります。眠の聲を蜜蜂のやうだとは
 巧妙なたとへ言で御座います。蜜蜂のふうくと眞晝中に呻つてゐるのは、實際ね
 むたげであります、それを此處に用ゐたのは手際であります。

死の神は、夜の神の男兄弟であり、眠の神は、その兒のやうにしてあるのですか
 ら、その積りで讀んで見ると、本節の意はよく分ります。the flimy-eyed は、眠の
 神の形容詞句で、眼のかすんだ薄い膜でも張つてゐるやうな」と云ふ意味です。
 Wouldst thou me? は略語です、これは何う云ふ意味に取つても構はないけれども、
 上意を受けて求むるに懸けた方がよいでしょう。Do you like me? とやうに取つ
 ても差問はない。

重ねて云ふが、本節の意は、死神や、眠神やが、夜神に似たる姿を以て接近し、
 自分に對して『如何です? 如何です?』と尋ねて來ても、自分は一向に平氣なもの
 で、『いや、わしは、お前達を好いてゐない、俺の求めてゐるのは夜だ、夜なのだ!』

と云ふ意味なのであります。これは第五節に入るべき伏線で、第五節では最後の絶
 叫として、夜神を讚美するに終るのであります。

V.

Death will come when thou art dead,
 Soon, too soon;
 Sleep will come when thou art fled;
 Of neither would I ask the boon
 I ask of thou, beloved Night,—
 Swift be thine approaching flight,
 Come soon, soon!

第五

汝かくる、や死の神は疾く來る、
 その來るあまりに疾し。
 汝飛び去るや眠の神も亦た來る、

さはれ吾が求むる 資は何れにもあらず、
 わが求むるは汝なり夜のみ神よ——
 乞ふ疾く飛び翔りて、
 來よかし疾くく來よかし。

此の一節は全篇を總括して、夜神を讚美したもので御座います。第四行目の意味は The boon that I would ask is neither Death nor Sleep. で、吾が求むる所の天賜は天資は、死の神でもなく、また眠の神でもない、只だ夜の神だと云ふのであります。 Beloved Night——と云ふのは、わが愛する夜の神よと云ふ意味であります。 thine approaching flight と云ふのは、達する程の飛翔、即ち飛翔つて來り達せよと同意味であります。

夜は闇黒で、その價值は暝々たる點に存じてゐる、夜が來ると一切の醜穢は、その灰色のマントルの中に封じこめられて、只だ黒一色——それを見ると云ふと淨化

されたやうに思はれます。無論夜陰に於いて幾多の罪惡は行はれるであらう、けれども、晝間は見るに忍びざるものも、夜は隠されて清淨無垢の天地と化します。私は矢張り夜の讚美者であります。シユレイ——ロマンティストたる彼れが、口を極めて、之を讚美し、その出現を望んだのは、尤も千萬な事だと思ひます。此の詩は、あまり可いと申す方でも御座いますまい、けれども何處やら、幽しい、秀でた、毛色の變つた處があります。此の詩の内容は、一二兩節に於いて崇美を歌つてゐますが、三四五と來ると、餘程詩想が違つて來て、首節と類の異なつたことを云つてゐます。兎に角面白い詩であります。

ODE TO A SKYLARK.

I

Hail to thee, blithe spirit,
 Bird thou never wert,

That from heaven, or near it,
 Poorest thy full heart
 I profuse strains of unpremeditated art.

雲雀の歌

第一

汝を祝せん樂しき精靈よ、

汝は鳥にあらじかし。

大空あるは空ちかき處より、

汝の溢れたる胸の思を注ぎ出す、

歌はげに企てがたき巧みなる調べ。

第一行の Hail to thee は「汝をたへむ」又は「汝を祝せん」と云ふ意味、第二行は thou never wert bird と置き更へると、その意味がよく取れます。第四行、第五行の意味は、雲雀が、溢れん許りなる胸の思を不可企的なる技術の、ゆたけき形

式で注ぎ出す——即ち歌ふことと云ふことに成るのであります。In profuse strains とは「豊けき形式で」と云ふ意です。此の一節では、シエレイは先づ雲雀の聲を讚美してゐます。

II.

Higher still and higher,
 From the earth thou springest
 Like a cloud of fire;
 The blue-deep thou wingest,
 And singing still dost soar, and soaring ever singest.

第二

高くまた高く、

地上より舞ひのぼりて、

汝は火の雲の如く湧く。

青空に汝は上りて、

翔りつゝ、歌ひ、歌ひつゝ、翔る。

第一行の Higher still and higher は「漸々高く尙ほ高く」の意、前にも云つて置いた如く、次第に暗くなるとか、漸々低くなるとか云ふ場合には、darker and darker とか、lower and lower とか書くので御座います。此う云ふ風に書くと、grew gradually dark (or low) と同一の意味になります。

a cloud of fire とは面白い形容であります、一寸と思ひ付きません。The blue-deep と申しまするは、「青き底」の意で、蒼空のことを譬へて云つたのです。第五行の「翔りつゝ、歌ひ、歌ひつゝ、翔る」と云ふことは、誰しも云はんと欲して、容易に云ひ得ない處で御座います。

III.

In the golden lightning
Of the sunken sun,
O'er which clouds are brightening,
Thou dost float and run.

Like an unbodied joy whose race is just begun.

第三

沈みたりし日の、

黄金なす光りの中、

日の上部、雲の輝やけるところ、

汝は漂ひ且つ走る。

形なき喜びの競走を始めたるがごと。

lightning と云へば、普通に「稲妻」の事に呼びなされてゐるのですが、茲では、日光のことです。the sunken sun と云ふのは、沈みゆく日 (Sinking sun) と取り違へることが多くありますけれども、實は「沈んでゐる日」なのですから、朝日の事に成るので御座います。その朝日の上に燦爛たる雲が懸つてゐる明方の景色を歌つたのです。which は sun を受けてゐます。第五行の whose race は、直ぐ上の joy

を受けてゐるのですから、雲雀の漂ひ走るさまは、全で形のない歡喜のやうなものだが、その歡喜も今し方恰度競走が始まつたのに似てゐるとの意味で御座います。

IV.

The pale purple even
Melts around thy flight;
Like a star of heaven,
In the broad daylight
Thou art unseem, but yet I hear thy shrill delight.

第四

青紫の薄光は、

汝の四方をめぐりて溶けぬ。

天の星かげのごと、

たゆたふ日かげの中に、

汝が姿はかくれぬれど、樂しげなる聲は聞ゆ。

前節では朝の景色を背景にして雲雀を描きましたが、今度は夕暮の様を描き出してゐます。第一行の The pale purple even と云ふは、青と紫とが混じたやうな色の薄暮の光り、雲などのことを云つたのです。around thy flight とは、「飛べる汝をかこむ」と云ふやうな意味で御座います。Melts のサブゼクトは勿論 even で御座います。

第三行以下の意味は「煌々たる太陽の光りの中に、消えて見えなくなる汝は、あの星かげに似てゐる……汝の姿は見えなくなつても、汝の鋭くなく喜ばしげな聲は聞こえる」との意味ですが、第五行の unseem は、unseen と同じです、又た but yet は、わが國の「されど尙ほ……」の使ひ方と全く同一で御座います。

此の雲雀の歌は、全篇二十一節から成つてゐまして、シエレイの作の中では傑作で御座いますが、紙数が許しませんから、始めの四節のみを掲げて、その大意を窺ふに止めて置きます。つい前の “Ode to the West Wind” で云ふのを忘れましたが、“ODE” と云ふのは、一種の讚歌 (Hymn) で御座いますが、これは神以外の

ものをたへ、彼は神若しくば神格化されたるものをたへるやうに見えます。勿論其の間に確乎たる定めはありませんが、何うも兩者の差點はそこに存じてゐるやうです。で、ヒムを「讚歌」と譯するに對し、オードを「頌」と譯出しました。

IV. BYRON.

THE PRISONER OF CHILLON.

I.

My hair is gray, but not with years,
Nor grew it white
In a single night.
As men's have grown from sudden fears;
My limbs are bowed, though not with toil,
But rusted with a vill repose;
For they have been a dungeon's spoil,

And mine has been the fate of those
To whom the goo ly earth and air
Are banned and barred — forbidden fare.

第四章 バイロン

シヨンの囚人

第一

わが髪は白し、されど年老いたる故にあらず、
また一夜の中に、
白くなりたるにもあらず、
卒爾たる憂懼の爲めにしかくなりたる人のごと。
わが四肢は萎めり、されど苦役の爲めにあらず、
たゞ忘むべき安息をもて害はれぬ。

これ、わが四肢は牢屋の俘囚となりつればなり。

わが運命は、なつかしき地も踏まねば、

空氣も吸はぬ人々の如く拙くなりぬ——斷食とや云はん。

此の詩は千八百十六年、バイロンが英國を辭して、瑞西にゆき、そこに住んでゐる間に作られたのです。Chillon は「シヨン」と發音します、實際そこにはシヨン城と云ふのがありまして、幾年かは監獄に充てられてゐました。バイロンの謳つたやうな囚人は、無論事實上あつたものではありません。然るにバイロンは此の詩を書いた後、シヨン監獄に、この詩のやうな實際の囚人があつたことを聞きまして、また一つの小詩をつくりました。

Byron の作は皆、勇敢な、情熱な面影を以て充たされてゐますが、*"The prisoner of Chillon"* はその中でも悲壯沈痛、誦してゐても身振ひのするやうなところが御座います。そも／＼始めの起首から悲痛、傷歎、ふかき同情を惹き起す力が御座い

ます。此の詩は總べて、十四節ありますが、その中から、一、二、三、四、五、六、七と最後の十四との八節を抄して註釋を加へました。

is gray は「白くなれり」と云ふ意です。As men's..... は、昔し、心配の爲めに頭髮が一夜にして白くなつた人があつたことを云つたものです。バイロン自身はこれに對して註を與へまして、Ludovico Sfarza and others. The same is asserted to Marie Antoinette's, the wife of Louis the Sixteenth, though not in quite so short a period. Grief is said to have the same effect..... と云つてゐる。

第五行の limbs は支肢のことでありませう。第六行目の a vile repose と云ふのは「忌むべき安息」即ち、ちツとして監獄の中に呻き苦しんでゐることを云つたのです。第七行の they は limbs を受けたのですし、第八行の始めの mine は the fate of mine の略「わが運命」と云ふ意であります。

第九、十行は To those men the goodly earth are banned and the goodly air are

barred..... と直して見るとよく分ります。goodly とは「なつかしき」と譯すればよろしいです。banned は「拒まれたる」こと、即ち地が踏めないのを云ひ、barred は「禁せられたる」こと、即ち空氣が吸へないのです。其の監獄中に幽閉されてゐることを形容したものであります。云ひ忘れたが、第八行の And mine has been the fate of those は、「わが運命も、次のやうな人の運命に均しかつた」即ち、「われもその一人也」と云ふ意、そして those は次行の To whom 以下で説明してあるのです。

But this was for my father's faith
I suffered chains and courted death.
That father perished at the stake,
Fore tenets he would not forsake;
And for the same his lineal race
In darkness found a dwelling-place.

かく鎖に繋がれ死を迫らるゝは、

わが父の信仰の爲めなりき。

わが父は決然として信念の爲めに、

火刑の柱に死し給へり。

その正統の一族も亦た同一の信念の爲めに、

黒闇々の中にその住家を見出しぬ。

第一行の this は that で、それは第二行を受けてゐるのです。the stake と云ふのは、火刑の柱のこと、perished at..... は、その火刑柱の上で賊はれて死んだとの意で御座います。he would not forsake は「斷じて捨つるを欲せざりき」と云ふ意。for the same は、for the same tenets と云ふのを略したのです、第六行の In darkness..... 云々は、皆「牢屋の中に入れられて了つた」と云ふ意味になります。第四行の tenets は「榮」と譯するもよく、又「信念」と譯してもよろしう御座います。

We were seven who now are one—
 Six in youth, and one in age,
 Finished as they had begun,
 Proud of persecution's rage;
 One in fire, and two in field,
 Their belief with blood have sealed—
 Dying as their father died,
 For the God their foes denied;
 Three were in a dungeon cast,
 Of whom this wreck is left the last.

われ等兄弟すべて七人ありしが、今は一人となれり——
 六人は若く、一人は老いたりしが、
 何れも宗教迫害を物ともせず、
 當初の所信を遂行せり。
 一人は火刑につき二人は戦場に死しぬ、

彼等の信仰は血を以て印せられたり——

彼等は父の死せしが如く死せり、

これ蓋し、彼等敵が神に反きたればなり。

三人は牢屋にて殺され、

残りの者はこゝに生き長らへぬ。

第一行は、「始めの兄弟は皆で七人あつたが、今は六人は死んで了つて、一人だけ自分が残つてゐる」との意であります。第二行の six は自分の弟六人、 one in age は自分のことを指したのであります。第三行の finished... は、「彼等が始めのごとく終を全うした」と云ふ意、 begun は主義を始めたと云ふのでしやう。

第四行の意味は、「宗教迫害の怒をもともせず」と云ふことです、元來又も兄弟も、皆確乎たる宗教上の信念を持つてゐる爲めに、それと信仰を異にせる爲政者の爲めに迫害せられて、或は火刑に死し、或は戦場に死したと云ふのです。

第六行の意は、堅くして破るべからざる信仰は血を以て印せられて、死を迫らるるも尚ほその信仰は挫げられなかつたとの意です。第八行の "Far the God their foes denied" は「彼等の敵が神に背いた」と直譯しますが、その意味は、「宗教の敵が、われ等の信じてゐる神を拒みましたから、それで三人は死んだのだ」と云ふことに成ります。their は、three brother と見るもよく、又 they and their father と見るも苦しくはありません。

Of whom this wreck is left the last と云ひますのは、「死んで了つた三人から、此の残りの者が後に取り残された」との意、つまり三人が死んで了つて、われ等が後へ残つたと云ふ事なのです。

II.

There are seven pillars of Gothic mould
In Chillon's dungeons deep and old;
There are seven columns, massy and gray,

Dim with a dull imprison'd ray—

A sunbeam which has lost its way,
And through the crevice and the cleft
Of the thick wall is fallen and left,
Creeping o'er the floor so damp,
Like a marsh's meteor lamp;

第二

シヨンの古獄には、

ゴシツク風の柱七つあり。

又別に石柱あり、太く、古く、閉ぢ込められし日の
力なき光を受けて幽暗なり。——

厚き壁の小孔や隙間を貫ぬきて、

射し込みし光は濕れる床上に匂ひつゝ、

その道に迷ひたりしが、

遂には落ちて止まりぬ、

そは宛がら沼中の燐火の如し。

pillars と云ふは圓柱のこと、Gothic mould と云ふは、「ゴツス風」の意、ゴツスと云ふのは、昔のチュートン人種の一種で、その始めバルチック海の南海岸に棲んでゐました。で、ゴシック式と云ふ中には、粗野な、自然な、など云ふ意味も籠つてゐます、常にグリーキ式に對して云はれる言葉であります。又建築上では、denoting a style of architecture with high-pointed arches, clustered columns. とやうの意義を持つてゐます。

第二行の columns と云ふのは「石柱」のことであり、massy and gray とは「太くして古びた」と云ふ意で、石柱の形容詞であります。Dim with は「何々の爲めに暗くされたる」の意、a marsh's meteor lamp と申しまするのは、「沼の燐火」の意で御座います。——第二節に入りまして、バイロンは、ぼつくとシヨンの囚

屋のことを説き始めました、その叙景叙事の巧妙なること、實に稱賛するに餘りがあるので御座います。

And in each pillar there is a ring,
And in each ring there is a chain;
That iron is a cankering thing,
For in these limbs its teeth remain,
With marks that will not wear away
Till I have done with this new day,
Which now is painful to these eyes,
Which have not seen the sun so rise
For years—I cannot count them o'er;
I lost their long and heavy score
When my last brother drooped and died,
And I lay living by his side.

各々の柱には環あり、
各々の環には鎖あり、

その鐵の齒痕ふかく印して、
四肢をして腐り果てしむ。

われ死して牢屋を出で、更に此の世の、

日光に逢ふまで消え去らざる齒痕は、

今やわが目にもいたましく見ゆ。

わが眼の物を見ざることを、

已に多年——われはその幾年經しかを知らず、

われは早やその長く悲しき日數を忘れぬ、

かくしてわが末の弟は衰へて死し、

われはしも長らへてその側に伏す。

第三行の *That iron* は「かの黒金は」の意、それは勿論鎖のことを云つたのであります、第四行の *its teeth remain* は「鐵の齒が印する」こと卽ち齒が四肢に食

ひ込みて明らかに痕を残すと云ふ意味です。第五行の *that* は *marks* を受けてゐます、*will not wear away* は「消え去らないであらう」との意であります。

第六行の *with this new day* は「此の世の光りに更に逢ふて」の意。第七行の *Which* は、*marks* を受け、第八行の *Which* は、*eyes* を受けてゐます。 *the sun so rise* は「昇る朝日」の意、本行は囚屋の中に長くゐて、暗窓の中に呻吟してゐるから、朝日の昇るのを見たことがない、偶々見るのは、厚壁の小孔を洩る、日影位のものだと云ふ意味であります。

第九行の *For years* は「多年」と云ふ意、*them* は、*years* を受けてゐます、本行の線より以下は、「幾年立つたか、私はそれを計へることも出来ません」と云ふ心です。第十行にある *their*……も矢張り、*years* を受けてゐるので御座いますが、その意味は「私は年の長く、物悲しき數を忘れた」と直譯します。

第十一行にあります *drooped* は「衰へた」、「萎えた」又は「凋んだ」と譯すれば

宜しう御座いませう。last brother は最も年若き弟、即ち末の弟のことで御座います。第十二行の his は my last brother を受けてゐるのです。その總意は、「私は生き長らへて、その側に横はつてゐる」とのこと。living by..... は中止法で、生きつゝ云々の意、それが今現在なるかの如く、現在法を用ゐて And I lay と書いたのです。

III.

They chained us each to a column stone,
And we were three—get, each alone.
We could not move a single pace;
We could not see each other's face,
But with that pale and livid light
That made us strangers in our sight;

第三

獄吏は石柱に吾等をつなげり、

われ等總べて三人——されど一人づゝ別々に繋がれぬ。

われ等は一步も歩む能はず、

また互に面を見ること能はざりき、

その青く弱き光りは、

吾等をして互に知らぬ人と思はしめたれ。

They とは「獄吏」のこと、us each とは「吾々をおのおの………」と云ふ意、yet, each alone とは「一人づゝ別々に」と云ふ意で御座います。第三行は「一步も歩むことが出来ません」との意、第六行の in our sight とは「吾々互の視覚にては」と云ふ事ですから「御互に知らぬやうに見えた」と云ふことに成るのであります。

And thus together, yet apart—
Fettered in hand, but joined in heart;
'Twas still some solace in the dearth
Of the pure elements of earth,

To hearken to each other's speech,
And each turn comforter to each—
With some new hope, or legend old,
Or song heroically hold;
But even these at length grew cold.

かくてわれ等兄弟は共なりしかども離れたり——
手こそ手架に離されたれ、心は結びつけられつ。
かの淨らけき世上の慰は、

よしや此處にては乏しくとも、

同胞互に語りつ聞きつ、慰め合ひしぞ嬉しかりける——

われ等新しき望、古き戯曲、

あるは勇敢なる歌をもて互に慰めしも、

終にはそれすら失せ果てにける。

yet apart とは、「尙ほ離れてゐた」の意、即ち皆一緒に居るにも拘はらず離されてゐたと云ふのであります。fettered in hand とは「手には手枷を嵌められて、各々の手は離れてゐるが」との意で御座います。第三行の始めの 'Twas は第五行目の To hearken to..... 云々を受けたのであります。

'Twas still some solace in the dearth とは「少ないながらも、尙ほ慰藉がありました」との意です。第七行の legend old は「古き悲劇」の意、次行の song heroic ally hold とは「英雄のやうに大膽なる歌」と云ふ意味であります。

第九行にある even these は「此のやうな歌や、話や、望みでさへも」と云ふ意、at length は「終には」と云ふ意、grew cold とは直譯すれば「冷やかに成つた」と云ふこと、即ち消えて了つて慰めがなくなつたと云ふのと同じことです。

Our voices took a dreary tone,
An echo of the dungeon stone,

A grating sound—not full and free,
As they of yore were wont to be;
It might be fancy, but to me
They never sounded like our own.

われ等の語調は恐ろしげに成りぬ、
そは獄屋の石の反響せし故にもあるなれ、
されど吾れ等の輾るが如き聲は——その上の如く、
張りもせねば易くも出でず、
本来の聲の如くに響かざるなり、
わが空想なるかも知らざれど。

took a dreary tone は「恐ろしげな調子と成つた」と云ふ意味であります。第二行の An echo…… は「獄屋の石の反響もあるからだが、しかし實際に於いても音調が變つた」と云ふ意です。第三行の A grating sound と云ふのは「吾れ等

のきしるやうなる聲の響き」の事です。第四行の they は voices を受けてゐます、wont to be の次へは、full and free と入れるとよく分ります。

It might be fancy は「そは私には空想のやうに思はれるが、しかし、本来の調子が消えて了つて、自由に聲が出ないことは事實だ」と云つたのです。full and free は、聲が太く張つて、自由自在に出ると云ふ心持で御座います。

IV.

I was the eldest of the three,
And to uphold and cheer the rest
I ought to do, and did, my best;
And each did well in his degree.
The youngest, whom my father loved
Because our mother's brow was given
To him, with eyes as blue as heaven—
For him my some was sorely moved;
And truly might it be distrest
To see such bird in such a nest;

第四

われは三人の中の長兄なり、

吾には他の者を勵まし樂ましむる義務あり、

故に吾は努めて分を盡しぬ。

他も亦た各々なし得る限り分を盡しぬ。

最も若き弟は父いたくこれを愛しぬ、

そは彼の面影母に似て、

眼は空のごとく蒼かりければなり。――

彼の爲めにわが魂はいたく動きぬ、

あゝ今かゝる可憐の鳥をかゝる巢の中に見る、

吾の深く悲しみしも無理ならぬことぞかし。

第二行の *uphold* は「元氣をつけてやる」の意、*the rest* は「残りの者」即ち

自分より下の弟共の義、第三行の始めの *I ought to do* は「予は爲すべき義務あり」の意、*to do* は上行の *to uphold and cheer the rest* を受けてゐます。
my best は「吾れの力の及ぶ丈」と云ふ意です。第四行の *each* は *the rest* も亦それごとくと云ふに同じく、*his degree* とは「それごとく自分の出来る度合に應じて」の意、ヒズは始めのイーチを受けてゐるのです。第六行の *mother's brow was given* 即ち、「母の俤が興へられてゐた」とは、母に似てゐたと云ふことでもあります。
 第七行、第八行の *To him, for him* は、皆幼弟をさいたのであります。第九行の *some* を受けてゐるのですが、本行の意味は、「事實、わが靈魂は悲しまされてあり得るのであつた」と云ふ事、*truly might be* で「無理のないことだ」と譯すればよろしう御座いませう。また *distrest* と *grieved* の意です。

For he was beautiful as day

(When day was beautiful to me

As to young eagles being free),

A polar day which will not see
 A sunset till its summer's gone—
 Its sleepless summer of long light,
 The snow-clad offspring of the sun:
 And thus he was as pure and bright,
 And in his natural spirit gay,
 With tears for naught but other's ills;
 And then they flowed like mountain rills,
 Unless he could usstage the woe
 Which he abhorred to view below.

げに彼は日の如く美しくしかりき。

(昔雛鷺のいと自由なりしとき、)

日はわれ等には美しくしかりき。

その日や北極の日、夏の過ぎ去るまでは日没を、

見ざるが慣はしの北極の日——

その夏や幾日も眠ることなくして、
 日影は長き日のみ子、雪に掩はれし日の御子。
 かく彼は輝かしく淨らけく、
 その性來の魂は樂しげに、
 その涙は人の不幸の爲めにのみ、
 山の間の小川の如く注がれしが、
 彼泣けば下界の人の厭ふ不幸も、
 慰め和らげらるゝが常なりき。

第三行の As to young eagles being free とは「昔し私が放棄自由の雛鷺のやうであつた時分には」と云ふ意で御座います。第四行の will not see は習慣をあらはす言であつて、その意は「見ないのが慣はしであつた」即ち “is not used to see” であります。polar day とは「北極地の太陽」と云ふ事です。北極の太陽は、一夏

の間少しも没せないので、夜間と云ふものは御座いません、ですから一年の中、九十日だけは晝がついて、後の二百七十日と云ふものは、夜がついてるのであります。

第五行の *summer's gone* は *summer is gone* であります、「夏の過ぎ去るまでは日没を見ないが慣はし」と云ふのは、前述の如く、夏中は日が没することがなくて絶えず晝であるからです。次行の *sleepless summer* と云ふのは、「眠ることなき夏」即ち夜に成ることがないと云ふ意味であります。

第七行の *The snow-clad* 云々は、夏と同格で御座います。第八行の *he* は *youngest brother* を指したのです。 *gay* は、*fair* のこと、*for naught* と云ふのは「for nothing」と同意。第十一行にある *they* は、*tears* を受けてゐます。第十二行の *woe* は *mis* と同じことで、次行の *which* は *woe* を受けてゐます、*to view below* とは「下界にて見ることを忘んだ」と云ふ譯で御座います、つまり此の行は上行の「不幸」と云ふもの、註釋のやうなものであります、*abhorred* とは忌み嫌ふ

ことです。第十一行以下の意味は、彼は泣くことがあるけれども、猥りには泣かない、若し泣けば必ず人の爲めです、しかし彼が泣きますれば、どんな不幸な人でも直ぐ慰めを得ます」と云ふことに成ります。

V.

The other was as pure of mind,
But formed to combat with his kind;
Strong in his frame, and of a mood
Which 'gainst the would in war had stood;
And perished in the foremost rank
With joy, but not in chains to pine.

第五

ひとり
一人の弟もまた心は純らなりき、
されどそは人類と戦はん爲めに作られたるが如し、
彼は身も心も強く、

世間を相手の戦に蒞み、

喜ばしげにその先頭に死せん人。

されど彼は鎖に繋がれて衰へ死したるにあらず。

was as pure of mind は「他の兄弟の如く心は純らかであつた。」との意で御座います。with his kind とは「彼の同類と」の意、即ち「人類と」と云ふことに成ります。had stood and perished. 云々は、「天下を敵としても、踏み止まつて戦ひ、これが爲めに死するを厭はず」と云ふ意、had stood は、would. の意です。

His spirit withered with their clank;
I saw it silently decline—
And so, perchance, in sooth, did mine!
But yet I forced it on to cheer
Those relics of a home so dear.
He was a hunter of the hills,

Had followed there the deer and wolf;
To him this dungeon was a gulf,
And fettered feet the worst of ills.

彼の靈魂は鎖の響きに萎みたり。
われは沈黙の中にその衰へゆくを見ぬ——
わが魂も亦た恐らくは衰へん、
さはれ吾は尙ほ心を勵まして彼等を慰めぬ——
かゝる思ひ出ぞ、われには懐かしき。
彼は屢々山々に狩して、
鹿や狼を侶としたりしが、
此の牢屋は彼にとりてはいたたましの淵、
いたましましもの、中にも傷ましましき足械なりき。

第一行の *their* は上行の *chains* を受けてゐます。第二行の *decline* は、*it* の形容でありませう。第三行の *in sooth* とは *indeed* の意、*did mine* と云ふのは、*The spirit of mine withered too* と云ふ意で御座います。

第四行にある *it* は上行の *mine* を受けてゐるのですから、「わが心を勵ます」とやうに解釋すれば宜しう御座います。cheer の次には *them* があるものと見做して讀むと、意義が通じ易くなります。最後の四行の意味は、「この弟は獵が好きで、狼や鹿やを侶に山野を跋涉してゐたから、監獄のやうな處は、彼に取りては淵である彼は足には枷を嵌められ、何うすることも出来ない」と云ふ事で御座います。worst of *his* とは「不幸の中でも最も傷ましきものだ」と云ふことです。云ふのを忘れてゐましたが、第五行目の *a home so dear* は「しかく親しき家」と云ふことですがそれで「*my home*」と云ふことに成ります、何故となれば、家庭では自分の家庭ほど親しいものがないからで御座います。

VI.

Lake Lemnan lies by Chillon's malls,
A thousand feet in depth below
Its massy waters meet and flow:
Thus much the fathom-line was sent
From Chillon's snow-white battlement,
Which round about the wave enthralis.

第六

レマン湖はシヨンの城壁の傍に在り、
その底は深さ一千尺。

蒼々たる河流これに合流す。

聞くならく測量絲は、しばく、

浪もて打ち圍まれたるシヨンの

雪白の城壁より垂れらるゝと。

第四行の fathom-line とは、「測量線」のことであり、第五行 snow-white とは、雪のやうに白ること、日本でも「雪白」と云ふ字が御座り、battlement とは城壁のこと、which はそれを受けてゐる。enthalls とは surrounds と同く、浪に周圍を繞らされてゐることの意であり。

A double dungeon wall and wave
Have made, and like a living grave,
Below the surface of the lake
The dark vault lies wherein we lay;
We heard it ripple night and day;
Sounding o'er our heads it knocked.
And I have felt the winter's spray
Wash through the bars when wind were high,
And wanton in the happy sky;
And then the very rock rocked,
And I have felt it shake, unshocked,
Because I could have smiled to see

The death that would have set me free.

壁と浪とを續らせる此こそは
げに二重の牢屋。宛がら生者の墓の如く、
湖の水面よりも低く、われ等の呻めける、
暗室に横はりたる。
われ等は日夜獄壁を打つて、
われ等の頭上にひびく浪の聲をきぬ。
思へらく風烈しく吹くや、
冬の水烟は門闥を穿ちて洗ひ、
幸多きみ空に奔蕩し、
こゝしき岩すらも動くならんと。
されどわれは平然として恐を懐かざりき、

蓋し死はわれを自由ならしむるものなれば、
 そを見るは寧ろ喜ばしきことなればなり。

A double dungeon とは、壁と浪とが二重に繞つてゐる獄屋だと云ふ意、第三行の Below the surface of the lake と云ふのは、城が低く深く造られてゐるので、われ等のゐる暗室は、湖水の表面よりはずつと下の方にあるとの意味で御座います。第四行の The dark vault とは「暗き室」の意、第二行の 是は湖水の事を云つたのです。第八行の bars と云ふのは、牢扉の鐵棒であります、本行中にある *walls, when, wind, were* の四字は、アリテレーションと申して、頭字で韻を押ししてゐるのです。

第十行の the very rock の very は「甚だ」と云ふ意味ではなく、「あの」「その」「この」など力をつよめて云ふ時の言葉です、例へば、"This very fire," "Her very hair," などの如くであります。I have felt it shake, unshocked, と云ふのは「私はそ

れを何とも思はなかつた」の意、即ち平然として意に介せざりしと云ふことです、是は上行の浪打つて岩の揺ぐことを云つたのです。最後の二行の意は、「死んで了へば自由になるのだから、私は死を歓迎するのであります、で、浪が荒れて牢屋が壊れて、私は溺れたり、壓せられたりして死んでも差支がない」と云ふ心です。死は人の最も厭ふところではありますが、その死を厭はず、寧ろこれを歓迎すると云ふに到つては、人生の最大悲劇、こんな悲惨な、痛切な決心はありません、此の一節は始めにシヨン城とレマン湖との有様を略叙し、叙景と抒情とが一致してゐます、所謂「景情一致」とはかゝる状態を指すのであります、殊に調子も高く、よく内容と稱ひ、誦すると朗々の韻があります。

VII.

I said my nearer brother pined;
 I said his mighty heart declined.
 He loathed and put among his food;

It was not that 'twas coarse and rude,
 For me were used to hunter's fare,
 And for the like had little care,
 The milk drawn from the mountain goat
 Was changed for water from the moat;
 Our bread was such as captive's tears
 Have moistened many a thousand years,
 Since man first pent his fellow-men,
 Like brutes within an iron den.

第七

これは説きぬ、わが直ぐ下の弟は萎えぬと、
 われは説きぬ、その強き心も壊れたりと。
 彼は食物を厭ひて退けぬ、
 そは食料の粗悪なる爲めにはあらず、
 蓋しわれ等狩人の粗食に慣れ、

かくの如きことに介意することなかりき。

山羊より絞り取る乳は、

城濠より汲み上ぐる水に換へられぬ、

麵麩のしめれるは、人曾てその同胞を、

獸の如く鐵圍の中に置きし以來、

幾千年間注がれし涙にうるほひけん。

第一行第二行の對偶は、Anaphora (頭語重複) と云ひまして、日本支那の詩に似たる句法であります。第四行の始めの It は上行の Iathed 卽はち「嫌ふこと」を指いたので、二つ目の 'twas の it は food を受けてゐるので御座います。

第六行にある the like とは「こんな事」、「そんな事」と云ふ意、had little cure は「少しの注意をした」と云ふよりも「注意をしなかつた」卽はち had not care の意になります。若しも "I had a little care." とありますと、「少しく注意した」と云

ふ事に成るのです。こんな風に「少し」と云ふ場合には、常に *a little* と書くので
す。

第十一、第十二行の意は、獄吏が、その同胞兄弟たる人間を獸類か何ぞのやうに、
鐵の圍かたみの中に押し籠めたと云ふ事に成ります。第十行の *Have moistened* の前には
當然 *would* と云ふ字があつて、「うるはされたであらう」とやうに解釋しなければ
なりません、*was such as*.....云々は、「涙のやうに、そんなにぬれてゐる」と
云ふ意で御座います。

But what were these to us or him?
These wasted not his heart or limb;
My brother's some was of that would
Which in a palace had grown cold,
Had his free breathing been denied
The range of the steep mountain-side,
But why delay the truth?—he died.

I saw and could not hold his head,
Nor reach his dying hand—nor dead,
Though hard I strove but strove in vain,
To rend and gnash my bonds in twain.
He died, and they unlocked his chain,
And scooped for him a shallow grave,
Even from the cold earth of our cave.

されどかゝる食物は吾等にとりて何かあらん、
そはわれ等の身や心を害はざりき。
わが弟の靈は嶮はしき山々のさすらひ子、
かくして自由の息を呼吸せざれば、
宮殿に住むとも悪寒を感せん程の心なりき。
さはれ誠を云はん乎——彼は死しぬ。
われはそを見しも、わが手彼れの頭を支へ、

その死せし手を握ること能はざりき——

われは強ひて二度までもわが羈絆を、

咬み切らんとせしも仇なりき。

彼は死しぬ、獄吏はその鎖をとぎ、

他に處もあるべきを、彼の爲めとて淺き穴を

牢屋の冷土の下に掘りぬ。

第一行の意味は「しかし、吾々共は彼に取つて、こんなものが何であつたか……何でもなかつた、何等の影響も與へない、平氣なものだ」と云ふのです。一行、二行の these は食物を受けてゐるのです。第三行の that mould とは「こんな風の形式」と云ふ意であります。

第四行の Which は上行の mould を受けて、その説明をしてゐるのです。本行と次行とは、That mould that would have grown cold in a palace if his free breathing

had been denied the range of……とするとよく分ります。had grown は would have grown と同じこと、Had his free breathing been denied は、If his free breathing had been denied と同じことであります、こゝに云ふ意味の時は、常に “Had” が文章の始めに置かれてあります。range は excursion の意にとるのです。

第九行の dying hand とは「死にかゝる人の手」若しくは「臨終の手」の意味、dead は dead hand の略で「死人の手」、「死んだ人の手」と云ふ意味です。in vain は常に「何々したが無功であつた」と云ふ意味に解せられます。第十二行の they は獄吏のこと、第十四行の Even……は「所もあらうに、撰りによつて此のやうな處へ……」と云ふ心持で御座います。

I begged them, as a boon to lay

His corse in dust whereon the day

Might shine—it was a foolish thought;

But then within my brain it wrought,

That even in death his freeborn breast
 In such a dungeon could not rest.
 I might have spared my idle prayer—
 They coldly laughed, and laid him there,
 The flat and turfless earth above
 The being we so much did love;
 His empty chain above it learnt—
 Such murder's fitting monument!

われは御情にせめては彼の骸を、
 日光のさす土中に埋め給はれと、
 獄吏に乞ひたりき——されどそは仇なる思ひ。
 かくてわれ心に思へらく、
 自由もて生れ來りし彼の身は假や死すとも
 かゝる牢屋に眠るべうもあらぬものを。

無益なる願言せしこそ口惜しけれ——

獄吏は冷かに笑ひてそこに彼を瘞めぬ。

わが愛弟の骸を掩へる

平たくして草生えぬ生土の上には、

彼の主なき鎖ぞかゝりたる——

そは無惨の最期を遂げし者には却々適はしき石碑。

第一行の them は獄吏のこと、as a boon は「せめてはお情に」の意、第三行の it は前二行の begged した事を受けてゐます。第四行の it は第五行の始めにある That を受けてゐます、even in death とは、「よしや死んでも」の意、第三行の wrought は worked の古き形、本行の意は「わが脳中にかゝる事がふいと思ひ浮んだ」と云ふのです。

第七行の I might have spared..... 云々は、一層のこと、あんな願をせねば

よかつた、したのは惜いことであつた。」と云ふのです。第九行の *flat* は「平たい」こと、*turfless* は「草の生えてゐぬ」こと、*turf* は芝草のことで御座います。第十行の *being* は *young brother* のこと、この次へ *whom* と云ふ字を入れると、意味が容易くとれます。第十一行にある *it learnt* の *it* は二行上の *earth* を受け、*learnt* とは「寄りかゝる」ことであります。そして最後の行の *Such murder's fitting monument* とは「こんな果敢ない死にやうをした弟には、恰度ふさはしき石碑だ」と云ふ意味で御座います。murder とは「被殺害者」のことであります、加害者、即ち殺す人は *murderer* と申すのであります。

* * * * *

XIV.

It might be months, or years, or days—
I kept no count, I took no note—

I had no hope my eyes to raise,
And clear them of their dreary note;
At last came men to set me free,
I asked not why, and recked not where;
It was length the same to me
Fettered or fetterless to be;
I learned to love despair.
And thus, when they appeared at last,
And all my bonds aside were cast,
These heavy walls to me had grown
A hermitage—and all my own!
And half I felt as they were come
To tear me from a sacred home.

第十四

幾月、幾年、幾日經しか——
われはそを計ふること能はず——

われには眼を擧げて、その汚はしき塵を、
拂ふべき希望も持たざりき。

さはれ遂にはわれを解くべき人現はれぬ、

吾は如何にせんとするかを問はず、又何處にゆくかを究めず、

蓋し枷嵌めらるゝと嵌められざるとは、

われに取りては些さかの相違もあらざればなり。

吾は早や失望に馴れ親しめり。

かくて遂に人々現はれて、

わが手枷足枷の解かれしとき、

思へらく、此の城壁は、われには

隠れ家なり——われのみの隠れ家なりと。

さればその時吾れ以爲らく、あゝ人々は吾を拉して、

この神々しき家居より去らしむるか。

I kept no count ^が I can not count と同じことでもあります、第四行の of their...

..... は from eye's..... と云ふ意 dreary note は「涙」と云ふことに成りま

す。to set me free は「私を自由に置く」と直譯するのですが、その意味は「私を

解放する」と云ふ事に成ります。

第六行は、I asked not why they did so, and recked not where we would go. と

云ふ意味に成ります。第七行の length は、at length と同意、第九行の I learned to

love despair とは「私は失望を愛するやうに學んだ」と云ふので、その意味は「失望

ばかりしてゐるので、今はもうそれに慣れて了ひました」と云ふ事に成ります。

第十行の they は後に出て来る Men と一緒に、自分を助け出しに来る人々の事

で御座います。第十一行の all my bonds aside were cast は「私を縛つてゐる鎖が

傍に投げ捨てられた」と云ふ事、「私は解放せられました」と云ふのと同じことです。

第十三行の *and all my own* の次には *hermitage* と云ふ字が略してあります。第十四行の *half* は、“almost” の意、*I felt as they* は、*I felt if as they* と同じことでもあります。To *tear me from* は「離す」ことでもあります。“*tear*” は名詞では「涙」のことではありますが、動詞になると「離す」とか「裂ける」とか譯します、誰でしたか忘れましたが、今は雷名轟々たる英文學者が、“*He tore from her*.” とあつたのを和文に譯して、「彼は涙を流しぬ。」と書いたさうですが、これは大間違で「彼は彼の女と離れぬ。」と譯しなければならぬのであります。

*With spiders I had friendship made
And matched them in their sullen trade;
Had seen the noise by moonlight play—
And why should I feel less than they?
We were all inmates of one place,
And I, the monarch of each race,
Had power to kill; yet, strange to tell!*

*In quiet we had learned to dwell,
My very chains and I grew friends,
So much a long communion lends
To make us what we are: even I
Regained my freedom with a sigh*

蜘蛛と友情を結びては、

われその氣六かしき業を見守り、

また月の夜を遊ぶ小鼠をも見つ——

あゝわれなど、人の如く深く感せざる。

われ等は共に一所に住み、

王となりて殺活の權は手にしながら、

言ふも不思議や、

静かに易けく暮らさんとわれは望みぬ。

われは既に鎖と友となれり、
 その交やいと永かりければ、
 遂に今のごと深くなりたるを、
 自由の身となりしこそ却々に歎はしけれ。

第一行の「蜘蛛と友誼を結んだ」と云ふのは、獄屋の中にはクモが巣を張つてゐたのを、常に見てゐた………」と云ふ意味になるのです。第三行の their は、spiders を受けてゐます。第四行は「私はなせ人よりも、こんなに感じが薄いのだらう？」と獨語的に歎じたのです。

第五行以下第七行の前半までは、「吾々は監獄を出てから、助けて呉れた人々と同一場所に住み、自分はその人々の上に王となりましたから、殺さうと活さうと、その権力は自分が持つてゐるのですが………」と云ふ意味を持つてゐます。power to 三三は「生殺の權」と譯すればよろしい。

strange to tell! とは、いつでも「云ふて見れば不思議だが」とか「云ふのも可笑しいが」とか云ふ意味。第八行の In quiet は「平和な状態に於いて」の意、第十一行の make us what we are: は「吾々をして現場のまゝならしむ」と云ふ意です。本節では、バイロンは、習慣と云ふものゝ勢力のひどいことを説いてゐます。「習慣は第二の天性だ!」と云ふ諺もあります通り、物に慣れると、それを去るのは却々容易では御座いません。失望の上に失望を重ねて、暗い、冷い、地獄のやうな此の dungeon にゐた prisoner は遂に牢屋に慣れて、外へ出るのを好まぬやうに成つたとは、驚く可き習慣の力では御座いませんか。

MY SOUL IS DARK.

My soul is dark—oh! quickly string
 The harp I yet can brook to hear;
 And let thy gentle fingers fling

Its melting murmurs o'er mine ear.
 If in this heart a hope be dear,
 That sound shall charm it forth again :
 If in these eyes there lurk a tear,
 'Twill flow, and cease to burn my brain.

わが魂暗し

わが魂くらし——あゝされど

われは尙ほよく顫へる琴の糸の音を聞く。

汝が白魚の指をして、わが耳の邊に

溶けてさゝやぐ調曲を奏でしめよ。

此の胸若し希望を負はひ、

妙なる響は再びそを誘はん。

此の眼若し涙を湛へば、

そは溢れてわが胸の火を打ち消さん。

is dark とは「暗くなれり」とか「曇つてゐる」とか云ふ意、quickly string とは「早く動く絃」と云ふ義、琴絃のことであります。The harp と同格です。can brook とは「堪へ能ふ」の義。第三行の thy は第二節の第三行にある“minstrel”を指したもので御座います。

第四行の Its melting murmurs o'er mine ear. は頗る面白い句です。「わが耳の邊にかゝる、その琴の溶くらんやうなる囁」とは實に「言へば云つてあります。音色を「溶くるが如し」と云ふのは、餘程面白いです。第六行の That sound は the harp をさし、it は a hope を指してゐるのです。

But bid the strain be wild and deep,
 Not let thy notes of joy be first :
 I tell thee, minstrel, I must weep,
 Or else this heavy heart will burst ;

For it hath been by sorrow nursed,
And ached in sleepless silence long;
And now 'tis doom'd to know the worst,
And break at once—or yield to song.

さはれ告げん、その調粗くして深し、

汝が喜びの記號を現はさざれ。

われ汝に告げん、俗人よ、われは泣き、

此の胸は裂けんとす。

蓋し此の胸は悲みによりて育まれ、

夜も眠らぬ悶の沈黙に疼みつればなり。

かくてわが胸今や不幸にも定めざるべからず、

直ちに裂けんか——はた歌はんかと。

第一行の *But bid* は恐らく、第三行の始めと均しく、"*But I bid thee*" の意であ

りまじやう。第二行の終りにある *be first* は「主とする」とか「重んずる」とか「それを勝たしむる」とか云ふ意、此處では、「主として汝の歡喜のノーテスを現はすな」と云ふ意で御座います。

第四行の "*heavy heart*" と云ふのは「重くるしい胸」と譯すべく、その意は "*dark*"、若くは "*sorrow*" などと大差はありません。第五行目の意は、「わがハートは常に悲歎によつて育てられた、わが胸は悲しみに慣れてゐる、それだから、歡びの譜を奏すると、堪へ難い思ひがする」と云ふ意で御座います。

第六行の *in sleepless silence long* とは「夜も眠らないで、夜もすがら煩悶し、長い〜間沈黙を守つてゐる苦悶」の意、即ち胸が苦悶の爲めに疼んだと云ふ意です。*'tis doom'd to know* とは「知らんことを宣告せられた」の意、即ち「何方かに決定しなければならぬ」と云ふ意味で御座います。

REMEMBRANCE.

'Tis done!—I saw it in my dreams;
 No more with Hope the future beams;
 My days of happiness are few:
 Chill'd by misfortune's wintry blast,
 My dawn of life is overcast;
 Love, Hope, and Joy, alike adieu!
 Would I could add Remembrance too!

紀 念

事果てぬ——とわれは夢みぬ、
 ゆく末輝く希望は最早あらず、
 樂しきわが世は早や短かし。
 不幸の嵐に吹き荒まれて、
 わが生命の曙は曇らされぬ。

戀や、望や、樂みや、さらば分れん、
 あゝ吾はまた徒らに紀念をぞ増しぬる。

表題の“Remembrance.”と云ふのは「記憶」の義、即ち「片身」のことです。第一行の‘Tis done!と云ふのは、「そは爲されたり!」で、取りも直さず、事の成されたこと、「萬事休す」とか「わが事果てぬ」とか云ふ風に譯すればよろしいのです。I saw it の it は、“‘Tis done!”を受けたのであります。

第二行の No more……云々は、I saw no more the future beams with Hope.”とするとよく分ります。Hope の エ、チをキャピタルにしたのは、別に神格を與へたからではなく、只だ日本の新體詩に……「望」は何々と云ふやうに、コーテーション、マークを附けるのと同じ程の意味であります。

第三行の are few とは「少なし」「もう僅かよりない」の義、若しくは「層強めて“are not.”の義に解する方が適當であります。第四行の wintry blast とは「冬の嵐」

とか「寒い風」とか「冷酷なる暴風」とやうに譯しますが、こゝでは、「不幸」と云ふものを、直ぐ風に譬へたのであります。日本でも「生命の綱」とか「月の眉」とか云ふやうに、實物を直ぐ他の物に食つ付けて譬へることは幾何もあるので御座います。

第五行の *is overcast* とは「くもらされた」とか「影を投げかけられた」とか云ふ意、「わが生命の曙は、煌々たる日に照らされずして、吹き荒ぶ寒嵐の爲めに曇らされて、少しも楽しいことはなく、苦しみや、悲しみやが多い」と云ふ意味の事を謳つたのです。Would I. . . . は「あゝわれはまた、それを以て一つの記念となさんと欲す、これで又一つ記念が殖えた譯だ」と云ふ意です。

V. KEATS.

ON THE GRASSHOPPER AND CRICKET.

(Written December 30th, 1816.)

The poetry of earth is never dead :
 When all the birds are faint with the hot sun,
 And hide in cooling trees, a voice will run
 From hedge to hedge about the new-mown mead,
 That is the Grasshopper's—he takes the lead
 In summer luxury,—he has never done
 With the delights; for when tired out with fun
 He rests at ease beneath some pleasant weed.

第五章 キイツ

促織と蟋蟀の歌

(千八百十六年十二月三十日作)

地上の歌は滅びざるなり。

衆鳥は暑さに負けて力衰へ、

冷やかなる樹の間に隠るゝとき、

牧場の籬に聲こそ聞ゆれ、

その聲は促織なり。促織は、

草木茂る夏の日に魁すれど、

そは喜びをもて鳴くにはあらざるなり。

蓋し彼戯れて疲れなば草葉の下にて安かに憩はん。

ジョーン、キイツは十八世紀に於ける英國詩壇の明星で、ウオーヅオースや、コールリツヂや、シエレイなどと共に、天才だと仰がれてゐますが、その作には温雅、幽麗の趣が御座います。著作の量は餘り多くもありませんけれど、十九世紀詩壇の特質たる歴史、美術、文學を歌ふことの端緒を開いたものは、實に此のキイツでありますから、その功に對して没すべきではありません。

促織は今のキリギリスの事で、その啼く聲はギースチヨと聞こえ、蟋蟀は今のコホロギの事で、その鳴く聲はホロホロと聞き取れます。共に悲しい、哀れな聲であります。西洋人には吾々日本人の思ふ程、哀れには感じられないかも知れません。ら織は重にも畑の中又は草叢などで日中に鳴きますが、蟋蟀は野と云はず、床下と云はず、何處でも鳴き、夜晝その哀れな、淋しげな聲を振り絞つてゐます。旅の夜に獨り此の啼き聲をきくのは、あまり快い心地のものではありません。『きりぐす夜寒に秋のなるまゝに……』など云ふ歌は、此の點をよく云ひ盡してゐます。

さてこれから注釋に懸りまじやう。

with the hot sun は「畏日の光を受けて」の意で、夏の暑さを指いて云つたものです。又た new-mown mead は「新たに草刈られし牧場」の意で、mead は meadow の略で御座いますが、詩では韻律の都合で、歌い易いやうに、かく語尾を削つたり中間を略したりすることは間々あります。

Summer luxury は「眞夏の豊盛」とでも譯しまじやうか、これは夏になりますと、草木が青々と茂り出して、世にも盛り榮ゆることを云つたもので、Luxury と云ふ字は、奢侈、逸樂などとも譯します。Take the lead は「魁をなす」と、又 has never done は「決してしない」の意で、done は“take the lead”を受けたものです。

At ease は「安らかに」とか「静かに」とか云ふ意味、pleasant weed 即ち「愉快なる雑草」とは、雑草を擬人して、さも楽しいやうに云ひ做したもので、草自身は

楽しいことも、悲しいこともないのだが、そこが詩です、うら枯れた草を見れば悲しく思ひ、茂りに茂つた草を見れば、楽しく、嬉しく思ふのです。これはつまり、観る人の感情です、理窟を云ふと分らなくなる、詩は理窟ではありません。

The poetry of earth is ceasing never :

On a lone winter evening, when the frost

Has wrought a silence, from the stove there shrills

The Cricket's song, in warmth increasing ever,

And seems to one in drowsiness half lost,

The Grasshopper's among some grassy hills.

地上の歌は曾て絶えざるなり。

淋しき冬の夕まぐれ、霜降りて静けき時、

爐の側に鋭き蟋蟀の聲きこゆ。

草葉茂れる小山の促織は、

聲も惜まず鳴き續けて、

眠より半ば醒めたるもの、如し。

第三列、第四列の組織は少々分り悪いが、これは The cricket's song shrills from the stove there とするとよく分ります、かゝる句法を倒装とも、又は倒置句とも申して、詩ではよく用ゐます。

has wrought a silence は「沈黙を作る」の意で、靜かに雷の置けることを云ふものでしよう、wrought は work の過去分詞であります。shrills は「鋭く聞こえる」といふ意ですから、鋭く鳴くとか、鋭く鳴くのが聞えるとか譯すればよいです。

In warmth increasing ever は「常に熱心の度を増しつゝ」の意ですから、日本語の「聲を惜まず鳴く」と云ふのに似通つてゐます、In drowsiness half lost は直譯すると「半ば失はれたる眠氣」ですから、眠から半ば覺めたといふ意味であります。

此の文章の主格は、The Grasshopper's でありまして、その次には一字 song と云ふ

字が省略してあります。そして among 以下は、促織の副詞的形容句であります。

總評して見ると、別に何處が面白いと云つて、取立てる點もありませんが、何處にやら捨て難い趣があります。衆鳥閉息せるときにも、虫は鳴いて地上の歌をつゞけると云ふ趣考が面白い、殊に最後のグラスホッパーの聲を形容して「眠より半ば覺めたるもの、如し」と云ふのは、實に妙であります、促織の聲を聞くと、眠氣を感ずるものですが、一面から見ると、此の虫の鳴き聲は音律的で、忙しいやうにも聞えます。併し、あのあはれ淋しい蟋蟀の聲に對する感想は、寧ろ日本の古歌の方が、一般に優つてはゐるやしまいかと思はれます。たゞ此の歌は、その修辭的技巧の上で、すぐれてゐると思ひます、難字難語のないことも特長で、平易な點でも此の歌は愛誦せられる資格がありましたやう。

A CHILL EVENING.

(From "the Eye of St. Agnes.")

I.

St. Agnes' Eve—Ah, bitter chill it was!
 The owl, for all his feathers, was a cold,
 The hare limp'd trembling through the frozen grass,
 And silent was the flock in woolly fold:
 Numb was the Beadsman's fingers while he told
 His rosary, and while his frosted breath,
 Like pious incense from a censer old,
 Seem'd taking flight for heaven without a death,
 Past the sweet Virgin's picture, while his prayer he saith.

寒き夕暮 (セント・アグネスの夕へ) 拔萃)

第一

アグネス尊者の待夜よ——そは寒かりき。

梟は羽あるにも拘はらず寒がり、

兎は氷れる草原を顫ひつゝ、跳り、

群羊はその小屋に黙せり。

珠数を計ふる僧の指は打ちしびれ、

寒さに凍りたる其の息は、

宛から古き香爐より立ち上る烟りの、

天女の畫像を横ぎつて永久に天に漂ふごと、

祈禱の間をたゆたひぬる。

St. Agnes' Eve とは「アグネス尊者のお祭りの前晩」と云ふ意味で御座います。

第二行の for all his feathers は In spite of all his feathers の意であります。また a cold はセキスピーヤの『キング・リア』の中に使つてある文句で、「寒がつた」と譯すればよろしい。

第五行の Beadsman とは「祈りする人」又は「僧」と譯すればよろしい。He told his rosary とは「彼はその珠数を計へた」の意であります。第六行の frosted breath と云ふのは、「氷りたる息」の意、冬の夜などに吐く息が凍つて白く見ゆることがあります。これは、そんなのを云つたのであります。

censer は「香爐」の事、incense は「香の烟」と譯するのがよろしう御座いませう。第八行の without a death は「死ぬことなしに」ですから、「永久に」と云ふ意味に成るので御座います。sweet Virgin's picture とは、そこに描いてある天女の畫像の事を云つたのです。第九行の終の句は、「he saith his prayer」と置き更へると解し易いです。

II.

His prayer he saith, this patient, holy man;
Then takes his lamp, and riseth from his knees,
And back returneth, meagre, barefoot, wan,

Along the chapel aisle by slow degrees;
The sculptur'd dead on each side seem to freeze,
Emprison'd in black, purgatorial rails;
Knights, ladies, praying in dumb oratories,
He passeth by; and his weak spirit fails
To think how they may ache in icy hoods and mails.

第二

この忍辱にして聖淨なる僧は祈りつ、
み灯を執りて起ち上り、
悄然として歩みも漫ろに、
廻廊に沿うて歸りゆく。
死人の彫像は宛がら氷れるが如く、
黒鐵の柵の中に立てり。
僧は沈黙の中に祈りつ、
武士や夫人の、

彫像の側を過り、亡き人々の頭巾や鎖帷子やが、
冷ゆればその身は疼まんなど考へて心疲れぬ。

第一行の he は this patient, holy man とは同格でありませぬ。patient は「忍辱」と譯するのが頗ぶる適切で御座います。第二行目の riseth from his knees は、彼の跪ぶきより起き上る」こと即ち「起ち上つた」との意で御座います。

第三行の meagre とは「乏しげに瘦せた」の意、bare-foot とは「足も露はに徒歩にて」の意、Wan とは「蒼白く憔悴して」の意であります。第四行目の I y slow degree とは「ぞろぞろと歩く」こと、with slow steps と同じことでありませぬ。

第五行目の The sculptur'd dead とは、直譯すれば「彫刻せられたる死者」で即ち「死人の彫像」と云ふ義で御座います。seem to freeze とは「寒さに冷えて、氷つてゐるやうに思はれる」の意であります。seem は何時でも「見える」と譯するよりは、「思はれる」と譯する方が遙かに適當で有ります。

第六行 Empirion'd は「禁錮せられて」の意、第七行目の Knights, Ladies は「死者の彫像中の武士や、奥方で」あります、此の字の次の praying……はサブゼクトが、次行の He であります。in dumb aratries とは「黙禱」の事、「沈黙の雄辯」とは面白い句法です。又最後の行の hoods は夫人のかぶれる頭巾、mails は武士の被りたるクサリカタビラであります、それが冷えたら、恐らく武士や奥方の身が冷めたからうと考へる……と云ふ意です。

VI. WORDSWORTH.

THE SOLITARY REAPER.

Behold her, single in the field,
You solitary Highland lass,

Reaping and singing by herself;
 Stop here, or gently pass!
 Alone she cuts and binds the grain,
 And sings a melancholy strain;
 Oh, listen! for the vale profound
 Is overflowing with the round.

第六章 チャルヅナルス

麥莉處女

見よ乙女を。野中に只だ一人、
 さびしき田舎乙女ぞゐる、
 麥を刈りつゝ、歌を歌ひつゝ。
 此處に止らんか、靜かに過らんか。
 處女は麥を刈り麥を束ね、

悲しげなる一節を謠ひぬ。

あはれ聞けかし、深き谷は、

その聲にこそ充ち溢らされたれ。

single in the field は「野中に只一人」の意、第二行の Highland lass は「田舎處女」の意、第三行にある by herself とは「自分自身で」の意。第八行目にある the sound は、a melancholy strain のことでありませぬ。第六行の sings の主格は、上行の Alone she の she で御座らばや。

No nightingale did ever chant
 So sweetly to reposing bands
 Of travellers in some shady haunt
 Among Arabian sands:
 A voice so thrilling ne'er was heard
 In springtime from the cuckoo-bird,
 Breaking the silence of the seas
 Among the farthest Hebrides.

アラビヤの沙漠の中、

人ぞ集まる緑の蔭に、

行商の群を止めなん程美しく妙に、

歌ひたる鶯にはあらざらん。

遙けきへブライドの

波の沈黙を打ち破りつゝ、

春を鳴く杜鵑の口よりも、

未だ曾て聞かれざりしこの聲ぞ鋭き。

No nightingale. は、「旅人をとむる程スウキートな聲で、ナイチンゲイ
ルは鳴かざりしならん」と云ふ、その乙女の聲は、遙かにナイチンゲールなどより
も美しく sweet だと云ふ意味であります。第三行の shady haunt とは「人の集
まる處」そこには草木のかげがあります、所謂『オアシス』の事です。

第四行以下の意は、「處女の歌聲が thrilling であつて、かの郭公のよりも遙かに
鋭い」と云ふのです。第六行の seas とは浪の意です、只だ sea ならば海、複數に
なると waves と云ふ意に成るのです。the silence of the seas は「浪の静けさ」
の意であります。

Will no one tell me what she sings?
Perhaps the plaintive numbers flow
For old, unhappy far-off things,
And battles long ago:
Or is it some more humble lay,
Familiar matter of to-day
Some natural sorrow, loss, or pain,
That has been, and may be again?

何を處女の歌へりと語るものは有らざるか。
あの悲しき韻語や恐らく、

古りし、幸なき、はるかなる事共か、

或るは昔々の戦の事を謳ふならん。

また計らず、そは鄙しの鄙歌、歌ふ所は、

聞き慣れし今日此の頃の出来事、

自からなる悲、死別、苦しみ、

孰れみな曾て經し所、また是より經んとする所なるやを。

Will no one tell me..... は「吾に語るものはあらざるか」との意です。第四行の battles long ago は「ずつと以前にあつた戦争の事共を謳つてゐるのだらう」と云ふ意。第五行の Or is it..... 以下は、「事によると乙女の歌つてゐる歌は、そんなのではなく、卑しい鄙歌であるかも知れない、そしてその内容は、尋常茶飯事で、日頃吾々の見聞してゐる事であるかも知れぬ」と云ふ意であります。familiar matter は「日頃親しい、目に觸れ、耳に聞きなれた事」と云ふ意です。最後の That

has been は「今まであつて、今尙ほ連続せる」の意、may be again は「またこれからも有り得る」と云ふ意であります。

Whate'er the theme, the maiden sang
As if her song comed have no ending;
I saw her singing at her work,
And o'er the sickle bending.
I listend till I had my fill;
And when I mounted up the hill,
The music in my heart I bare
Song after it was heard no more.

その題目の何なるかは知らず、されど乙女は、
果てを知らぬもの、如く歌へり。

われは乙女の鎌もちて身を屈めて、
働きつゝ、謠ふを見たりき。

われは聞きたり心ゆくまで。

われの小山に登りし時、

聲の聞えぬやうになるまで、

吾は胸中に歌をこそ荷ひゆきたれ。

第二行の意は、「彼の女の歌は、果を知らぬものであるが如くに」と云ふ意であり、
 第三行の意は、「働らいてゐる所の」と云ふ意、第四行は、bending over
 the sickle とすると解釋がつけよう、I had my fill とは「腹一杯十分に」或は「心
 ゆくまで」などと譯するとよろしう御座います。第七行の The music は I bare の
 オブジェクト 目的格であります。そして Song は music と同一物、it は song を受けてゐるの
 です。

TO THE CUCKOO.

O blithe new-comer! I have heard,
 I hear thee and rejoice.
 O cuckoo! shall I call thee bird,
 Or but a wandering voice?

While I am lying on the grass
 Thy twofold shout I hear;
 From hill to hill it seems to pass,
 At once for off and near.

郭公に與ふる歌

あはれ 樂しき新客人よ、われは聞きぬ、
 われは聞きて喜びたり。

あはれ 杜鵑、吾はしも汝を、

鳥と呼ばんか、はた彷徨る聲と呼ばんか。

われ草の上に横はりし間

汝が二片の叫びを聞ぬ。

岡より岡へその聲過りて、

或は遠く、或は近し。

new-comer とは、郭公を呼びかけた言葉で、「あゝ新客人よ」と云つたのであります。第三行から第四行へかけての意は「冬はお前の事を鳥と云はうか、また彷徨へる聲と云はうか、迷つてゐます」との意味であります。それは、郭公は聲はすれども姿が見えぬから、果して鳥か、聲が分らない所を謳つたものであります。誠に面白い意見です。

I am lying..... は「草の上へ横さまに臥つてゐた間」と云ふ意味です、西洋人はよく草原へ行くと腹這になつたり、横になつたりします。日本人はこんなことは致しませんが、これは服装の差違がある爲めでしょう。twofold とは、「二きた」

の意、即ち Cu と koo との二片であります。最後の行の意は、「忽然として近づき、忽然として遠ざかる」と云ふことになります。

Though babbling only to the vale
Of sunshine and of flowers,
Thou bringest unto me a tale
Of visionary hours.

Thrice welcome, darling of the spring!
Even yet thou art to me
No bird—but an invisible thing,
A voice, a mystery;

日光照り、花香る、

山の峽にのみ汝れ啼けど、

尙ほわれには齋らし來るよ、

空想多かりし幼時の物語。

よくこそ來つれ、春の寵兒よ、

汝は今尙ほわれにとりては、

鳥にあらじ——されど目にしも見えざる物、

一つの聲、一つの神秘なり。

babbling とは啼くこと、*vale* は「谷」又は「山の峽」と譯すればよろしい。*vision* any hours とは「幼年の空想時代」の意であります。さてこの一節の意は、「汝は常に日光照り渡り、花の香ふ山の峽に啼くが、いつも私の處に幼年時代の空想に成る物語を齎らして來る」と云ふのです。

第二節に參りまして、*Thrice welcome*……と云ふのは、郭公を呼びかけました言葉で、「まあ汝はよく來て呉れた、汝、春の寵兒よ！」と云ふのでありますが、*darling of the spring* とは、郭公を春の愛兒と見做したので御座います。最後の二行の意は、「汝は今尙鳥ではない、鳥とは思はれない、併し、目に見えざる物だ、

聲だ、神秘だ」と云つたのであります。

The same whom in my schoolboy days
I listend to; that cry
Which made me look a thousand ways
In bush and tree and sky.

To seek thee did I after rove
Through woods and on the green;
And thou wert still a hope, a love—
Still longed for, never seen.

われ學び舎に通へりし時、

同じ聲を耳にしき、その叫びは、

われをして草むら、木かげ、み空など、

四方八方を見まもらしめき。

汝を求めてわれはしも屢々、

木の間や、野原を逍遙ひたり、

汝こそはげに望よ、戀よ——

そを常に憧憬れつれど、曾て得ざりき。

The same とは「同じき聲」の意、第二行に「I listend」とありますから、この節は小學校時代のことを思ひ出して言つてゐるのです。それ故に動詞には、過去即ち past tense が使つてゐるのです。a thousand ways とは「此の面彼の面」又は「四方八方」と譯すればよろしう御座います。bush は、小さき木のある、草の生えた、藪のやうな所、「草むら」と譯すればよろしい。

woods は林、木の間などと譯すれば適譯でしやう、或る西洋人は、日本の松林を、「the pine-woods」と英譯しました。最後の二行の意は、杜鵑は、希望や、戀人やの如く、それを常に憧憬、渴仰するけれども、ついぞ手に入れた事がない」と云ふ

のでありませぬ。

And I can listen to thee yet;
Can lie upon the plain
And listen, till I do beget
That golden time again,

O blessed bird! the earth we pace
Again appears to be
An unsubstantial, fairy place,
That is fit home for thee!

われ尙ほよく汝をば聞き、

野邊に横はりて汝をば聞く、

わが心恍としてかの美しくかりし、

黄金時代に立ち返るまで。

あはれ樂しき鳥よ、わが踏む地は、

また空靈縹渺なる

仙境とこそ現はれたれ、

さは汝にとりては適はしの住家。

第三行の do beget は「得なす」こと即ち「回復」の義で御座います。Golden time と云ふのは、「黄金時代」と云つて、理想的の時代と云ふやうな意味を持つてゐます。老年に成つてから、罪のない、邪氣のない、清らかな、樂しかつた少年時代を回顧しますと、それは宛がら極樂や天國やの如くであります、こう云ふのを『黄金時代』と申すのであります。本節の意は、「私は今でも矢張り、杜鵑の聲を草原の上に横はりつゝ聞くが、それを聞くと恍惚として昔の樂しく、美しくかつた、黄金時代に立ち戻るやうな氣がする」と云ふのであります。

O blessed bird! とは昔から杜鵑を呼びかけた言葉であります。此う云ふのは修辭

學の上では「頓呼法」と云つて感極まり、情迫つた時に使ふ句法で御座います。The earth……云々は The earth which we pace appears to be an unsubstantial, fairy place とするとよく分ります。unsubstantial とは、「實質がない、ふわ／＼とした、空靈ひやう／＼たる」と云ふ意であります。それは、「私が杜鵑の聲を聞きまして、黄金時代に立ち返りますと、此の地も亦昔のやうに空靈縹渺たる仙境のやうに見えてゆかしいが、その仙境こそは、實際汝に取つて適當の住家である！」と云つたので御座います。

湖畔詩人ウオーヅワルは實に Romanticism を奉じてゐた一天才でありまして、その作は、皆ローマンチックなものばかりですが、此の “To the cuckoo.” は殊にその特質を現はしてゐます。如何に此の詩が dim, obscure, なかを見れば、その間の消息を解することが出来まじやう。元來カックと云ふものは、昔から「聲はすれども姿は見せぬ」杯と云つて、何となく奥ゆかしく、神秘で、不思議なものや

うに思はれますが、それを詩人が千古の名筆で叙したのですから堪りません、讀んでみると全てもう夢でも見てゐるやうです、これは短いけれども傑作であります。

DUTY.

(FROM ODE TO DUTY.)

Stern daughter of the voice of God!
O Duty! if that name thou love
Who art a light to guide, a rod
To check the erring, and reprove;
Thou, who art victory and law
When empty terrors overawe,
From voice temptations dost set free,
And calm'st the weary strife of frail humanity!

道 義

〔道義の歌〕拔萃)

神のみ聲の峻厳しき姫君よ、

あはれ道義よ、御身若しその名を愛さば、
人を導く光たれ、邪を防ぎ悪を懲す筈たれ。

汝はげに勝利はた大律、

故なき恐怖心のおこるとき、

汝は人を誘惑の中より免れしめ、

苦闘に疲れしか弱き人間を慰めくる。

of the voice of God とは「神のみ聲より生れたる」の意即ち「神が出で来れと云はれて出て来た」と云ふことに成るのであります。Duty は普通「義務」とか「責務」とか、譯しますが、茲では「道義」と云ふやうな意味に書いてあります。道義のやうに峻厳なものを、何故 daughter と云つたかと云ふに、西洋では、女神が随分多くありまして、強いものにも女神の神格が與へてあります、別に不思議ではありません。第三行以下の who は皆な thou へ懸つたものと見てよろしう御座います。thou

とは、duty を呼びかけて云つたのであります。第二行は if thou love thy name "duty" とするとよく分ります。a light to guide は「人を導く光明」の義、a rod to check and reprove とは「邪道に入るを止め、悪を懲らす筈」の義、erring と申すのは、「邪道」の事であります。

第六行の empty とは「空しき」と、即ち「故なき」とか「理由なき」とかの意です。恐れなくともよい時に恐れたりするのは、これ即ち empty terror であります。dost set free の主格を、calm'st. . . . 云々の主格を、皆 thou であります。the weary strife とは「苦闘に疲れた」と云ふこと、frail humanity とは「脆うき弱き人間」の義で御座います。

VII. SIX POETS.

DAYBREAK.

Henry W. Longfellow.

A mind came up out of the sea,
And said, "O mists, make room for me."

It hailed the ships, and cried, "sail on,
Ye mariners, the night is gone."

And hurried landward far away,
Crying, "Awake! it is the day."

第七章 六詩人

あけぼの

ヘンリー、ダブリユウ、ロングフェロウ

風は海より吹き來り、

云ふらく「靄よわが家をつくれ」と。

風は船を祝して云ふらく「帆かけよ、

汝水夫よ、夜は明けたり。」と。

かくて風は忙がしげに陸地に向ひぬ、

「目醒めよ、晝來ぬと」叫びつゝ。

第一行の *came up out of the sea* は、「海から吹き上げて來た」との意、コーター

シヨン、マークの中は、風自身が叫んでゐる言葉、*mariners* は *sailors*, or *seamen* の義であります、*the night is gone.* とは「夜が往つて了つた」の義で、夜の明けたことを云ふのです。*far away* は「すつと彼方へ去つた」の義です。

面白いのは表題の *Daybreak* と云ふ字です、日本では、夜の終つて晝の來ることを「夜明け」と云ひますが、英語では「日明」と云ひます、「Day」、「break」の二字が寄り合つて「曙」と云ふ字が出來てゐるのです、此點が面白い差點であります。

It said unto the forest, "Shout!

Hang all your leafy banners out!"

It touched the wood-bird's folded wing,

And said, "O bird, awake and sing."

And o'er the farms, "O chanticleer,

Your clarion blow; the day is near."

風は森に云ふらへ「叫び、

汝が青葉の旗を振へ」と。

風は林の鳥の翼に觸れて、

云ふらく「あはれ鳥よ、目醒めて歌へ」と。

かくて風は田家にゆきぬ「あはれ雄鶏よ、

汝が鬨をあげよ、夜は明けんとす」と。

It is wind を受けてゐます、leafy banners とは「青葉の旗」のこと、葉をバンナアにたとへた句であります、hang out とは「掲げ」とか「あげ」とか云ひます、俗には「寄寓する」と云ふ譯もあります。第三行の the farms とは單に「野面」とも、又た「農事場」ともいろ／＼に譯がつきますが、茲では「田家」と云ふやうな意味に取る方がよろしう御座いませう。clarion とは a wind instrument made of reeds と辭書にありますから、「草笛」と譯するのですが、こゝでは鶏の鬨のことを譬へて云つた

のであります。is near は「近し」とか「殆んど何々した」と云ふ意です。

It whispered to the field of corn,
“Bow down, and hail the coming morn.”

It shouted through the belfry-tower,
“Awake, O bell! proclaim the hour.”

It crossed the churchyard with a sigh,
And said, “Not yet! in quite lie.”

風は穀物畑に囁きぬ、

「穂を垂れて來ん朝に挨拶せよ。」

風は鐘樓を衝いて叫ぶらく、

「覺めよ、鐘よ、時を報せよ。」

風は呻きつゝ寺院を横ぎりて、

云ふらく「未だし、いまだ靜かに横はらじ」と。

第二行の *hail the coming morn* は「朝に挨拶せよ」の義で普通の *hail* とは少しく違ひます。Bow down とは、「頭を垂れよ」の義、これは穀物が穂を出すと、概してそれを垂れるから云つたのであります。morn は常に詩では「朝」即ち morning の略として使はれますが、これと同じく evening は eve と使ひます。

the belfry-tower は a tower in which a bell hangs と辭書にありますから、日本では「鐘樓」と譯すべきでしやう。proclaim は call out の義、即ち「報知する」とか「呼び出す」とか云ふやうな義で御座います。with a sigh とは「歎息して」とか「溜息を吐いて」とか「うめいて」とか譯する字です。最後の行の “Not yet! in quiet lie.” とは「いやまだく、却て平安に休まぬ、己はまだく墓場へ來て、安らかに大塊の膝を枕に寝るやうな柄ぢやない。」と云ふ意味です。此の “Daybreak.” 一篇の詩、頗る巧みに活動の崇美を歌つてゐます。活動は人生の目的なり義務なりであります。

す。それを「あけぼの」の「風」によせて、實に巧みに歌つたロングフェローの手腕は、感服すべきであります。

由來ロングフェローと云ふ人は、學問のある人で、米國の文學史には特筆大書すべき天才であります。その作で一番に有名なのは “Evangeline.” で、これは高須溪君が譯してゐます。その他名高くて日本の學生のよく知つてゐるのは、「人生の歌」(“A psalm of Life”)と「田舎鍛冶」(“The village Blacksmith.”)なのであります。が、皆、活動、勤勉、現在を楽しむと云ふやうな、極めて健全な思想が現はれてゐます。

TO THE EVENING STAR.

Thomas Campbell.

Star that bringest home the bee,
And sett'st the weary labourer free!

If any star shed peace, 'tis thou,
That send'st it from above,
Appearing when Heaven's breath and brow,
Are sweet as her's we love.

夕の星に寄する歌

トマス、カメル

星こそ蜂をその巢にかへし、
疲れたる人を休ましむれ。
星影もし平和の色を洩らさば、
そは天より汝に送りしなり。
星ひらめくや天の呼吸は、
われ等の戀人のに似て甘し。

第一列と第二列とは、星が主格であります、之は頓呼法ですから、賓辭などはあ

りません。bringest は bring と同じこと、詩では古格に泥みて est をつけるもので
すが、これから下にも爾う云ふ例が澤山あります。selfst は seltest じゃ。labourer
は労働者。is は、it is また sendst は sendest です。第四列の that は上行の it is
に懸るのです。單に Appearing とあるは、when star is appearing 云々となること解
釋し易く、最後の列の文句は、are so sweet as her's breath and brow whom we love
の畧であります。

Come to the luxuriant skies,
Whilst the landscape's odours rise,
Whilst far-off lowing herds are heard,
And songs, when toil is done,
From cottages whose smoke unstirred
Curls yellow in the sun.

星のゆたけき空に照るや、
地上の香かんばしくゆらぎ、

はるかなる獸の鳴聲きこゆ。

仕事終れる時歌聲小屋より聞ゆ、

その小屋の烟は動きもやらで、

日に映えて黄輪を捲く。

第一列の起首へは stars とつけるるとよく分ります。また lowing は牛などの鳴聲で far-off は遙かに隔たつたと云ふ意味です。And songs の次へは are heard が懸ります。Curls yellow と云ふのは、上りもやらぬ烟が小屋のあたりにさまようて、日光中に黄色い輪を捲く意味です。unstirred は、その前に that を置けば分り易う御座います。

Star of love's soft interviews,
Parted lovers on the muse:
Their remembrancer in Heaven
Of thrilling vows thou art,

Too delicious to be riven
By absence from the heart.

戀の星はうつゝの中に、

別れし戀人を逢はさしむ。

戀人のわなゝくらん誓約の、

紀念はみ空の上^{うへ}に在り。

そはいと雅びてあれば、胸より心の

拔出でたりとて裂かれはせじ。

第四列の thou は上行の remembrancer を受けたものです。此の中で解しにくいのは第五、六列ですが、その意味は、人は恍惚の境に入ると、心が胸中から抜け出てしまひますが、誓はかたくて、一度心が抜け出た位では破られない、また心が戻つて來ると、ちやんと元の通りだと云ふことになります。

第一節と第二節とは、實際の有様を描寫し、第二節の戀の星かけを謳ひました。短かい中にも云ふに云はれぬ趣があつて、氣の利いた詩であります。殊に第三節はキャメルの空想が如何に強く働くかと云ふことも見えまして、面白う御座います。想像の少い詩は失敗の作で、誦んでも面白くはありません、詩は想像の多いと否とでその内容の價値が批判せられます。

第三節の如きは全くの空想であります、詩はもと理窟ではありません、詩で理窟を云ふのは間違つゝある、詩には理窟の入ることを許しませぬ。讀者の空想を、作者の空想界に遊ばしむれば可いのです。戀の星が、分れし戀人を逢はしめるなどは、夕ぐれ靜かなるみ空を眺めてゐるとき、空想の逞ましい人の頭に浮ぶことであります。何となく高くて、遠くて犯されない趣の詩ではありませんか。

THE BAREFOOT BOY.

John G. Whittier.

Blessings on thee, little man,
Barefoot boy, with cheeks of tan!
With thy turned-up pantaloons,
And thy merry whistled tunes;
With thy red lip, redder still
Kissed by strawberries on the hill;
With the sunshine on thy face,
Through thy torn brim's jaunty grace;
From my heart I give thee joy,—

徒歩せる子

ジョン、ジイ、ホイッチャア

汝幸あれ、徒歩せる子よ、
鳶色の頬せる小さき人よ。

汝が股引は捲り上げられ、

汝が口笛の調べは樂しげなり。

汝の紅ゐの唇は、小山なる

莓に接吻せしよりも紅し。

華やかなる美しの破帽を洩れて、

汝が顔に日光こそ照れ。

ホイッチャアは、亞米利加詩人中の有名なものである、氏は千八百七七年に生れ、千八百九十二年に死んだ。その作る所はみな、彼の信じてゐたクエーカー宗の臭味を帯んでゐた。彼はロングフェローの如く多く詩作する人ではなかつたが、テニズのやうな詩人であつた。その作の中で『スノウ、バウンド』と云ふのは、最も長い詩で、最もよく彼の特質を發揮したものと云つて可い。

Blessing on thee はエキスクラメーションの一種で、汝幸あれと云ふやうな意味

を持つてゐる、つまり禱りの言葉である。Barefoot boy は徒歩で歩いてゐる子のことであるかくするのは重もに宗教上の儀式、命令であることが多いやうだ。

tan は鳶色のこと、Brim と云ふのは帽子の端のことを指して云ふ。第二行の And は、第二行の with に懸り、以下みな with の字は、最初のとひとしく第二行の Barefoot boy につゞくのである。

第五第六行の口唇の形容は實に旨い、小山なる莓の實に接吻したよりも紅いとは、早速何かに流用出来さうな形容である、譬喩の妙は此處等にある、用ゐる古した「朱唇」とか「朱一文字」とかは最う厭味がさいてゐる、「櫻實を食つたやうだ」でもない、明治の新文學は「莓に接吻したやうだ」でなくてはならぬ。

Jaunty は花やかな、立派なこと、Grace は、温順しいとか、雅びとか、美麗だとか、色々の意味を持つてゐる、共に少年の帽子の形容に用ゐたもので、此の二字は上のブルムに懸るのであるが、ブルムにはアポストロフ、エスが附いてゐるから、

此の二字を *Brim* の所有格にしたらよく分る。

云ふまでもないのだが、第五行の *redder* は、*red* を比較級にした爲めに、*or* を添へたものである。一例せば *I am greater than he* のより大なるより大なると同一の使用法で、一層紅いと云ふ意味になるのである。

これまでは、徒歩せる子の、外觀を叙し來つたのであるが、これから次ぎは、更に進んで自分の感情を抒べてゐる。眼が何うだ、髪が何うだと一々詳しく抒述せず、僅か六七行で、よく小兒の髻を髣髴せしめた處に手腕がある、一寸と考ふべきことである。

I was once a barefoot boy!
 Prince thou art—the grown-up man
 Only is republican.
 Let the million-dollared ride;
 Barefoot, trudging at his side,
 Thou hast more than he can buy

In the reach of ear and eye,—
 Outward sunshine, inward joy:
 Blessing on thee, barefoot boy!

心からわれ汝を娛ましめん。——
 われとてもその昔は徒歩せる子。

大君にて汝はあるなり——成人のみ、
 たゞこれ共和黨員。

かの萬金の車馬の公子をして、
 徒歩せる子よ、歩ましめよ。

汝は彼よりも多く求めよ、
 目の見る限り、耳の聞く限り。——

外なる目光、内なる快樂を。
 汝幸あれ、徒歩せる子よ。

第九行目に至つて、ホイッチャアは、自身の昔を思ひ出して、大に小兒に同情を表し、物の道理分れる大人こそ、共和黨などと云ふけれども、無邪氣な小供はプリンスだと、こゝに替歎の誠意を表してゐる。

Republican と云ふのは、共和政主義を愛する人、若しくばその主義に従ふ人である。共和政府と云ふのは米佛の如き國體を云ひ、日本の如きは立憲君主々義、ロシヤの如きは君主專制主義と云ふのである。共和國にはエンペロルなく、プリンスなく、只だ大統領があるばかり、國人舉つて國民で、その力は平等なのである君主と云ふやうな絶對權力のあるものはない。

The million-dollared ride は冠詞があると人のとに成る。即ち十萬弗もかゝるやうな乗物に乗つた人である。此處では馬と見ても、馬車と見ても構はぬ、漢詩でいふと正に千金騎馬とでも書かるべき處である。

In the reach of ear and eye—は、眼と耳との達する點に於いてと云ふことである。

が、碎いて云へば目の見え、耳の聞き得る限りと云ふ意味に成るのだ。また trudging と云ふのは to go along slowly on foot の義、即ち、徒歩で静々と歩むことである。

小兒は白馬金鞍にこそ跨がらぬが、自由自在に嬉戯談笑して、外には日光、内には歡樂を受け、常に愉快に暮らすことが出来る。ホイッチャアは此の點に着眼して、Outward sunshine 云々の句を謳つたのだ、最後に Blessing on thee の句を再出せしめて、初行と對比せしめたのはよくある句法ながら、頗ぶる感動を強くするやうに思ふ。何となく無邪氣で、美しくして、餘韻の嫋々たる詩である。ともすれば Barefoot boy があらはれて、眼の前にちらちらする、半ズボンのやうなものを穿いて、可愛い／＼足を露はし、顔に鳶色、朱唇は毒にでも接吻したやう眞赤で、眼は全で星の精か何ぞのやうに、きら／＼と輝つてゐる小兒が、活潑に、愉快げに歩いてゐる姿が眼前に泛んで来る。予はこんな子供を見る時は、例もそのインノウセン

スに打たれて、云ひ知れぬ感想が胸を突いて起るのである。ホイッチャアの此の作はよく此の邊の美を謳つてゐる。

SONG.

Harley Coleridge.

She is not fair to outward view
As many maidens be,
Her loveliness I never knew
Until she smiled on me;
Oh! then I saw her eye was bright,
A well of love, a spring of light.

短歌

ハートリー、コールリッチ

わが戀人は世の姫君たちの如く、

その顔面麗はしからず。

われに對ひて微笑むまで、

吾はその愛らしさを知らぬなり。

哀れ其時吾はしも女の眼の輝くを見る。

女の眼は愛の泉、光の源なり。

ハートリー、コールリッチは、千七百九十六年に生れ、千八百四十九年、五十四歳で死んだ詩人である。此の詩は氏が千八百三十三年の作であるとの事だ。

Outward view は外觀の美と云ふことである。第二行の maidens be の次には、上行の fair が略してある。第三行は倒置句であるから、これを轉覆して I never knew her loveliness とするとよく分る。

第五行の then は第四行の「予に面して笑む」を受けてゐる。A well of love 云は、上行の eye 同格で、her eye was bright を敷衍したものである。眼を形容

して「愛の泉光の源」とは面白い句ではない乎。夫の國では兎も角わが國へ持つて來れば新らしい譬喩一寸拜借したくなる句である。

此處までは戀人と自分との關係を説き、戀人に心酔せる狀況を述べたのだが、此の時は女も亦た男に對して微笑し、その星のやうにしほらしい眼を男に注いでゐたのであるが、次のスタンザからは一轉して女の變心を説き、しかも自分は遂に思ひ切ることが出來ないと述べてゐる。男の濃情、女の輕薄にまされる所を謳つて、短かい中には趣の深い詩である。

But now her looks are coy and cold,
To mine they ne'er reply,
And yet I cease not to behold
The love-light in her eye:
Her very frowns are fairer far,
Than smiles of other maidens are.

されど今や彼女の眼差は冷かになりて、

われに答へんとせず。

しかはあれど吾は見では止まじ、

女の眼の中の愛の光りを。

吾が戀人の顰蹙は遙かに美しく、

他の姫君たちの笑よりも。

her looks は「彼の女の眺」即ち眼のことに成るのである。coy と云ふのは、媚を呈せんが爲めに假裝すること、若しくは内氣など、遠慮勝なことを云ふが、此處では手管と解釋した方が可い。

第二行の they ne'er reply の they は、上行の looks を受けたものである。I cease not はせでは止まじの意、もつと碎けて思ひ切れないと取つても構はぬ。lovelight on eye と云ふのは、戀すると眼の色が變り、何とも云へぬ美しい色澤を呈するものだが、その色澤を一種のひらめきと見て恁う云つたのである。ラヴ、ライトとは面

白い句、パースも曾てこれを謳つてゐる。

Her very の very は、「甚だしい」と云ふ意味は持つてゐない、只だ「其の、あの、この」と云ふ意味の very なのである。つまり強勢ならしめる爲めに、「彼女の女のその眼」と云ふのである frowns と云ふのは、顔を顰めたり眉をひそめたり、額を皺めたりすることでありや、顔と云ふ意味になる。つまり戀人なつかしさに假令、戀人がいやな面をしても、それが自分には却つてよくて、あの美しい姫君たちの微笑み給ふのよりも、更に可い、と云ふ意味に成るのである。

世には『男の戀の果敢なさは、旅に捨てゆく情のみ』と謳つた詩人もあるけれども、又此の詩のやうに男の變らぬ心、深き愛を謳つたものもある。兎に角センチメンタルで、コツケットを敢てし易い婦人には、よく此の様な變心があるものだ。變心して了つてからも、男は矢張り元の儘に彼の女を愛してゐる。そして其の女の微笑や、眼中の愛の光やを胸に描いて、皺めた顔と、顰めた眉とを、仇し美姫の笑よ

りも尊く思ふと云ふとは、いと憐れで、詩人の謳ふべき詩材である。

WEST WIND.

(FROM "THE PRINCESS.")

Alfred Tennyson.

Sweet and low, sweet and low,
Wind of the western sea,
Low, low, breathe and blow,
Wind of the western sea!
Over the rolling waters go,
Come from the dying moon, and blow,
Blow him again to me;
While my little one, while my pretty one, sleeps.

西 風

(『公主』より抜萃)

アルフレッド・テニスン

軟かく且つ低く、軟かく且つ低く、

西の海より來し風よ、

低く低く吹き動げ、

西の海より來し風よ。

逆捲く浪を超えてゆけ、

沈みゆく月ゆ来て吹け、

彼を吹きまた吾を吹け、

わが小さき子、わが愛き子の眠れる間。

此の詩は實に調子の可い詩で御座います。如何にも sweet and low, sweet and low と、對句を用ゐてゐますし、後にも同一の言を繰返して、句拍子を取つてゐます。第三行目の Breathe and blow とは「息吸ひ、息吹く」ことであります。wind of the western sea は「西海の風」即ち「秋風」のことで御座います。此の四句は、ま

るで軟かな西風が吹いてゐるやうで、その調子の善さと申したら、他に比類も少ないやうに思はれます。

rolling waters とは「逆捲く浪」の義で御座います、water は「水」であります。waters とすると“waves” 即ち「浪」のことでもあります。dying moon とは「沈みゆく月」の義であります。blow him の him は moon と見てよろしう御座いますやう。

Sleep and rest, sleep and rest,

Father will come to thee soon;

Rest, rest, on mother's breast,

Father will come to thee soon;

Father will come to his babe in the nest,

Silver sails all out of the west,

Under the silver moon:

Sleep, my little one, sleep, my pretty one, sleep.

眠り且つ休め、眠り且つ休め、
 さらば父はやがて汝を尋ね來ん、
 休め休め母の懷に、
 さらば父はやがて汝を尋ね來ん。
 父はその子を巢に尋ね來ん。
 白銀は西海の外に帆駈け去りぬ、
 白銀の月の下。
 眠れわが小さき子よ、眠れ、わが愛き子よ眠れ。

第一行の Sleep and rest, sleep and rest は前節の第一行と同じく、對偶でありまして、調子がよく、調つてゐます。will come の will は、「であらう」と云ふ未來の推定で御座います。out of the west とは「西海の外へ」との意です。

「來此の歌は「子守歌」で、その調子が軟かく、軽く、そして半ば眠たく、恰度子供を寢さすのに適してゐるやうでなければ成りません。外の詩とは違つて、此の詩は實に可愛らしく、そして優しく、美しく、軟風徐ろに吹きて、搖籃の中にすや〜と眠つてゐる兒を吹いてゐるやうな感があります。これはテニソンの傑出した天才を發揮し得た句だと云つてもよろしい。

THE LAST LEAF.

Oliver Wendell Holmes.

I saw him once before,
 As he passed by the door,
 And again
 The pavement stones resound,
 As he totters o'er the ground
 With his cane.

They say that in this prime,

Ere the pruning-knife of Time
Cut him down,
Not a better man was found
By the crier on his round
Through the town.

残んの木葉

オリバア、ウエन्दル、ホルムズ

われ曾て彼を見しとき、
彼は戶外を過りたりき。
また彼を見し時は、
彼は杖をつきて、
踏躑として地上によろけ、
敷石は反響してけり。

彼の盛んにして、

時の木剪の未だ彼を、

刈らざりし前人々は曰ひき、

全市を通じて、

彼の如き幸人は、

布告者と雖ども見出し得ざりき。

第一行の once before は「これより前に曾て一度」と云ふ意、第三行の And again は、and I saw him again の略でありき。The pavement stones とは「敷石」のこととであります。彼が年老いて、杖をついて歩く時分には、よろけたからそれに反響したと云ふのであります。

第二節の They は「人々」の意、they say that から直ふに、Not a better man へ懸るので、その間の文句は、人々の云つた時を現はしたものです。in his prime と

は「彼の成年時代に於いて」と云ふ意、そのプライムは、Ere the pruning-knife : : 云々と同一の時であります。時の木剪刀」とは實に甘く云つたもので、人の次第に年を取つてゆくのは時の木剪刀が、それを刈るのだと譬へて云つたもので御座います。

第二節の下三行は、「彼が一番美人であつた」との意味で御座います。There was not found even a man who was better than he, on his round through the town by the crier. と置きかへるとよく分ります。crier と云ふのは、全市にふれある人、或は宣告者のことであります。

But now he walks the streets,
And he looks at all he meets
Sad and wan ;
And he shakes his feeble head,
That it seems as if he said,
"They are gone."

The mossy marbles rest
On the lips that he has pressed
In their bloom ;
And the names he loved to hear
Have been carved for many a year
On the tomb.

さはれ今彼は街上を歩み、
逢ふ所の人々を見るに、
悄然として蒼ざめたり。
彼のいたくしき頭を振るや、
宛がら「人々は去れり」と、
云はんと欲するものゝ如し。
苔むせる大理石碑は、

彼が心してその能辯を銘せし、

唇の上に立てられたり。

彼が聞かまく欲せし名前は、

墓石の上に刻まれてより

早や幾年を経つるぞや。

Sad は「悲しげ」 wan は「やせて青ざめたる」ことでありませぬ。“They are gone.”

は彼一人老いて死に後れ、他の人々は皆な去つて、死んで了つたと云ふ意です。忘れてゐるが、第二行の at an の次へは that の字を入れると、意味がよく取れます。

第二節は、これは人々の墓のことを形容して云つたもので、「彼が聞いて感銘するやうな演説をした唇の上に大理石碑が立つてゐる、即ち雄辯家は死んで葬られた」と云ふことに成るのです。In their bloom の their は上行の lips を受けてゐます。

for many a year は「多年」と云ふ意、many a year と many years とは全く同義

ですが、冠詞 a を置く時には many を前へ、year は單數にし、さうでない場合には、複數にするのです。

My grandnanna has said—
Poor old lady she is dead

Long ago—

That he had a Roman nose,
And his cheek was like a rose
In the snow.

But now his nose is thin,
And it rests upon his chin
Like a staff;
And a crook is in his back,
And a melancholy crack
In his laugh.

わが祖母なりし人は——

貧にして老いたる夫人、
 久しき前に死したるが——
 云つて曰はく彼の鼻は隆く、
 彼の頬は雪の中の、
 薔薇の花に似たりきと。

されど今彼の鼻は瘦せ、

宛がら杖の如く、

彼の頤の上にかゝれり。

彼の背は鈎の如く曲り、

さびしき憂の影は、

その笑の中にひらめく。

第一行の *has said* から直ぐに、第四行の *that he had* へ懸るので、その間の文句は、祖母のことを説明してあるので御座います。Roman nose と云ふのは「とがり鼻」のことです、それに反して低い鼻は Greek nose と云ひます。cheek を形容して「雪中の薔薇」と云つたのは、頗ぶる面白い名文句であります。

瘦せて細くなつた鼻を staff にたとへるのも面白く、背骨の曲つたのを crook に比べたのも名案です。crook とは「鈎」のことです、日本なら、「腰には梓の弓を張り」とでも云ふべき處です。crack とは「ひらめく」とでも譯しましやうか「笑の中にもメランコリーな影がちら／＼と見える」と云ふ意義なので御座います。此の二節は、前に若い時の面影を説き、後に年老いてからの俤を説いてあるので御座います。その對照が頗ぶる適切で、有功で、讀む者をして今昔の感に堪へざらしめます。

I know it is a sin
 For me to sit and grin
 At him here;
 But the old three-cornered hat,
 And the breeches, and all that,
 Are so queer!

And if I should live to be
 The last leaf upon the tree
 In the spring,
 Let them smile, as I do now,
 At the old forsaken bough
 Where I cling.

われは知るなり、
 此處に彼を嘲るは、
 甚だよからぬことなりと。
 さはれ古き三角帽や、

半股引や。その他の物皆な凡べて、
 如何に可笑しきぞや。

若しわれにして春の日を、
 残んの木の葉となつて、
 生き長らふることあらば、
 人々をして今わが笑ふ如く、
 われの密着る、
 不幸の老枝を嘲らしめよ。

第一行は I know that it is... とするとよく分ります。it は to sit and grin
 に懸るのです。sit and grin とは「輕蔑笑する」こと「嘲る」ことを云ふのです。その意
 は、「彼はもう年老いてゐるのだから、嘲るのは罪だと知つてゐるけれども、服装が實

に滑稽で笑はずに居られない。」と云ふことに成るのです。

第二節の前半の譬喩に、「メタフワア隠喩」と云つて自分即ち「と云ふ人間が、いつの間にか last leaf」と云ふ木の葉に成つてゐる、それでもチャンと分ります。「春の日に新芽を吹き出す時分に、若しも残んの枯葉となつて、木枝にぶら下つてゐるやうに、私がじつと生き長らへてゐたら………」と云ふ意味なのです。Let them の them は矢張前同様「人々」の意、forsaken とは「捨てられた」とか「薄運な」とか「不幸な」とか云ふ意。bough と云ふのは、「小枝」と云ふ意、where は無論 bough を受けてゐます。as I do の do はその前にある smile と同じことで、「嘲る」意であります。何となく寂しい詩で、読み終ると、loneliness を感じます、prime の倏忽と、aged man の無氣力が、まことに面白い對照でありまして、青年の樂しきに引き換へて、老年の衰弱は實に同情に價します。私は此の詩を讀んで「人生の果敢なる」を感じました。あゝ、恐ろしいのは「The pruning-knife of Time. の力であります。

何物も皆なその爲めに衰へ、亡び、なくなつて了ふのであります。ホルムズの「The last leaf」は實によく、此の間の機微を穿つて、誦者の胸に「おびしむ」の感を與へる力が御座います。

西詩の薰終

跋言 二則

一、本書の中には『中學世界』や、『女子文藝』や、『女學界』に載せられた舊稿もある。茲に謹しんで轉載を承諾せられたる博文館、日本葉書會、金曜社の諸氏に謝意を表する。

二、本書の表紙、扉、卷頭欄畫は太田三郎君の揮毫に係るものである。印刷時日切迫の故を以て、充分なる校正を経ることが出来なかつた爲め、原畫の抄味を削ぐこと少なからざりしは、大に遺憾とする所である、併せ記して謝意を表す。

明治三十九年九月廿八日 著者 識

明治三十九年拾月壹日印刷
明治三十九年拾月五日發行

正價

著者 西村 眞次

發行者 篠崎 純吉
東京市京橋區北橫町貳番地

印刷者 本間 季男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

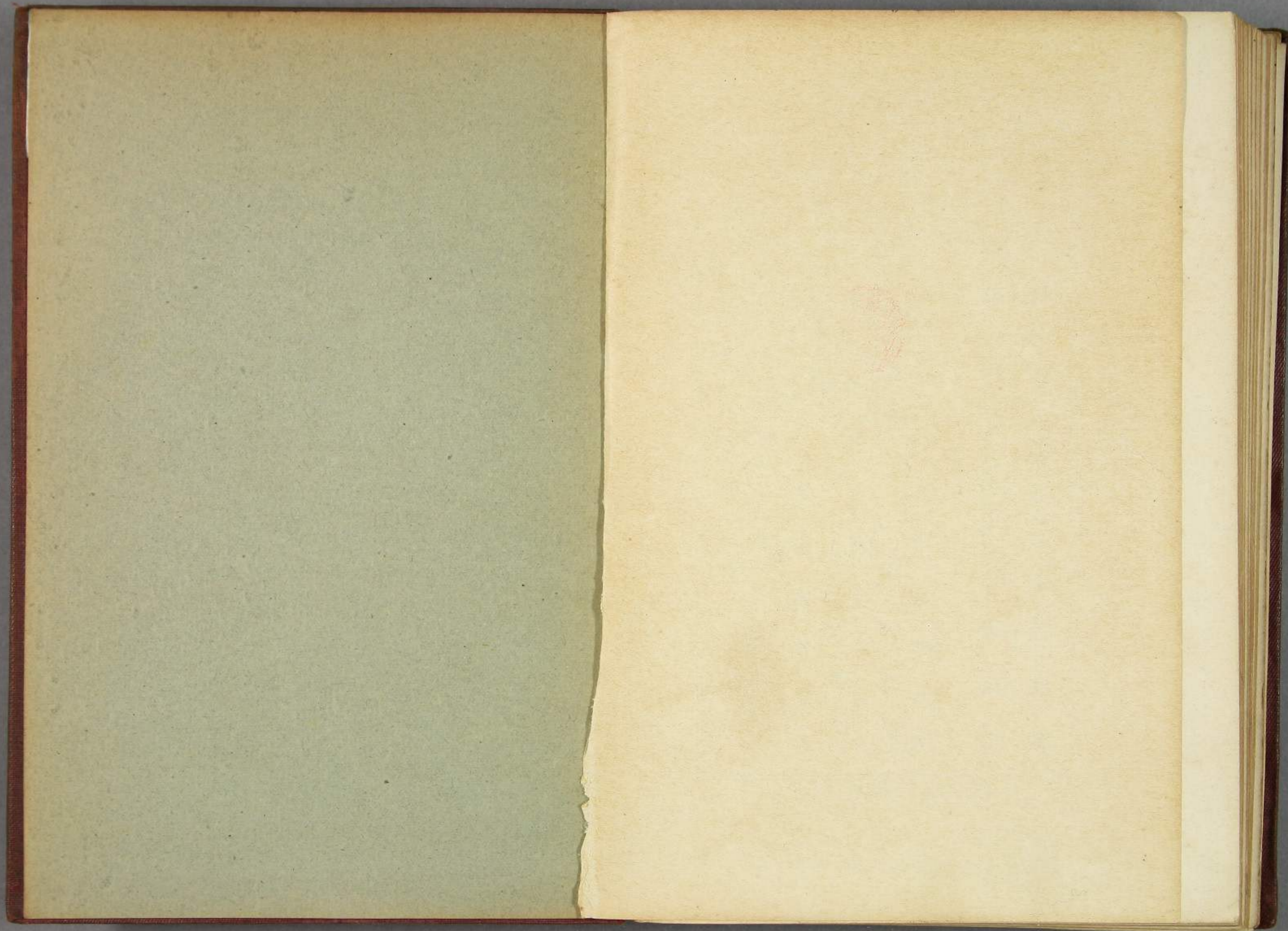


(附奥薰の詩西)

發行所

東京市京橋區北橫町貳番地
電話本局二六二三番
大阪市東區南本町四丁目
電話東三三八四番

發行所
參文舍
積文社



洪谷
題版

玄誠堂